

篠原鳳作全句集

附やぶちちゃん注

「やぶちちゃん注…篠原鳳作（しのはらほうさく）（明治三九（一九〇六）年～昭和一一（一九三六）年）は鹿児島市池之上町生。本名篠原國堅（くにかた）。東京帝国大学法学部政治学科を卒業後、沖縄県立宮古中学校・鹿児島県立第二中学校で教師（公民・英語科担当）を勤める傍ら『ホトトギス』に投句、昭和八（一九三二）年には『天の川』同人となるとともに（この部分は講談社「日本人名大辞典」に拠るが、底本年譜では同人になった時期が明記されていない代わりに、『天の川』への投句は昭和四年には開始されていたこと、昭和五年には同誌の主催者である吉岡禪寺洞選への投句が開始されており、翌六年一月には鹿児島市に『天の川』支部を開設、十月には諸俳誌から遠ざかって禪寺洞の指導へ傾倒していったとあるので、やや不審ではある。無論、正式な同人になったのがその後ということなのであるが、支部を作る人間が同人ではなかったというのは、やはり私には解せない）、昭和八年九月には『天の川』同人らの『傘火（かさび）』に参加して新興俳句運動の旗手となって無季俳句を多く発表した。昭和一一（一九三六）年九月十七日、三十歳で急逝した（直接の死因は公に心臓麻痺とされるが、前駆症状などからは脳腫瘍等の脳神経系の重篤な主因が疑われるように私は感じている）。

私は既にサイト創生期の二〇〇五年七月に筑摩書房「現代日本文学全集 卷九十一 現代俳句集」一九六七年刊の「篠原鳳作集」を底本とした電子化を行っているが、今回は現在知られる総ての句を電子化した全句集である。底本は沖積舎平成一三（二〇〇一）年刊「篠原鳳作全句文集」を用いたが、例によって彼は戦前の作家であるからして、私の特に俳句のテキスト化ポリシー（この理由については俳句の場合、特に私には確信犯的意識がある。戦後の句集は新字採用のものもあるであろうが、それについては、私の

「やぶちちゃん版鈴木しづ子句集」の冒頭注で、私の拘りの考え方を示してある。疑義のある方は必ずお読み頂きたい）に従い、恣意的に漢字を正字化して示すこととした。但し、正字化するに疑義のある部分については、先に電子化した選句集の表記その他を参照したので、完全に「恣意的」であるとは言い難い。なお、編集権を侵害しないために（また私にはあまり重要とは思われないが故に）底本の各句の直下に出る初出データは、他の句との関連で必要と感じられて注で出したものを除き、省略した。

本電子化は私のブログ・カテゴリ「篠原鳳作」で既に終了したもののサイト一括版であるが、このファイルは私の手掛けた最初のPDF版（但し、リンク以外の編集機能がないスタンダード版で作成にはかなり苦労した）であるため、見やすくするために句のポイントを大きくした（底本では長文のもの以外は前書や後書も句と同ポイントであるが、私には見た目がやや違和感があるので同ポイントとしていない）。注の一部も増補してある。因みに公開はブログ・アクセス六一〇〇〇〇突破記念とする。藪野直史【二〇一四年八月日】

篠原鳳作全句集

昭和三（一九二八）年

病中

夜々白く厠の月のありにけり

「やぶちゃん注…底本で最も古い鳳作の句として冒頭に掲げられている。初出は同年二月刊行の『ホトトギス』で初入選句である。当初の俳号は未踏であったが、本句はその後に頻繁に用いた「篠原雲彦」を用いている。但し、両俳号はその後も併用した（底本年譜に拠る）。当時、鳳作二十二歳、東京帝国大学法学部政治学科二年。」

昭和四（一九二九）年

コスモスの日南の縁に織りにけり

「やぶちゃん注…「縁」は「馨」としたかったが、PDFではご覧の通り、転倒してしまうので新字体とした。

「日南」は「ひなた」であろう。鳳作二十三歳、この四月に帝大を卒業して鹿児島に戻っているが、この時期は職に就いておらず（これは当時発生していた極端な就職難という外因によるものと思われる）、年譜上からは俳句へと急速に傾倒していった時代と読み取れる。彼の手帳メモによれば、当時の主な投句俳誌は『泉』『馬酔木』『天の川』『京鹿子』であった。」

慈善鍋キネマはてたる大通り

秋の蚊のぬりつく筆のほさきかな

ままごこの子等が忘れしぬかご哉

「やぶちゃん注」：「ぬかご」は零余子^{むかご}。植物の栄養繁殖器官の一つで、主として葉腋や花序などの地上部に生じるものを呼び、離脱後には新たな植物体となる。葉が肉質となることにより形成される鱗芽と、茎が肥大化して形成された肉芽とに分けられ、前者はオニユリなど、後者はヤマノイモ科などに見られるものである。両者の働きは似ているが、形態的には大きく異なり、前者は小さな球根のような形、後者は芋の形になる。いずれにせよ根茎の形に似る。ヤマノイモなどでは栽培に利用される。食材として単に「むかご」と呼ぶ場合、一般にはヤマノイモ・ナガイモなど山芋類のむかごを指し、ここでもそれと考えてよい。灰色で球形から楕円形を成し、表面には少数の突起があつて葉腋につく。塩茹でや煎り、また、米と一緒に炊き込むなどの調理法がある。零余子は仲秋の、零余子飯^{むかごめし}は晩秋の季語である（以上はウィキの「むかご」に拠った。）

歸り咲く幹に張板もたせけり

「やぶちゃん注」：同年十一月発表。歸り花は初冬の季語であるが、花は特定されない。梅か桜か。「張板」は和服地を洗って糊附けして張り板に張り、皺を伸ばして乾かす板張りのための板。字背に花と和服の色を隠した小春日の景で、なかなか憎い句柄である。」

凍て蜜柑少し焙りてむきにけり

懐ろ手して火の種を待ちにけり

山茶花の花屑少し掃きにけり

「やぶちゃん注」：最後の一句のみ十二月の句会での句。」

昭和五（一九三〇）年

凧くるわの空に唸り居り

「やぶちゃん注…老婆心乍ら、「凧」は「いかのぼり」と読む。」

宮裏の一樹はおそき紅葉哉

「やぶちゃん注…『天の川』（同年一月号）に最初に掲載された句。以上二句は一月の発表（前句は『京鹿子』初掲載句）。

以下は二月の創作や発表作。」

園長の來て凍鶴に佇ちにけり

莖桶に立てかけてある箒かな

「やぶちゃん注…「莖桶」大根や蕪などを莖や葉と一緒に塩漬けにする莖漬けを造るための桶のこと。」

秋の蝶とちてはひらく翅しづか

燈臺の日蔭の麥を踏みにけり

「やぶちゃん注…「燈臺」は底本では「灯台」。筑摩書房「現代日本文学全集 卷九十一 現代俳句集」に載る連作五句の前書「燈臺守よ」に拠った。」

靱蕤踏み處なくほされたり

麥門冬の實の紺青や打ち伏せる

麥門冬の實の流れ來し筈かな

「やぶちゃん注」は「ばくもんどう」と読み、本来は漢方薬に用いる日本薬局方に収録された生薬の一つで、単子葉植物綱クサスギカズラ目クサスギカズラ科スズラン亜科ジャノヒゲ *Ophiopogon japonicus* の塊茎（ところどころ太くなった紡錘形を成す）を乾燥させたもののこと。強壯・解熱・鎮咳作用を持ち、気管支炎・気管支喘息・痰の切れにくい咳に効くばくもんどうせう、月経不順・更年期障害・足腰の冷えに効くうんけいせう温経湯、心臓神経症・動悸・息切れに効く炙甘草湯などに含まれている（主に講談社「漢方薬・生薬・栄養成分がわかる事典」に拠った）。但し、ここはその植物体ジャノヒゲそのものを指している。高さ十センチメートルほどで細い葉が多数出る。この葉が竜の髯・蛇の髯に似ていることから、リュウノヒゲ・ジャノヒゲと呼ばれたとも言われるが、実はこれは「尉の髯」の意で、能面の老人の面「尉」の髯あひひげにこの葉を見立てた「ジョウノヒゲ」が転訛し、「ジャノヒゲ」になったというのが真説らしい。夏に総状花序に淡紫色の小さい花をつけ、子房は種子を一個含むが、成熟前に破れて種子が露出し、青く熟し、鳳作はまさにこの状態を詠じている（以上はウイキの「ジャノヒゲ」を参照した）。

横むいて種痘のメスを堪えにけり

「やぶちゃん注」因みに種痘は天然痘撲滅を受けて昭和五一（一九七六）年以降、本邦では一般には行われていないから、この光景も四十代より下の世代にはピンとこないであろう。

草餅や辨財天の池ほとり

「やぶちゃん注」。「餅」は底本は「餅」。実際にはこの「餅」という正字を使う小説家や俳人は少ないという事実だけは述べておく。確信犯である。私は「餅」という字というより

「井」という字が生理的に嫌いなのである。これは「井」と書くべきである。」

追儼豆閨をたばしり失せにけり

古利根や洲毎洲毎の花菜畑

「やぶちゃん注…「花菜畑」は「はななばた」であろう。回想吟か。無論、菜の花乍ら、この利根の光景は私には明治三九（一九〇六）年に『ホトトギス』に発表した伊藤左千夫「野菊の墓」の一場面のように見紛う——というより、その映画化された、昭和三〇（一九五五）年に公開された木下恵介監督作品「野菊の如き君なりき」（松竹）のプロローグとエピローグの笠智衆扮する政夫老人のシークエンスのように思われてならないのである。」

潰えたる朱ケの廂や乙鳥

「やぶちゃん注…老婆心乍ら、「乙鳥」は「つばくらめ」と読む。「朱ケの廂」というのは寺院か何かで、「朱」を塗った垂木を持った毀った廂部分のアップと、そこに巢食った喉赤き燕の動の景と私は詠む。一読即廃寺を私はイメージしたが、二句後の句が同時詠とすれば、これは外れということになる。」

火の山はうす霞せり花大根

「やぶちゃん注…これは恐らく桜島であろう。」

方丈の縁に干しあり露の臺

「やぶちゃん注…「縁」は「縁」としたかったが、PDFではご覧の通り、転倒してしまうので新字体とした。」

椽先にパナマ編みある良夜かな

「やぶちゃん注…「椽先」は椽先に同じい。「パナマ」パナマ帽。パナマ草の若葉を細く裂いて編んだ紐で作った夏帽子。パナマ草は单子葉植物綱ヤシ亜綱パナマソウ目パナマソウ科 *Cyclanthaceae* に属し、ヤシに似た葉を持つ。主に熱帯に産し、凡そ十二属百八十種を含む。この内のパナマソウ *Carludovica palma* がパナマ帽（この帽子の発祥は実はパナマではなくエクアドルで、「パナマ帽」の名称由来はパナマ運河であるとする説が強く、「オックスフォード英語辞典」では「一八三四年にセオドア・ルーズヴェルトがパナマ運河を訪問したときから一般に広まった」としている。ここはウィキの「パナマ帽」に拠る）の材料であったために同類総体の植物にも「パナマソウ」の名がついたという。自生種は熱帯アメリカと西インド諸島に分布し、高さ一〜三メートルほど、大きな団扇状の葉が広がる。花はサトイモ科に似、果実は熟すと剥け落ちて朱赤色の果肉が現れる。葉を天日で乾燥させ、さらに煮沸した後に漂白したものをパナマ帽の材料とする（ここは「Weblio 辞書」の「植物図鑑」の「パナマソウ」に拠った）。後に宮古島に中学教師として赴任する鳳作は、そこでもパナマ編みを親しく見、盛んに作句している。この句も実は沖繩で詠まれたものではないかと、実は疑っている（実際に四句後には「首里城」の前書を持つ句が出現する。同句注も参照されたい）。私には鳳作といえは「パナマ」、それがまた彼の亜熱帯無季俳句（亜熱帯に所詮季語は通用しない。——この温暖化によって亜熱帯化し、人為によってテテ的に自然のままの季節が破壊され尽くした感のある今の日本にも——である）のシンボルにもなっていると勝手に思っているのである。」

摘草の湯女とおぼしき一人かな

温室をかこむキヤベツの畠かな

古庭やほかと日のある木賊の蕙

「やぶちゃん注…「木賊の蕙」は「とくさのむしろ」では如何にもで、「とくさのえん」もいけない。私は敢えて木賊で編んだ蕙、莫菴で「ざ」と読みたくなるのだが。大方のご批判を俟つ。」

首里城

城内に機音たかき遅日かな

「やぶちちゃん注…鳳作の姉幸は那覇市の歯科医に嫁いでいた。即ち鳳作は宮古に赴任する以前に沖繩に親しんでいたのである。……ああ……タン、タン、という機音と……今はなき素朴な首里城の景観が幻視される……」

「ここまで昭和五（一九三〇）年の一月から三月までの創作及び発表句。」

麥門冬の實のいできたる筈かな

「やぶちちゃん注…二月の「紀元節吟行」と底本にある句、

麥門冬の實の流れ來し筈かな

の改稿。『泉』の四月の投稿句。」

歌人八田翁庵跡

知紀のいほりの庭の土筆かな

「やぶちちゃん注…「歌人八田翁庵跡」はったとものり八田知紀（寛政二一（二七九九）年～明治六（一八七

三）年）は江戸末期の宮廷歌人。幼名彦太郎。通称喜左衛門。号桃園。薩摩国鹿児島郡西田村生。父知直は薩摩藩士。文政八（一八二五）年に京都藏役人として上京、翌年には香川景樹に会う。文政十三年に正式に入門し、やがて桂园の有力者と認められるに至った。京と薩摩を往復する多忙の中、幕末の動乱に身を投じつつ、和歌の詠作や著述に励み、維新後は新政府に出仕して歌道御用掛などを勤めた。御歌所の高崎正風らが活躍の場を築く上で先駆的な役割を果たした人物である。家集に「しのぶ草」、歌論書「しらべの直路」など（以上は「朝日日本歴史人物事典」に拠る）。現在、鹿児島市常盤町に「八田知紀誕生地碑」が建つが、鳳作が訪れたのがここかどうかは不明。」

陽炎や砂に坐りて蛇籠あむ

動物園

檻の中流るる水の落花哉

「やぶちゃん注…現在、鹿児島県鹿児島市平川町にある鹿児島市平川動物公園かと思われる。同園は大正五（一九一六）年九月に鹿児島電気軌道株式会社が鴨池遊園地内に創設した「鴨池動物園」が前身でこの二年前の昭和三（一九二八）年七月に鹿児島市が鴨池遊園地を買収していた。昭和五年当時はまだ「鴨池動物園」と呼ばれていたものと思われる。以上、ここまでの四句は昭和五年四月発表の句。」

聖堂や棕櫚の花散る石の道

「やぶちゃん注…「聖堂」鹿児島市照国町の鹿児島カテドラル・ザビエル記念聖堂（Kagoshima St. Xavier's Cathedral）の明治四二（一九〇八）年に建造された石造り聖堂であろう。本格的な石造りの教会としては日本最初のもので立派な教会であったが、昭和二〇（一九四五）年四月八日、ミサ直後に空襲によって焼失している。現在のものは三代目でザビエル日本渡来四百五十年を記念して平成一一（一九九九）年に竣工したコンクリート製である（同教会公式サイト[の「聖堂」の記載に拠った](#)）。

鳳作の父は医師で、明治三九（一九〇六年）年鹿児島市生まれ。西南戦争で官軍に従っている。熱心なキリスト教信者でもあった。」

春愁のうなじを垂れて夜の祈り

「やぶちゃん注…「垂」の字の旧字体「垂」をまともに使っている作家は私の知る限りでは非常に少ない。以下、この注は略す。」

行く春や法衣ガウンの裾のうす汚れ

「やぶちゃん注…これら三句は単なる傍観者の嘯目吟とは思われない。明らかにミサの景であり、鳳作はそこに信者としておられるとしか思われない。但し、それが熱心な信者としてかといえは莊嚴なミサの景を詠むに「法衣の裾のうす汚れ」をクロース・アップしてしまいう程度に熱心ではないと私は見る（この汚れはステイグマとは到底思われぬ）。年譜によれば、誕生の明治三九（一九〇六）年の項に鳳作（本名は国堅）の『父政治は養父の後を継いで医者となったが、西南の役に官軍に従軍して熊本の大激戦で負傷、熱心なキリスト教信者であった』（政治は昭和一一（一九三六）年一月に八十三歳で亡くなっている。因みにこの八ヶ月後の九月十七日には鳳作自身が逝去する）とあり、父が熱心であればこそ彼もミ

サに幼少時よりミサに馴染んでいたに違いなく、さればこそ鳳作の後の句にはクリスマスのミサを詠んだものやキリスト教的素材を確信的に用いた句もある。しかし、例えば逝去の年譜記事には『葬儀は神式で行われ』たとあり、句や残された文章にもそうした信仰告白は管見の限りでは私には全く認められない。教会には親しんだものの、彼個人とキリスト教の結びつきは信仰の部分では深いものであったように思われぬ（私には鳳作のキリスト教関連の俳言は一種の異国趣味やキリスト教的なシンボリズムへの知的関心（信仰ではなく）による匂いづけの印象が強いように感じられる）。その辺につき、そうでないとなれば、御存じの方、是非ともご教授を乞いたい。」

地蟲穴ありて箒を止めにけり

「やぶちゃん注…「地虫」は底本「地虫」。迷ったが、正字化した（「蟲」という正字を生理的に嫌う作家が多い）。地虫は昆虫の幼虫の類型の一つで一般的にはしばしば見かけることの多いコガネムシ・カブトムシ・クワガタムシの幼虫などの丸まった不活発な甲虫幼虫総体を指す。」

日當れる障子のうちや二日灸

「やぶちゃん注…「二日灸」陰暦二月二日にすえる灸で、この日に灸をすえると年中息災であるという（八月二日にすえる灸にもいう）。ふつかやいと。春の季語。昭和五（一九三〇）年の陰暦二月二日は三月七日火曜日に相当する（但し、これがその新暦二月二日木曜日に行われていないという確証はない）。」

一炷のまづかぐわしや二日灸

「やぶちゃん注…「一炷」は普通は「いっしゆ（いっしゆ）」と音読みして、香などをひとたきくゆらせること。また、その香指すのであるが、私は言わずもがな乍ら、ここは「ひとさし」と訓じたい。」

螢の灯るを待ちて畦歩く

「やぶちゃん注…「灯」はしばらく底本の用字のママとした。」

螢のやがて葉裏に廻りたる

「やぶちゃん注：「廻」は正字としたかったが、PDFでは表示不能なので新字体とした。」

春月を仰げる人の懐手

春月や道のほとりの葱坊主

螢火のついと離れし葉末哉

麥笛を鳴らし來る兒に道問はん

麥笛を馬柵に凭れて吹きにけり

「やぶちゃん注：「馬柵」は「うませ」と訓じ、馬を囲っておく柵の意の万葉以来の古語である。

（このまでの十三句は五月の創作及び発表句。）

露の葉を傾けてゐる蜥蜴哉

麥の穂を挿しある銀の花瓶かな

花棕櫚や園丁につと夏帽子

「やぶちゃん注：「花棕櫚」棕櫚の花で一応、単子葉植物綱ヤシ目ヤシ科シユロ属ワジユロ

Trachycarpus fortune の花に同定しておくが、実際にはシュロと言っても多様なシュロ属を指しているケースが多い。雌雄異株であるが稀に雌雄同株も存在する。雌株は五〜六月に葉の間から花枝を伸ばして微細な粒状の黄色い花を密集して咲かせる（果実は十一〜十二月頃に黒く熟す。ここまではウイキの「シュロ」に拠った。「につと」が如何にも諧謔味に富み、しかも巧まずしてリアリズムであると同時に奇妙な南洋幻想をも孕んだ佳品であると思う。」

蜘蛛の陣露をくさりて大たるみ

溶岩山イワに梟鳴ける良夜哉

傘焼く火岸の人垣照しけり

「やぶちゃん注…以上、六句は六月の創作及び発表句。」

城山や篠踏み分けて苺採り

「やぶちゃん注…「城山」言わずもがなながら、鹿児島市中央部に位置する山（標高一〇八メートル）。西南戦争最後の激戦地として知られる。クスノキ・シダ・サンゴジュなど分かっているだけで六百種以上の亜熱帯植物が自生する。「苺」これはバラ目バラ科バラ亜科キイチゴ属 *Rubus* のそれであろう。」

神の川流れ來りし捨蠶かな

「やぶちゃん注…鹿児島県鹿児島市・日置市を流れる本流の二級河川。「捨蠶」すてご。養蚕に於いては病気又は発育不良の蚕は野原や川に捨てられる。それを言う。季語としては春であるが、本句は七月の発表句で鳳作は明らかにそれ（季語）を意識していないと私は思う。私は本句一読、「古事記」の哀れなる蛭子をイメージした。」

たまたまの晝寝も襷かけしまま

たまたまの晝寝も襷かけながら

「やぶちゃん注…前者は『七高俳句会』（昭和五年七月発行）の句形、後者は『阿蘇』（昭和五年十月発行）所収の同改稿。」

日を並^ナめて傘やく臺場築きけり

傘焼や音頭取の赤ふどし

傘火消ゆ闇にもどりし櫻島

「やぶちゃん注…この三句は、鹿児島の大行事の一つとされる曾我兄弟の仇討に由来するとされる伝統行事「曾我どんの傘焼き」の情景かと思われる。私はこの祭りを全く知らないのので、「鹿児島三大行事保存会」公式サイト内の「[傘焼き](#)」から引用しておく（一部の改行を省略させて戴いた）。『その昔、薩摩では「郷中教育」という独特の教育制度があ』り、『そこでは、子供達を「稚児（チゴ）」「二才（ニセ）」「兄（アニヨ）」と分け、年下の者は年上の者に従い、年上の者は年下の者に教育をし、武士としての教養、人徳、武芸などを学び人間性を磨いた。そこで主に、教えたものは、

1. 「主君に対する忠」
2. 「親に対する孝」
3. 尚武（武術・武事により徳を尊ぶ）で、あった。

子供達は「郷」ごとに集まり、身体を鍛え勉学に励んだ。その教育の一環として「曾我兄弟の話」が用いられた。「曾我兄弟の話」とは、敵討ちの話である。二人が幼い頃、父河津三郎は工藤祐経に討たれた。やがて彼らが成人し、父の仇討ちを成し遂げ『十七年後の建久五（一一九四）年五月二十八日のことであった。』その長きにわたり、親の事を忘れずついに仇を討ったことが、親への孝を教える教材として用いられたのである。兄弟は源頼朝に随行して富士の裾野で巻き狩りを行った工藤祐経を討ち取り永年の大願を成就した。その時、雨の降る中、傘を松明かわりにして陣屋を進んだという。この故事ならい、「傘焼き」を行い、曾我兄弟の孝心を偲び青少年教育に資質にしようとしたのが「曾我どんの傘焼き」である。薩摩では『旧暦の五月二十八日』が近づくと、子供達が家々をまわり、古

くなくなった唐傘を集めて、甲突川や磯の浜に持ち寄り、うずたかく積み上げ、辺りが宵の闇に包まれる頃火を放ったそうだ。唐傘は防水のために油が塗ってあったためその炎は高く燃え上がり夜空を焦がした。戦後、和傘が不足し開催を危ぶまれた時期もあったが、現在、鹿児島三大行事「曾我どんの傘焼き」保存会が中心となり、毎年』七月に開催されているとある。[こちらの「鹿児島市医報」に載る俳句記事の記載](#)によると「傘焼」で「かさやっ」と読み、現在では『傘を集めにくいこともあり、昔のように、どこの町村でもやっているわけでは』ないとあり、往時に盛んに行われていた頃には、『禪に白鉢巻の裸ん坊たちは、燃え上がる傘火を回りながら、曾我兄弟の歌を大声で歌い、血をおどらせたもので』あったと記されておられる。

因みに、昭和五年の旧暦五月二十八日は六月二十四日である。もし、実際に旧暦で行われていたとすれば、これらの句群はその日に行われた祭りの囀目吟と考えられるが、当時、旧暦で行っていたかどうかは確認出来ない。ただ、新暦五月二十八日の景となると、七月の俳誌に投稿するものとしては少し時期外れではあり、現在の保存会の七月のそれではタイム・ラグがあつてあり得ない

なお、ここまで「たまたまの」の別稿を除き、以上は七月の創作及び発表句。」

傘焼

破れ傘さし開きてはくべにけり

「やぶちゃん注…八月発行『天の川』掲載句。前注した「曾我どんの傘焼き」の囀目吟である。ここまで投句を引く張れるとなれば、やはり昭和五年六月二十四日、旧暦五月二十八日に同祭りは行われたものではあるまいか？」

霰すと父に障子をあげ申す

「やぶちゃん注…本句は鳳作の俳句手記にあるもので、伝統俳句ならば「霰」はあられ晩冬の季語であるから当季（この句は八月の句群の中に配されている）ではなく、回想吟に仕分けられてしまうところだが、これぞ歳時記の非科学性（というより私は歳時記の似非博物学的性格から非博物学性と言いたい）で、気象観測では直径が五ミリメートル以上のものを「霰」コホシ、五ミリメートル未満のものを「霰」と言う。

気象学では霰は「氷霰」と「雪霰」に区別され、「氷霰」は一般には透明で気温が摂氏〇度以上の初冬に降るが、夏でも降るときがある。また、「雪霰」は一般には白色で気温が摂

氏〇度以下の時に雪と一緒に降ることが多い（「氷霰」に比べると粒は脆くて地面に落下すると跳ね返って割れることもある。ここまでは「NHK放送文化研究所の「放送現場の疑問・視聴者の疑問」にある『[「ひょう」と「あられ」の違いは？」](#)を参考にした）。則ち、実際には「霰」は冬にも降るものの、春から秋かけて特に夏の終わりにも降るのである。事実、大きな「雹」を歳時記は夏にしている。ならば、直径五ミリ以下のものがパラパラと夏に降っても伝統俳句は非科学的に「雹」とせよ「夏霰」とせよ言うのであろうか？私には本句はまさに昭和五年の夏の終わり、積乱雲から降ってきた「霰」を詠んだものと思う。底本編者も無論、手記の位置とそうした確信犯から堂々とここに本句を挟んでいるものと考え。無季俳句へ向かいつつあったに違いない鳳作のまさに確信的句であると思はしうのである（私は元来、自由律俳句から入った人間で季語に対する強い不信感を持っていることをここに表明しておく。）」

燕の巢覗きて菖蒲ふきにけり

ほほづきの青き提灯たれにけり

蝶々の眩しき花にとまりけり

子蟪蛄しきりと斧をなめにけり

鮎の宿氷の旗をかかげたる

田草取日除の笹を背負ひをり

滝の道しだいにほそし道をしへ

「やぶちちゃん注：「道をしへ」 鞘翅（コウチュウ）目オサムシ亜目オサムシ上科ハンミョウ科 Cicindelidae に属する昆虫或いはその中の一種で日本最大種（体長約二〇ミリメートル）のハンミョウ（ナシハンミョウ） *Cicindela japonica* の異名である。参照したウィキの「ハ

ンミョウ科」によれば、『成虫は春から秋まで見られ、日当たりがよくて地面が湿っている林道や川原などによく生息するが、公園など都市部でも見られる。人が近づくとも飛んで逃げるが』、「一、二メートル『程度飛んですぐに着地し、度々後ろを振り返る。往々にしてこれが繰り返されるためその様を道案内にたとえ「ミチシルベ」「ミチオシエ」という別名がある』とある。」

砂つぶて飛ばしそめけり蟻地獄

大いなる柱のもとの蟻地獄

「やぶちゃん注…以上は八月の創作及び発表句。但し、最後の四句は「俳句手記」とのみあり、八月の句やありやなしやは判然としない。」

鬼灯を鳴らしつつ墨すりにけり

はしたなき晝寢の様をみられけり

大いなる誘蛾灯あり試験場

端居して闇に向へる一人かな

玉里邸

誘蛾灯築地のすそに灯りたる

「やぶちゃん注…「玉里邸」は旧島津氏玉里邸たまさと（現在は鹿児島市管轄の庭園）。鹿児島市の

北部丘陵愛宕山の西麓に位置する。島津家第二十七代当主島津斉興なりおき（寛政三（一七九一）年～安政六（一八五九）年）によって天保六（一八三五）年に造営されたと伝わり、敷地

東半部にはかつて主屋建築群が建っていた平坦地があり、「上御庭」と呼ばれる池庭が造られた。一方の西半部は一段低くなっており、「下御庭」と呼ばれる庭園と茶室が造られた。玉里邸の諸建築は明治一〇（一八七七）年の西南戦争で焼失したが、斉興の五男島津久光（文化一四（一八一七）年〜明治二〇（一八八七）年）が再築し、明治二二（一八七九）年に棟上した。後の昭和二〇（一九四五）年に太平洋戦争によって茶室・長屋門・黒門を残して建造物は焼失、庭園は灯籠などが破損、昭和二六（一九五二）年に鹿兒島市が同邸跡地を買収、昭和三四（一九五九）年に鹿兒島市立鹿兒島女子高等学校が移転したが、この際、「上御庭」と呼ばれた庭園部は一部を残して校舎及び運動場に改修されたものの、「下御庭」と呼ばれた部分は大きな改変を受けていなかったことから昭和四九（一九七四）年に「玉里邸茶室付庭園」として鹿兒島市記念物（名勝）に指定された（以上は「文化遺産オンライン」の「[旧島津氏玉里邸庭園](#)」の解説に拠った。）

枇杷賣の櫻島の乙女の跣足かな

烏瓜藪穂おどりて引かれけり

鰯雲月の面てにかかりそむ

かなかなの遠く鳴き居る月夜哉

かなかなの遠く鳴きゐる良夜哉

「やぶちゃん注」前者は底本では昭和五年九月の句会句稿の句形とあり、後者は昭和五（一九三〇）年十一月発行の『泉』への投句稿とする。」

十字架もぬぎて行水つかひけり

「やぶちゃん注」本句は「俳句手記」に所収とのみある。本句（次が十月の投句稿であるから九月作とは断定出来ない）と前の「かなかなの遠く鳴きゐる良夜哉」を除き、ここまでは九月の創作及び発句。」

誘蛾灯門内深く灯りけり

「やぶちゃん注：前の「玉里邸」と前書する「誘蛾灯築地のすそに灯りたる」と同じ時と場所での囁目吟であろう。」

葭の柄のうすうす青き團扇かな

萍のほどなく泛子をとざしけり

「やぶちゃん注：「萍」は、狭義には単子葉植物綱オモダカ目サトイモ科ウキクサ亜科ウキクサ *Spirodela polyrhiza* 若しくは別属のアオウキクサ属アオウキクサ *Lemna aukikusa* ・アオウキクサ属コウキクサ *Lemna minor* ・アオウキクサ属イボウキクサ *Lemna gibba* などを一般に総称する。こうしたウキクサ類で浮遊しているのは葉と茎が融合した葉状体と呼ばれる部分で概ねどの種でも楕円形で、浮遊するために葉状体の内部にある気室と呼ばれる部分に空気を含んでいる。但し、ここでは水面に浮かぶ水草という意味の広義な一般名詞であろう（次注の最後を参照）。

「泛子」は「うき」（浮子）と読む。当初、これを「萍」を狭義のウキクサ類と思い込んで、『私は親しくウキクサ類を観察したことがないので、ウキクサが周日（？）現象を起こすものかどうかは知らない。但し、気孔を通じて気室から空気を出し入れするのであるから、水面に吸着して（事実、ウキクサの裏面は吸着しやすい構造になっている）浮いた感じで盛り上がって見えたウキクサが、呼吸か光合成が若しくはもっと別な器質的な何らかの理由によって気孔から空気を押し出して（水中に垂れ下がった根には根帽^{こんぼう}という少し膨らんだ鍾もついている）少し、水面と平行にぺったり張り付いた感じになることはあるのである。そうした景を観察したのがこの句ではあるまいか？』などというトンデモ博物学をやらかしてしまったが、何のことはない、これは本物の釣の浮子である。浮子を隠してしまふほどの大きさであるのだから、この「萍」はやはりウキクサの類ではなく、もっと大型の例えば、双子葉植物綱フトモモ目ヒシ科ヒシ *Trapa japonica* であるとか（私は鹿児島の大隅半島の山の中の池で繁茂したヒシを幼少の時に見た）、単子葉植物綱ユリ目シズアオイ科ホテイアオイ *Fichornia crassipes* などの類であろう。」

傘焼に篠の雨とはなりにけり

「やぶちやん注…十月発行『天の川』掲載句。前注した「曾我どんの傘焼き」の囀目吟である。祭りが六月二十四日だったとすれば、四ヶ月も前の囀目で通常の伝統俳句誌ならば、季違いで、違和感があるろう。鳳作は前に掲げた傘焼きの句を同『天の川』の句会で詠んだり、同八月号にも投句しており、鳳作は余程この祭りが好きだったものらしい。同時に後に本格的な無季俳句に傾斜する彼はこうしたあえて初夏の景を秋に持ち出すという詠みっぷりの中にも既に示されているというべきであろう。」

濱木綿に籐椅子出してありにけり

うつしみの裸に焚ける門火かな

わらんべの裸にかかむ門火かな

「やぶちやん注…「門火」は「かどび」で、盂蘭盆の死者の魂迎えと魂送りするために門前で焚く迎え火と送り火をいう。」

水郷川内

芦の間に門火焚く屋のありにけり

「やぶちやん注…「川内」は「せんだい」と読む。現在の薩摩川内市。鹿児島県北西に位置する県内最大面積を持つ北薩地区の中心都市である。東は鹿児島県のやや北西部、鹿児島市の北西約四〇キロメートルに広がる川内平野のほぼ全域を市域とし、西は東シナ海に面している。本市の中心市街地は本土側市域の西部にあるが、海沿いではなく、海岸から一〇キロメートルほど内陸に入った場所にある。東市域を東西に流れる川内川は九州で筑後川に次いで二番目の流域面積を持つ一級河川であり、市域東部には二〇〇五年にラムサール条約指定湿地に登録された藺牟田池いむたいけ（薩摩川内市祁答院町藺牟田にある直径約一キロメートルの火山湖で「藺牟田池の泥炭形成植物群落」として国指定史跡名勝天然記念物でもある）がある（以上は主にウィキの「薩摩川内市」に拠った。）」

新涼や再び青き七變化

「やぶちゃん注…「新涼」は初秋の涼しさを指すから、「七變化」とは秋に向う山野の色の気配が瞬く間に複雑微妙に日々変化してゆくのを詠んだものであるうか。」

組みかけし稻架の蔭なる晝げ哉

一鉢の懸崖菊に風がこひ

「やぶちゃん注…「懸崖菊」は「けんがいぎく」で、菊を盆栽仕立てにして幹や茎が根よりも低く崖のように大きく長く垂れ下がらせて作ったものをいう。「こひ」は無論、「戀(恋)ひ」である。

「こゝまでは十月の創作及び発表句。」

花葛や巖に置かれし願狐

「やぶちゃん注…「願狐」稲荷でよく見かける眷属像であるところの狐の置物のこと。四句後の句柄からは桜島での囑目吟か。」

颯風や坊主となりし青芭蕉

蟻の列御輿もありて續きけり

薩摩路や茶店といはず懸煙草

「やぶちゃん注…「懸煙草」採取したタバコの葉を縄に挟んで屋内や軒先に吊るし、乾燥させること。また、その葉をいう。有季俳句では秋の季語とする。」

熔岩を傳ふ笥や葛の花

「やぶちゃん注…以上五句は十一月の発表句。」

畫家探元の墓に參る

道をしへ塚の上より翔ちにけり

「やぶちゃん注…「畫家探元」とは江戸中期の画家木村探元（延宝七（一六七九）年〜明和

四（一七六七）年）のこと。名は時員、通称は村右衛門、別号に大弌・三晝庵。薩摩出身

で江戸にて狩野探信（守政）に師事、雪舟にも傾倒して室町風の水墨画を得意とし、鹿児島

藩御用絵師を勤めた。享保一九（一七三四）年には法橋となつてゐる。作品に「富士山図」、

著作に「三晝庵談話」がある（ここまでは講談社「日本人名大辞典」に拠る）。墓は鹿児島

市小野町の幸加木神社境内にある。クマタツ1847氏のブログ「わたしのブログ」内の

「[小野町歴史散歩（その二）木村探元の墓（4）](#)」で、詳しい位置と一風変わった彼の墓石が見られる。」

滝川を涉りて灯す祠哉

「やぶちゃん注…確定ではないが、前の木村探元の墓所の直近（幸加木神社境内）には滝と祠があることが個人サイト「滝巡りのページ」の「[幸加木神社の滝（鹿児島県鹿児島市）](#)」の写真によつて分かる。ここでの詠か。」

いろいろの案山子の道のたのしさよ

下宿生活

合住みの友をたよりや風邪籠り

「やぶちゃん注…以上四句は昭和五（一九三〇）年十二月の発表句。」

昭和六（一九三二）年

探梅の馬車ゆるることゆるること

「やぶちゃん注…本句は同年一月の『天の川』支社句稿とある。この月に鳳作は鹿児島市に『天の川』支部を創設している。」

地下室は踊の場にはや犬橿のその宿

「やぶちゃん注…「犬橿のそ」樺太で犬橿のことを「のそ」と呼ぶ。日露戦争後に南樺太が日本領となった後は北海道や東北にも広まったらしく（ここまでは紅殻氏の「帝國ノ犬達」の「樺太の犬橿（ノソ）」に拠った。リンク先では当時の実際の「のそ」の写真も見られる）、これを樺太での囀目（鳳作が樺太に旅したという事実は見いだせない）とすることは出来ない。但し、「地下室」という特殊な設定からは厳冬期に東北以北での景としか考えにくい。」

一時雨一時雨虹はなやかに

稻荷社

夕山や木の根岩根の願狐

「やぶちゃん注…前年十一月発表の句、

花葛や巖に置かれし願狐

と同じ景のように私には思われる。とすれば「岩根」という語彙からもやはり桜島での囀目吟とも考え得る。」

かかへゆく凧にこたへて櫻島風

かかへゆく凧シマにこた櫻島凧

「やぶちゃん注…本句は初詠が同年一月に行われた木曜句会（前田霧人氏の「鳳作の季節」（沖積舎平成一八（二〇〇六）年刊）の年譜によれば、これは橋口白汀指導による句作会で鳳作は昭和四（一九二九）年十月入会している）で、後に三月発行の『泉』と『不知火』に掲載されてあるなお、後者のルビを持つ句形は『泉』の掲載句である。なお、この前田氏の評論は鳳作の事蹟を極めて実証的に検証されており、優れた評論である。是非、御一読あれ。」

水仙やみたらしの水流れくる

「やぶちゃん注…「みたらし」御手洗。神仏を拝む前に参拝者が手や口を洗い清める水やその禊の場。

以上ここまで、昭和六年一月の創作及び発表句。底本では次で示す二月の一句が何故か途中に挟まっているが移動させた。」

稻刈に花火とんとんあがりけり

「やぶちゃん注…昭和六年二月発行の『泉』及び『京鹿子』発表句。先に示したように何故か、一月の「地下室は踊にはの場や犬の櫃の宿」（二月『泉』と「一時雨一時雨虹はなやかに」（二月『泉』）の句の間に掲げられてある。「稻刈」という前年（以前）の秋の景ではあるが、掲載位置の不審自体はそれでは解けない。」

しぐるるや畝傍は虹をかかげつつ

「やぶちゃん注…「畝傍」は畝傍山であろう。奈良盆地南部奈良県橿原市にある標高一九九メートルの山で耳成山みみなしやまと天香具山あまのかぐやまとともに大和三山の一つ。但し、この月以前の年譜的事実からは奈良行を確認出来ず、何時の囑目かは不明。」

寒肥やひぐまの如き大男

「やぶちゃん注」：「寒肥」は「かんごえ」で寒中に農作物や庭木に施す肥料。かんごやし。季語としては冬である。人肥の桶をぶら下げた羆の如き逞しい農夫が盛んにそれを撒いているさまであろう。まさに臭ってくる生き生きとした諧謔味もある句である。」

「やぶちゃん注」：以上、三句は二月の発表句。」

時雨るとと椎の葉越しに仰ぎけり

燕や朱ケの樓門くだつまま

「やぶちゃん注」：「くだつ」は「降（くだ）つ」で本来は「くだつ」という清音の上代語。傾く・衰える・盛りを過ぎるの意の他、夜がふけるの意も持つ。ここは荒廃した朱塗りの樓門（その朱もすっかり色褪せている）の謂いであろう。」

夕刊を賣る童とありぬ慈善鍋

藁塚にあづけ煙草や畑打

万葉の薩摩の瀬戸や鮑採り

「やぶちゃん注」：「万葉」は底本の標字を用いた。「万葉集」には同歌集の南限の地として「隼人の薩摩の迫門」が詠まれている。巻第三の長田王（をさだのおほきみ（おさだのおおきみ）？）天平六（七三七）年：奈良時代の侍従。伊勢斎宮勤務から近江守・衛門督・摂津大夫を歴任した。「万葉集」には伊勢と筑紫などの羈旅六首が、「歌経標式」にも一首が載る。九州派遣は一説に慶雲二（七〇五）年頃とされる。）の二四八番歌で、

また、長田王の作れる歌一首

隼人の薩摩の迫門を雲居なす遠くも我は今日見つるかも

「隼人の薩摩の迫門」は現在の黒の瀬戸と呼ばれている海峡で天草諸島長島と九州本島鹿児島県阿久根市黒之浜の間にあつて全長は約三キロメートルに及び、潮流の激しさから当時は船旅の難所であつた。Tokio 氏の個人サイトである「Tokio の部屋」の旅日記」の中にある「黒之瀬戸 万葉集の南限の地を訪ねて」で和歌と当地の画像が見られる。「雲居なす」は雲のかかつている遙か彼方と紛うばかりの場所として、の意。なお今一首、巻第六の大伴旅人の第九六〇番歌、

帥大伴卿、吉野の離宮を思ひて作れる歌一首

隼人の湍門の磐も年魚走る吉野の滝になほ及かずけり

にも同名のものが出るが（リンク先にも示されており、歌碑も建つ）、この「隼人の湍門」については講談社文庫版「万葉集」の注で中西進氏は『早鞆の瀬戸。豊前の国。今の福岡県北九州市』と特定されておられる。」

落葉掃く音たえければ暮れにけり

「やぶちゃん注」以上、六句は三月の発表句。この月、鳳作は遙か宮古島の拠点港である平良（ひらら）港に沖縄県立宮古中学校（現在の県立宮古高等学校）へ公民・英語科担当として赴任している。」

大兵におはしますなる寢釋迦哉

大兵におはし給ふなる寢釋迦かな

「やぶちゃん注」前者が『不知火』昭和六（一九三一）年四月発表の、後者が『天の川』同年九月発表の句形。一読、語としての自然さからみれば前者でよいと思うのであるが、敢えて特異な語でしかも字余りを狙った鳳作には相応の確信犯である。確かに前者は寢釈迦の「大兵」肥満の像が如何にもスマートに小さくなってしまい、後者ではその諧謔性と同時にその肥満ぶりが画面をはみ出る。」

豊かなる乳見え給ふ寢釋迦哉

ゆたかなる乳見え給ふ寢釋迦かな

「やぶちゃん注…前者が『不知火』昭和六（一九三一）年四月発表の、後者が『天の川』同年九月発表の句形。」

麗はしの朱ケのしとねの寢釋迦哉

涅槃像双樹の花のこぼれたれ

「やぶちゃん注…ここに底本では次の五月のパートに後掲する「くまもなき望の光の寢釋迦哉」という同じ囑目吟が入る。」

探梅行裏御門より許さるる

正月も常のはだしや琉球女

春泥やうちかけ着たる琉球女

「やぶちゃん注…前者は四月発行の『泉』、後者は同じく四月の『京鹿子』の発表句である。この二句、顕在的な琉球での最初の囑目吟として記念すべきもので、わざと「正月」と「はだし」、「春泥」と「うちかけ」を衝突させ（後者は語彙としては必ずしも対極にないが、この打掛けはどう考えても薄い（本土なら夏用の）ものである）、そこに「琉球女」という強烈な南洋イメージを配する辺り、まさに私には鳳作の高らかな無季俳句の宣言句のように思われてならない。」

蝌蚪一つ影先立てて泳ぎくる

春潮や生簀曳きゆくポツポ船

「やぶちゃん注…前田霧人氏の「鳳作の季節」によれば、この句は『昭和六年四月に大阪毎日、東京日日両新聞社主催の虚子選「日本新名勝俳句」募集、海岸の部「錦江湾」で銀牌賞に入選したものである。この催しは、杉田久女が「銜して山ほととぎすほしいまま」の句で帝国風景院賞を受賞したことも有名な俳句の一大イベントである。彼は余程嬉しかったのか、鹿児島から肌身離さず持って来た「俳句手記」の中表紙にその新聞記事切り抜きを貼り付け、自分の句に赤枠を付けている』とある。」

風鈴や灯りそめたる櫻島

熔岩の空を流るる蜻蛉かな

秋晴の熔岩^{ラバ}につきたる渡舟かな

「やぶちゃん注…「溶岩^{ラバ}」の「ラバ」は日本語ではない。火山国イタリアの「流れ」という意味のイタリア語 Lava に基づき、溶岩流及び流出後に固まった溶岩などを指す語である。「渡舟」は「としふ（としゅう）」と読んでいるとしか思われない。」

名月や海に横たふ熔岩^{ラバ}の島

小春日や雲の影這ふ櫻島

熔岩に立ちたる虹の青さかな

「やぶちゃん注…「春潮や」から「こままでの七句は四月刊の『日本新名所俳句』の掲載句。」「こままで、改稿の二句を除き、同年四月発表の句。」

くまもなき望の光の寢釋迦哉

くまもなき望の光の寢釋迦かな

「やぶちゃん注…前者が『馬酔木』同年五月発表の、後者が『天の川』昭和六（一九三二）年九月発表の句形。先行する寝釈迦句の再吟。」

琉球所見

鶯を檳榔林に聞きにけり

鶯を檳榔林に聞かんとは

「やぶちゃん注…「檳榔林」は音数律からも「びんらうりん（びんらうりん）」と読んでいよう。「檳榔」は「びんろう」と読むならば単子葉植物綱ヤシ目ヤシ科ビンロウ *Areca catechu* に同定される。宮古島にビンロウ *Areca catechu* が植生することは、例えばこちらの宮古島に住む93（クミ）さんのブログ「宮古島日和ブログ」の「ビンロウ」で明らかではあるからビンロウ *Areca catechu* ではないとは言えない。但し、「檳榔」は別に「びろう」と読んで、ヤシ科ビロウ *Livistona chinensis* という全くの別種をも指し、この「林」という表現からは後者のビロウ *Livistona chinensis* の可能性の方が遙かに高いようにも思われる。但し、実景を実際に見ていない（私は残念なことに宮古島には行ったことがない）のでここでは断定は避ける。なお、沖縄ではこの「ビロウ」を「クバ」と呼び、葉を用いて扇や笠などを作る（リンクはそれぞれのウィキ）。」

首里城

屋根の上に。ペンペン草やら薊やら

琉球の墓は住まつてゐる家よりも数層倍立派であります。「母體より出でて母に歸る」と云ふ信仰のもとに墓は母體に型どつて出来てゐます。墓毎に築地構への庭があります。

鶏合せ古墳の庭に生まれり

「やぶちゃん注：前書は底本では通常の前書より有意にポイント落ち。言わずもがな乍ら、亀甲墓（かーみなくーばか）である。私はこれについては多くを語りたくなるのだが、ここはぐっとこらえてウイキの「亀甲墓」をリンクさせるに留める。そうしないといつものように膨大な注になってしまうからである。一言だけ言っておくと、古いタイプのそれは円形をして海波の彼方であるニライカナイにその入り口を向けた子宮のような形をしている。鳳作の前書は要所を押さえた簡便ながらよい解説である。「鶏合せ」沖繩では「闘鶏（たうちーおーらせー）」と言って二羽の雄の鶏を戦わせる娯楽が古来より盛んであった。

以上、四句は五月の発表句。最後の句は底本では六月の句群最後に配されてあるが、この句、『ホトトギス』では六月の発表だが、『不知火』は五月発行分に掲載されているのでここに配した。編者には相応の意図があつて後ろに回しているのであるが、その意図が不明である以上、書誌データからここに移動させた。」

旅籠住居二句

部屋毎にある蛇皮線や蚊火の宿

蛇皮線と籠の枕とあるばかり

「やぶちゃん注：「蛇皮線」は「じやびせん（じやびせん）」で、胴に蛇の皮を張るところから沖繩の三線（さんしん）の本土での俗称である（室町末に本土に伝わって改造されたものが三味線である）。沖繩フリークの私としては「さんしん」と読みたくなるが、であれば鳳作は「さんしん」とルビを振るはずであるから、ここは「じやびせん」である。「蚊火」は「かび」又は「かひ」で蚊やり火のこと。「毎」^{ごと}「じやびせん」の濁音を意識するなら「かび」と濁りたい。年譜によれば宮古中学校に赴任した鳳作は暫くの間、張水港（これは平良港のことであろう。平良字西里には琉球の信仰の中で祭祀などを行う大切な聖域である張水御嶽（びやるみずうたき）がある）近くの一心旅館に暫くいて、後に同じ西里の玉家旅館に移って、昭和七（一九三二）年秋頃まではこの旅館に住んだとあるが、孰れの旅館を詠んだものかは特定出来ない。また、孰れの旅館も現存しない模様である。ただ、前田霧人氏の「鳳作の季節」にある鳳作の教え子の喜納虹人のお書きになられた「雲彦と宮古島」〔傘火〕昭和十二年四月号）の引用の中に、玉家旅館の鳳作の思い出が出、『この宿の主人は琴の師匠で、何曜かに、一回、下の方で謡うたいの会が開かれて蛇皮線じやびせんと琴でうたい出す事がよくあつた。その時は『やかましくてやりきれん』とぶいと外に出られる時もあった』とある。」

炎天や女も驢馬に男騎り

うちかけを着たる遊女や螢狩

「やぶちゃん注」：「螢」は底本の用字。このホタルは甲虫（コウチュウ）目ホタル科マドボタル属 *Pyrocoelia* の、宮古島で分化したシヤコマドボタル *Pyrocoelia miyako* Nakane であると思われる。宮古列島（宮古島・下地島・伊良部島・来間島・池間島）にのみ生息する固有種で、成虫のみならず幼虫も発光する。「東京ゲンジボタル研究所」古河義仁氏のブログ「ホタルの独り言」の「[シヤコマドボタル](#)」を参照されたい。」

島の春龍舌蘭の花高し

「やぶちゃん注」：クサスギカズラ目クサスギカズラ科リュウゼツラン亜科リュウゼツラン属 *Agave* の仲間で百種以上ある。」

花椰子に蚕が伏屋の網代垣

「やぶちゃん注」：「花椰子」単子葉植物綱ヤシ目ヤシ科シユロ属 *Trachycarpus* のワジュロ（和棕櫚） *Trachycarpus fortunei* かトウジュロ（唐棕櫚） *Trachycarpus wagnerianu*（ワジュロと同種とする説もあり、その場合はワジュロの学名となる）の花であろう。雌雄異株で稀に雌雄同株も存在する。雌株は五〜六月に葉の間から花枝を伸ばし、微細な粒状の黄色い花を密集して咲かせる（果実は十一月〜十二月頃に黒く熟す。ここまでは[ウィキの「シユロ」](#)に拠る）。「蚕」は「あま」と読んで海人・漁師の意、「伏屋」は「ふせや」で屋根の低い小さなみすぼらしい家の謂い。「網代垣」は「あじろがき」で細い竹や割り竹を網代形に組んで作った垣根のこと。」

旧正月

廻禮も跣足のままや琉球女

「やぶちゃん注」：「廻禮」は「くわいれい（かいいい）」で新年の挨拶回りのこと。「廻」は

正字としたかったが、PDFでは表示不能なので新字体とした。
「」までの七句は六月の発表句。」

浜木綿に流人の墓の小ささよ

南風や海より續く甘蔗畑

「やぶちゃん注：「南風」は「なんふう」、「畑」は「ばた」であろう。」

春雨傘さして馬上や琉球女

「やぶちゃん注：「春雨傘」は「はるさめがさ」であろう。」

しのめの星まだありぬ揚雲雀

「やぶちゃん注：前の二句は七月の発表句、後の二句は「俳句手記」よりここに置かれた句。」

梭の音しづかに芭蕉玉ときぬ

梭の音静かに芭蕉玉ときぬ

「やぶちゃん注：前者が八月刊の『馬酔木』掲載の、後者が翌九月刊の『泉』掲載の句形。
無論、言わずもがなながら、この「梭」は芭蕉布（ばさーじん）を織る機はたのそれである。」

青芭蕉吹かるる音と機音と

炎天や甘蔗のはたけは油風

「やぶちゃん注」：「油風」（あぶらかぜ）は「油まじ」「油まぜ」ともいい、油を流したような静かな南寄りの風をいう語。「まじ」は南又は南西の風、「まぜ」「まじの風」で、多くは西日本での謂い（季語としては夏）。

嘉手納製糖工場附近

縦横にはせ交ふトロや甘蔗の秋

「やぶちゃん注」：「トロ」はトロツコのこと。

琉球焼

踏ん張れる獅子の口より蚊火煙

「やぶちゃん注」：「琉球焼」一応、[ウィキの「壺屋焼」](#)をリンクさせておく（但し、同ウィキには一ヶ所も「琉球焼」という語は用いられてはいない）。この那覇の壺屋焼が琉球の焼き物の本流であることは間違いないのだが、実は現在では「壺屋焼」と「琉球焼」は区分された別箇な伝統工芸製品指定を受けているからである。その論争記事は一九九八年三月二十八日附『琉球新報』の[「伝統めぐり論争、琉球焼と壺屋焼」](#)に詳しい（個人的には何か残念な論争である気がする）。

「獅子」「シーサー」のこと。無論、ここは「しし」と読んでいる。」

炎天や水を打たざる那覇の町

浦風のあはれに強し走馬灯

守宮啼くこだまぞ古き機屋かな

「やぶちゃん注」：ヤモリは沖縄言葉（うちなーぐち）で「やーるー」と呼ぶ。宮古島在住の「さんごのたまご」さんの[ブログ](#)に写真入りで「ケケケケケケ」と鳴く旨の記載がある。女性の方の個人サイト「[たびかがみ](#)」の[【解説】ヤモリという虫](#)によれば、本邦には少なくとも十四種以上が棲息すると考えられ、その中に鳴くことに由来すると思われる

ナキヤモリ属 *Hemidactylus* があり、以下の同属の二種を掲げておられる（一部データや情報を「国立環境研究所」その他のそれと差し替えさせて戴いた）。

・タシロヤモリ *Hemidactylus bowringii*

分布は奄美諸島・沖縄諸島・宮古諸島・八重山諸島に分布するとされるほか、台湾・東南アジアなどに棲息。人家付近で夜間照明に集まり、昆虫を食べること以外には生態は殆ど知られていない。全長は九〇〜一二〇ミリメートルで暗い場所で見ると明瞭な横帯が現れて見え、一見「虎柄」のように見える。一部のネット記載には殆んど鳴かないともある。

・ホオグロヤモリ *Hemidactylus frenatus*

原産地ははっきりしないが分布は奄美諸島・沖縄諸島・大東諸島・先島諸島のほぼ全ての有人島および小笠原諸島で人為的な移入による外来種であり、世界的分布域は大陸の内陸部を除く熱帯・亜熱帯域広範に及ぶ。民家などの建造物を好み、かなりの密度で棲息し、逆に人里から有意に離れた自然林内ではあまりみられない。「ケケケ」又は「チツ、チツ」と鳴き、灯りに集まり虫などを摂餌する。全長は九〇〜一三〇ミリメートルで南西諸島では最も普通にみられるヤモリである。

これらから見るに、鳳作の聴いた「こだま」するほど吃驚したそれは後者ホオグロヤモリ *Hemidactylus frenatus* の可能性が高いか。南洋系と思われる種を突いて鳴かせている動画も幾つかあるが、何となくいじめているようで不快であるからリンクしない。しかしかなり大きな声で高い鳴き声ではある。」

松風を蘇鐵のみきにとらへけり

藻の如く靡く芭蕉や大南風

「やぶちゃん注：「大南風」は「おほみなみ（おおみなみ）」と読む。夏の湿って暑苦しい季節風のこと。「みなみ」と「風」の読みを省略する呼称はもとは漁師や船乗りの用語であったことに由来する。」

實を垂れて枯れそめたる芭蕉哉

「やぶちゃん注：「垂」の字の旧字体「垂」をまともに使っている作家は私の知る限りでは非常に少ない。以下、この注は略す。」

遠雷にこたへそよげる芭蕉哉

「やぶちゃん注… 以上、十二句は八月の発表句。」

毒蛇

沖繩にはハブ捕りを先祖代々よりの家業としてゐる者があり、方言にて「ハブトヤー」と称してゐます。砂や石垣を嗅ぎ歩いてハブの所在を知り多くは是を手捕りにします。鎌首を捉へるのです。簡単な罠にかけて捕る場合もあります。捉へたハブは一しごきすると死にます。

炎天に笠もかむらず毒蛇とり

炎天や笠もかむらず毒蛇とり

「やぶちゃん注…前書の説明文は底本では通常の前書より有意にポイント落ち（以下、文章様の前書はこれと同様なので、以下ではこの注を省く）。前者は九月の『泉』発表句形、後者は昭和八（一九三三）年前後に自身が編んだ作品集「雲彦沖繩句輯」（公刊されたものではない）に載る句形。」

手捕つたるハブを阿呷の一しごき

飴伸ばす如くにハブをしごきける

「やぶちゃん注…「ハブトヤー」の文字列では検索で捕捉出来ない（これが本土ならば祭儀主催者を意味する「頭屋」や「当屋」を当てたところだが無論違う）。沖繩方言で「家」は「ヤー」で「ト」は「捕る」の意か。「本家」を「むーとヤー」「うふヤー」と呼ぶが、もしかすると「ハブ（捕りの）本家」で「はぶむーとヤー」が約されたもののような気もした。沖繩方言にお詳しい方の御教授を乞うものである。なお、「嗅ぎ歩いてハブの所在を知」とあるが、実際のハブの体表は人間の嗅覚上はほぼ無臭に近い。ではこのハブ捕り職人は何を嗅ぎ分けているのかといえ、恐らくはヘビ類一般が持つところの尾の基部にある一對の臭腺からの臭いを嗅いでいるものと思われる。沖繩県の配布しているハブについての文書「ハブはこんな動物」によれば、この臭腺の内部に強い臭いを持った褐色の液体が入っていて、人が齧んだりするとこの液体を霧状に噴出させることがあり、種によって多少の差があるものの、キナ臭い匂いに近いもので、手などに附着するとなかなか落ち

ないとある（これは他個体に対して外敵からの攻撃の危険を知らせる効果があるという説がある。）」

我が宿

この島の乏しき菖蒲葺きにけり

「やぶちゃん注…老婆心乍ら、「菖蒲葺きにけり」は一般には「あやめふきにけり」（但し、「菖蒲」はそのまま「しやうぶ（しやうぶ）」と読んでも構わない。私は普段、「菖蒲葺く」や「屋根菖蒲」は「しょうぶ」と読む）と読んで端午の節句の行事として前の夜から軒に菖蒲しょうぶの葉をさす行事をいう。邪気を払い家を火災から防ぐとされる。」

濱木綿や礁に伏せある獨木舟

「やぶちゃん注…「礁」は音「せう（しょう）」であるが、それでは如何にもである。私は「いは」と読みたくなる。また言わずもがな乍ら、「獨木舟」は「まるきぶね」と読む。」

干されある藻の金色や紫や

「やぶちゃん注…例えば心太や寒天の材料になる紅色植物門紅藻綱テングサ目テングサ科 Gelidiaceae に属するテングサ類（「テングサ」とは一種の名称ではなく、そうした材料となるテングサ藻類の総称である。テングサ属マクサ *Gelidium crinale* を代表種として、他にも同テングサ属のオオブサ *Gelidium pacificum*・キヌクサ *Gelidium linoides*・オニクサ *Gelidium japonicum*・ヒラクサ属のヒラクサ *Ptilophora subcostata*・オバクサ属のオバクサ *Pterocladia tenuis*・ユイキリ属ユイキリ *Acanthopeltis japonica* 等多様の種を含む）は概ね採取時には種によって強い濃淡の違いがあるものの全般に赤紫色を呈しているが、海岸で天日干しと何度もの水洗い作業を繰り返すことによって黄色い飴色（金色）に変じてゆく。」

那覇の廓

港より見えて廓の土用干

「やぶちゃん注…実に色彩鮮烈な諧謔に富んだ洒落た句である。」

芭蕉林ゆけば機音ありにけり

玉巻ける芭蕉を活けてありにけり

短夜守宮しば鳴く天井かな

破れなき芭蕉若葉の静けさよ

榕蔭の晝寝翁は毒蛇捕り

「やぶちゃん注…「榕蔭」は「よういん」又は「ゆういん」で、「榕」は半常緑高木であるイラクサ目クワ科イチジク属 *Ficus superba* 変種アコウ *Ficus superba* var. *japonica* を指す。[ウィキの「アコウ」](#)によれば、漢字では「榕」「赤榕」「赤秀」「雀榕」などと表記し、国内では紀伊半島及び山口県・四国南部・九州・南西諸島などの温暖な地方に自生する。樹高は約一〇〜二〇メートル、樹皮は木目細かい。幹は分岐が多く、枝や幹から多数の気根を垂らして岩や露頭などに張りつく。新芽は成長するにつれて色が赤などに変化して美しい。葉は互生し、やや細長い楕円形で滑らかで光沢はあまりなく、やや大ぶりで約一〇〜一五センチメートル程。年に数回、新芽を出す前に短期間落葉する。但し、その時期は一定でなく同じ個体でも枝ごとに時期が異なる場合もある。五月頃にイチジクに似た形状の小型の隠頭花序を幹や枝から直接出た短い柄に付ける。果実は熟すと食用になる。『琉球諸島では、他の植物が生育しにくい石灰岩地の岩場や露頭に、気根を利用して着生し生育している』とある。」

ハブ捕にお茶たまはるやお城番

ハブ捕の嗅ぎ移りゆく岩根かな

ハブ踊る畏ひつ提げて去りにけり

ハブ穴にまぎれもあらぬ匂かな

両側に甘蔗の市たつ埠頭哉

「やぶちゃん注…以上十八句は九月の創作・発表句。」

那覇にて

ハブ壺をさげて従ふ童かな

高野山

をんじき
飲食のもの音もなき安居寺

「やぶちゃん注…「安居寺」は「あんごでら」と読む。「安居」とは、元来はインドの僧伽に於いて雨季の間は行脚托鉢を休んで専ら阿蘭若あらんにや（寺院）の内に籠って座禅修学することを言った。本邦では雨季の有無に拘わらず行われ、多くは四月十五日から七月十五日までの九十日を当てる。これを「一夏九旬」と称して各教団や大寺院では種々の安居行事がある。安居の開始は結夏けっげといい、終了は解夏げげというが、解夏の日は多くの供養が行われて僧侶は満腹するまで食べることが出来るという。雨安居うあんご・夏安居げあんごともいう（平凡社「世界大百科事典」の記載をもとにした）。この年、鳳作は紀州高野山に於ける俳誌『山茶花』夏行に参加するため近畿地方に旅行しているが、それは年譜によれば八月のことである。とすれば、この安居寺とは狭義の夏安居の時期ではなく、夏安居に相当する暑い夏の静寂に満ちた高野山金剛峯寺のそれを詠じたものであろう。先に示したに前田霧人氏の「鳳作の季節」よれば、この句は『八月八日から三日間、高野山高室院で開かれた「山茶花」夏行』での句であるとし、『これは草城、暁水らも出席した盛大なものであった』とある。』

十方にひびく篲や安居寺

一方の沙羅の香りや安居寺

「やぶちゃん注：「沙羅」は「さら」若しくは「しやら（しやら）」と読み、ツバキ目ツバキ科ナッツバキ *Stewartia pseudocamellii* の別名である。本邦には自生しない仏教の聖樹フタバガキ科の娑羅樹(さら)のき アオイ目フタバガキ科 *Shorea* 属サラソウジュ *Shorea robusta* に擬せられた命名といわれ、実際に各地の寺院にこのナッツバキが「沙羅双樹」と称して植えられていることが多い。花期は六月〜七月初旬で、花の大きさは直径五センチメートル程度で五弁で白く、雄しべの花糸が黄色い。朝に開花し、夕方には落花する一日花である（ここは主にウイキの「[ナッツバキ](#)」及び「[サラソウジュ](#)」に拠った。）

一痕の月も夕焼けるたりけり

雨蛙をらぬ石楠木なかりけり

「やぶちゃん注：「石楠木」は「しやくなげ（しやくなげ）」と読んでよからう。「石楠花」では花に視点がフレーム・アップしてしまうのを避けた用字と思われる（但し、シヤクナゲをかく表記するのは一般的とは言えない）。

（ここまでの六句は十月の発表句。）

門川にあふれてさみし魂祭

荷のすぎし精靈舟となりにけり

大風のあしたを出でて耕せり

月の江や波もたてずに獨木舟

吹きあほつ日覆のうちの櫻島

「やぶちゃん注」吹きあほつ」ネット上で発見した歌人長澤英輔氏の歌集の一首、夏暮るる軒の簾を吹きあほつ雨風涼しきちきょうの花

から、「吹き煽る」の謂いであることが分かる（老婆心乍ら、「きちきょう」とは「桔梗」のこと）。とすればこれは「あふつ」の歴史的仮名遣の誤りかと思われる。「煽つ」は現代音「あおつ」で他動詞タ行四段活用の「風が吹き動かす」「風のために火や薄い物が揺れ動く。ばたばたする」の古語で、自動詞の「あふる」の転かある（但し、この意に限ってみれば「あふる」との自・他動詞の明確な区別は国語学嫌いの私には判然としない）。
ここまでの五句は十一月の発表句。」

犬とゐて春を惜める水夫かな

舊曆十月十五日は僧月照の忌日たり

うるはしき入水圖あり月照忌

「やぶちゃん注」僧月照」これは幕末期の尊皇攘夷派の僧で西郷隆盛とともに錦江湾に入水自殺した月照（文化一〇（一八一三）年〜安政五年十一月十六日（グレゴリオ暦一八五八年十二月二十日）のことと思われるが、日のズレは誤差範囲としても月がおかしい。誤植か鳳作の記憶違いであろう。名は宗久（他に忍介・忍鎧・久丸とも。本姓は玉井か）、ウイキの「月照」によれば（アラビア数字を漢数字に代えた）、『文化一〇年（一八一三年）、大坂の町医者長の長男として生ま』れ、『文政一〇年（一八二七年）、叔父の蔵海の伝手を頼って京都の清水寺成就院に入る。そして天保六年（一八三五年）、成就院の住職になった。しかし尊皇攘夷に傾倒して京都の公家と関係を持ち、徳川家定の將軍継嗣問題では一橋派に与したため、大老の井伊直弼から危険人物と見なされた。西郷隆盛と親交があり、西郷が尊敬する島津斉彬が急死したとき、殉死しようとする西郷に対し止めるように諭している』。安政五（二八五八）年八月に『始まった安政の大獄で追われる身となり、西郷と共に京都を脱出して西郷の故郷である薩摩藩に逃れたが、藩では厄介者である月照の保護を拒否し、日向国送りを命じる。これは、薩摩国と日向国の国境で月照を斬り捨てるというものであった。このため、月照も死を覚悟し、西郷と共に錦江湾に入水した。月照はこれで亡くなったが、西郷は奇跡的に一命を取り留めている。享年』四十六。『眉目清秀、威容端嚴にして、風采自ずから人の敬信を惹く』と伝えられ、『墓は、月照ゆかりの清水寺（京都市東山区）と西郷の菩提寺である南洲寺（鹿児島市）にあり、清水寺では月照の命日である十一月十六日に「落葉忌」として法要を行っている（新曆の毎年同月同日に実施）』と

ある。入水の前後を詳しく語るブログ『[「明治」という国家](#)』の『[西郷隆盛、僧月照と薩摩](#)』の『[瀉に投身](#)』によれば、月照が、

雲りなき心の月も薩摩瀉沖の波間にやがて入りぬる

という辞世の一首を詠んだところ、西郷は答えて、

二つなき道にこの身を捨小舟波立たばとて風吹かばとて

と詠んで硬く抱き合ったまま、追放のために遣わされた役人方の舟から入水したとある。驚いた役人が『兩人が堅く抱合ったまま骸となって浮上ったのを発見』、『岸辺に船を急がせ、火を焚いて応急手当をしたので、西郷だけは漸く息を吹返したが、月照は遂に』四十六歳を『一期として、帰らぬ旅に上ってしまった』、薩摩藩はしかし表向き西郷ともに死んだということで『幕府へ届出』、西郷は名を『菊池源吾と改名し奄美大島に身を潜め』たとある。ここに出る「入水圖」というのは推測であるが、西郷隆盛の菩提寺で月照の墓がある鹿児島市南林寺町にある臨濟宗南洲寺にあったものではなからうか？ 識者の御教授を乞うものである。」

おぼえある繪卷の顔や月照忌

「やぶちゃん注…恐らく鹿児島県人であった鳳作にとって尊王の偉人として月照の絵姿を小さな時から見知っていたのであろう。」

椰子の月虹の暈きてありにけり

からからに枯れし芭蕉と日向ぼこ

枯芭蕉卷葉ひそめてをりにけり

破れ芭蕉羽抜けし鶏の如くなり

「やぶちゃん注…以上七句は十二月の発表句。」

昭和七（一九三二）年

霜圍ひされし芭蕉と日向ぼこ

「やぶちゃん注…一月発行の『馬酔木』発表句。前掲の前月『不知火』発表の「からからに枯れし芭蕉と日向ぼこ」の改稿かとも思われる。」

掃くほどのちりもなかりし御墓かな

西郷どんと眠りゐる墓掃きにけり

「やぶちゃん注…鹿児島市上竜尾町にある南洲墓地。西南戦争で戦死した西郷隆盛を始めとして二千二十三名の将士の墓が錦江湾の入口を向いて眠っている。」

島人や重箱さげて墓参り

掃苔やこごみめぐりに祖の墓

「やぶちゃん注…「祖」は「おや」と訓じていよう。」

屋根解くや誰が誰やら煤まみれ

「やぶちゃん注…以上六句は一月の発表句。」

美しき人の来てゐる展墓かな

「やぶちゃん注…「展墓」は「てんぼ」と読み、墓参りをすること。墓参。「展」は原義の一つ「見る」からこれ自体で「墓参りをする」の意を持つ。有季俳句では八月十三日の盂蘭盆会の墓参で秋の季語であるが、鳳作のこれは二月の発表句であり、そんな意識は毛頭ない。しかもこれは間違いなく宮古の新春の囑目吟、参っている墓は亀甲墓で、そこに佇む美人は南国沖繩の美人（ちゅらかーぎー）でなくてはならぬ。」

千鳥釣る童等がいこへる礁かな

「やぶちゃん注…ここでの「礁」は恐らく海中の岩を指す和語で、「いくり」と訓じているものと思われる。」

土の上に地圖ひろげあるキヤンプかな

「やぶちゃん注…以上三句は二月の発表句。」

岩の上にロープ干しあるキヤンプかな

冬木影道に敷きゐるばかりなり

坐らんとすれば露けきほとりかな

「やぶちゃん注…以上三句は三月の発表句。」

門入りて徑の露けくなりにつけり

寄生木の影もはつきり冬木影

極月や榕樹のもとの古着市

「やぶちゃん注…「榕樹」「ヨウジュ」は沖繩でお馴染みのガジュマルの漢名。イラクサ目クワ科イチジク属ベンガルボダイジュ *Ficus bengalensis*。インド原産で高さは三〇メートルにも達する。樹冠部は大きく広がって横に伸びた枝から多くの気根を出す。果実は小形の無花果状で赤熟する。インドでは聖樹とされる。バナヤン・バンヤン (Banyan) ともいう。

以上三句は四月の発表句。」

手袋の手をかざしる芦火かな

「やぶちゃん注…「芦」は底本の用字。」

櫻島

火の島の裏にまはれば蜜柑山

炭馬の下り來徑あり蜜柑山

「やぶちゃん注…以上三句は五月の発表句。」

富士山麓

霧しづく柱をつたふキャンプかな

はひ松に郭公鳴けるキャンプかな

山中湖

山垣とキャンプの影と映るのみ

刈跡のみなやにたらし蘇鐵山

奥津城の庭の蘇鐵の刈られけり

「やぶちゃん注…以上五句は六月の発表句。」

首里城

南殿のしとみあげあり花樗

「やぶちゃん注…「花樗」は「はなあうち（はなあうち）」と読む。センダン、一名センダンノキの古名。ムクロジ目センダン科センダン *Melia azedarach* の花。初夏五〜六月頃に若枝の葉腋に淡紫色の五弁の小花を多数円錐状に咲かせる。因みに、「梅檀は双葉より芳し」の「梅檀」はこれではなく白檀の中国名（ビャクダン目ビャクダン科ビャクダン *Santalum album*）なので注意（しかもビャクダン *Santalum album* は植物体本体からは芳香を発散しないからこの諺自体は頗る正しくない。なお、切り出された心材の芳香は精油成分に基づく）。[グーグル画像検索「梅檀の花」](#)。」

うすうすと峰づくりけり夜の雲

「やぶちゃん注…個人的に好きな句である。

以上二句は八月の発表句（昭和七（一九三二）年七月の発表句はない）。

なお、この八月二日、鳳作は博多に『天の川』主宰の吉岡禪寺洞（明治二二（一八八九）年〜昭和三六（一九六一）年 福岡生。本名、善次郎。大正七（一九一八）年に福岡で『天の川』を創刊して後に主宰となる。富安風生・芝不器男らを育て、昭和四（一九二九）年には『ホトトギス』同人となったが、新興俳句運動に参加して昭和十一年に除名された。戦後は口語俳句協会会長を務めた。句集に「銀漢」「新壘（にいはり）」（以上は講談社「日本文名大辞典」に拠る）を訪ねている。それを「銀漢亭訪問記」として昭和七年十一月の『天の川』に載せているが、その中で、鳳作が「沖繩の句をつくりたいと思つてゐますが、どうも季節感が乏しくて句になりにくいです」と質問したのに対し、禪寺洞は「この前臺灣の人もさう云つてゐた。だがまあ云つて見れば夏だけの所なんだから、夏の季のものだけ句作したらよいだらう。従來の季節にない動植物でも何でも句にしてみましたへ。沖繩や臺灣みたいな所は季と云ふものにさうとらはれる必要はないと思ふ」と答えているのが注目される。」

雲の峰夜は夜で湧いてをりけり

沖繩糸満風景

くり舟を軒端に吊りて島の冬

「やぶちゃん注…以上二句は九月の発表句。」

蛇皮線をかかへあるける涼みかな

蛇皮線をかかへて歩く涼みかな

「やぶちゃん注…前者は十月発行の『天の川』の、後者は同十月発行の『泉』の掲載句形。」

日傘おちよぼざしして墓参り

かたびらのうるし光りや琉球女

「やぶちゃん注…「うるし光り」これは夏用の麻の帷子かたびらの紋付などに附ける漆で描いた紋所、

「漆紋しつもん」のことであろう。」

豚の仔の遊んでゐるや芭蕉林

「やぶちゃん注…以上五句は九月の発表句。」

麻衣がわりがわりと琉球女

踊衆にきまつてゐるや甘蔗きびぬすと盗人

良い月にうかれて甘蔗ぬすみけり

「やぶちゃん注：前の二句は十一月発行の『天の川』の発表句。「良い月に」は「雲彦沖繩句輯」からここに配されてある。」

舟にゐて家のこほしき雨月かな

「やぶちゃん注：「こほしき」は「こほし（こおし）」で「戀（恋）ほし」、形容詞シク活用
の「恋こひ」の古形。」

天津日に舞ひよどみける鷹の群

「やぶちゃん注：「天津日」「津」は「の」の意の格助詞で天の日輪、天空の太陽。」

鷹降りては端山鳥は啼きまどふ

「やぶちゃん注：「端山鳥」は、はしくれの山鳥どもの謂いであろう。」

夕されば小松に落つる鷹あはれ

十月中旬毎日幾千とも知れぬ鷹つばさをつらねて渡り中天に舞ふさまは壯觀云は
ん方なし琉球舞踊は鷹の舞ふさまより來しもの多しと云ふ

荒波に這へる島なり鷹渡る

和田津海の鳴る日は鷹の渡りけり

知らぬ童にお辭儀されけり野路の秋

つなぎ舟多くなりたる踊かな

織初めの女にまじる漢かな

「やぶちゃん注：「漢」は「をおこ」と訓じていよう。」

海の風ここにあつまる幟かな

たどたど蝶のとびる珊瑚礁リーフかな

蝶々とゆきかひこげるカヌーかな

春曉や聲の大きな水汲女

村の童の大きな腹や麥の秋

鱻のひれ干す家々や島の秋

汐しぶき宮居を越ゆる野分かな

大いなる日傘のもとに小商ひ

傘日覆葎日覆の出店かな

青簾つりし電車や那覇の町

「やぶちゃん注…我々は沖繩の鉄道は、二〇〇三年に開業した那覇市内のモノレール、沖繩都市モノレール線、通称ゆいレールが最初だと思いついてはいるが、実は戦前の沖繩本島には軽便鉄道や路面電車及び馬車鉄道があった。また、サトウキビ運搬などを目的とした産業用鉄道も南大東島をはじめとして各地に存在した。参照したウィキの「沖繩県の鉄道」によれば（アラビア数字を漢数字に代えた）、明治時代、『沖繩県内で初めて鉄道のレールが敷かれたのは南大東島で、一九〇二年（明治三十五年）に手押しトロッコ鉄道が完成している。また、一九一〇年（明治四十三年）には沖繩本島でもサトウキビ運搬用の鉄道が導入されている』。但し、『運輸営業用の本格的な鉄道路線は、一八九四年（明治二十七年）から県外の資本家などが沖繩本島内での起業を相次いで出願しているが、そのほとんどは却下されたり、あるいは資金力が伴わずに計画倒れに終わっている』。『一九一〇年（明治四十三年）三月に沖繩電気軌道（後の沖繩電気）が特許を受けた軌道敷設計画は唯一実現する運びとなり、一九一四年（大正三年）五月に運輸営業を行う鉄道としては沖繩初となる路面電車が大門前―首里間に開業した。続いて半年後の十一月には、東海岸側の西原にあったサトウキビ運搬鉄道を拡張する形で沖繩人車軌道（後の沖繩馬車軌道）の与那原・小那覇間が開業した』。『一方、明治時代の民間による鉄道計画の大半が挫折したことから、県営による鉄道敷設の気運も高まり、沖繩人車軌道の開業から一か月後の十二月には沖繩県営鉄道が那覇―与那原間を結ぶ軽便鉄道を開業させた』。『大正末期には県営の軽便鉄道が那覇を中心に嘉手納、与那原、糸満を結ぶ〇路線を完成させ、沖繩電気も路線を延伸。さらに那覇と糸満を結ぶ糸満馬車軌道が新たに開業し、沖繩本島の鉄道は最盛期を迎えた』。『昭和時代に入ると、沖繩本島では道路の整備に伴い自動車交通が発達し、鉄道はバスとの競争に晒される。県営鉄道は気動車（ガソリンカー）を投入するなどして対抗するが、沖繩電気の路面電車と糸満馬車軌道は利用者の減少で廃止に追い込まれた。この結果、沖繩本島内の鉄道は沖繩県営鉄道と沖繩軌道（旧・沖繩馬車軌道）だけとなるが、両者とも太平洋戦争末期の沖繩戦の直前である一九四四年（昭和十九年）―一九四五年（昭和二十年）に運行を停止し、鉄道の施設はミスによる引火事故や空襲・地上戦によって破壊された』とある。」

この辻も大漁踊にうばはれぬ

「やぶちゃん注…以上二十句は底本では十二月のパートに配かれてある（但し、「知らぬ童に」以下の十四句は総て「雲彦沖繩句輯」からで、その前の句が十二月の発表句である。）」

昭和八（一九三三）年

和田津海の鳴る日は鷹の渡りけり

「やぶちゃん注…同年一月発行の『馬酔木』掲載句であるが、この句は前年の十二月発行の『泉』の発表句と全く同じであるにも拘わらず、何故か本文再掲となっている。一応、掲げておく。」

豚小屋に潮のとびくる野分かな

「やぶちゃん注…前年の末に配されてある「雲彦沖繩句輯」の中の、
汐しぶき宮居を越ゆる野分かな

の類型句であるが、先行作が広角でパノラミックで映画的であるのに対して、こちらは豚の鳴き声や小屋の臭いと潮のべたつきがリアルに感じられる、それでいて如何にも諧謔味に富んだ佳句である。私は豚が好きならばこそこの句の方が遙かに親しく感じられるのである。」

石垣にともす行灯や浦祭

をとこのらの白粉にほふ踊かな

踊衆に今宵もきびの花づくよ

「やぶちゃん注…残念ながら宮古島のこの祭りについて私は知見を持たない。識者の御教授を乞うものである。」

以上、最初の四句は一月の発表句、最後の「踊衆に」の句は「雲彦沖繩句輯」より。」

この辻も大漁踊さかりなる

廻りゐる靱すり馬に日静か

「やぶちゃん注：「やぶちゃん注：「廻」は正字としたかったが、PDFでは表示不能なので新字体とした。」

以上二句は二月の発表句。」

ストーブや國みなちがふ受験生

漂泊の露人とクリスマスをいとなむ

ガチャガチャの鳴く夜を以てクリスマス

「やぶちゃん注：「ガチャガチャ」ここでは十二月に鳴いているのが当たり前の感じからして宮古か沖縄本島の景と考えられ、とすれば直翅（バッタ）目剣弁（キリギリス）亜目キリギリス科 *Mecopoda* 属タイワンクツワムシ *Mecopoda elongata* と思われる。ウィキの「[タイワンクツワムシ](#)」によれば、同じ *Mecopoda* 属のクツワムシ *Mecopoda nipponensis* に『似ているが、羽根は細長く、前胸の側面に黒褐色の帯が上面に沿って現れる。別名ハネナガクツワムシ』ともいい、『伊豆半島以南の本州、四国、九州、沖縄などの他離島に分布する（通常、我々が「ガチャガチャ」と呼ぶクツワムシ *Mecopoda nipponensis* は南西諸島には分布しない模様である）。体長は六・五〜七・五センチメートルで、『メスはオスよりも大きい。体は緑かまたは褐色。オスの前胸はクツワムシより広がり方が弱い。発音器もやや小さい。また本種は脚や触角の体に対する割合が大きく、羽は丸みが少なく細長く、背面側の先端近くが緩やかに上にカーブし、凹んだように見える。個体によっては羽の側面に現れる黒斑もクツワムシより多く、大きい。特にメスで顕著。またメスの方が羽根が長くなる 경우가多くこうした個体は灯りに向かって飛翔してくることさえある。産卵管は後脚腿節の半分ほどの長さで上に向かいカーブする。鳴き声も全く異なっており、「ギイツ！ギイツ！」と前奏を数回繰り返した後、本奏は「ギュルル…」と長く引き延ばす鳴き方をし、この部分はクツワムシの声に似たところもある』とする。『南方系種で海岸や線路沿い、土手などクツワムシよりも乾燥した、日当たりの良い環境を好み、普通は混生しない。本種とクツワムシとが生息している地域では平地に本種が、クツワムシは山地

に住む傾向がある』。『夜行性であり、日が暮れてから活動する。昼間クツワムシは根元近くで休むのに対し、本種は葉の上で脚を広げ、じっとしていることが多い。食草はクツワムシ同様、クズが主食であり、その他乾燥草原に生える各種広葉雑草から低木の葉までを食べる。飼育下ではクツワムシと全く同じ物を食べ、多少の肉食もするが共食いは殆どしない』。『クツワムシより褐色個体の割合が高く、緑色型として羽化し外骨格の硬化が完了した個体であっても、日照量の少ない日陰や夜間での活動を続けると』一ヶ月程度で『褐色に変化してしまう。本州のものは』六月頃に孵化して八月頃に『羽化、初霜の頃には死に絶えるというクツワムシと同様の一生を送るが、南に行くほど成虫の生存割合は高まり、亜熱帯地域では冬を越して幼虫が孵化する頃まで生きていることも珍しくない』とある(下線やぶちゃん)。」

手づくりの蝋燭たてやクリスマス

「やぶちゃん注…底本では「蠟燭」であるが、PDFではご覧の通り、転倒してしまうので新字体とした。」

聖誕祭かたゐは門にうづくまる

「やぶちゃん注…ここまでの四句は三月の発表句。」

一堂にこもらふ息やクリスマス

マドロスに聖誕祭のちまたかな

「やぶちゃん注…以上二句は四月の発表句。」

笹鳴きやけふ故里にある思ひ

受験生かなしき苺おぼえけり

「やぶちゃん注…この「受験生」は鳳作の勤めた旧制中学から旧制高校を受験する生徒であらうが、それでも旧制中学校は五年制で問題なく進んでも卒業時満十七歳で無論、違法な光景ではある（但し、今も喫煙する私は高校時代に既に煙草を吸っていたから。この情景はまことにリアルである）。因みに喫煙の本邦での規制は、[ウイキの「日本の喫煙」](#)によれば、明治初期、『養生雑誌』（養健舎明治一三（一八八〇）年創刊）が煙草の害を外国文献の抄訳形式により掲載、明治一四（一八八二）年出版になる「内科要略」には、「慢性尼古質涅（ニコチネ）中毒」（ニコチン依存症）と慢性動脈内膜炎の關係に言及、喫煙を粥状動脈硬化の危険因子と見做す記載があるという。このように喫煙の有害性が一般に認められていた明治二二（一八八九）年には東京文理科大学初代学長三宅米吉が喫煙と健康について警告した論文「學校生徒ノ喫煙」を執筆、年少者にも及んでいた喫煙問題を受けて明治二七（一八九四）年に小学校での喫煙禁止の訓令「小学校ニ於ケル体育及衛生」（文部省訓令第六号）が発せされ、続いて明治三三（一九〇〇）年、未成年者の全面的禁煙を成文化した「未成年者喫煙禁止法」が、健全なる青少年の育成を目的として施行された。本法発布の背景には富国強兵策があつて、『幼年者が喫煙で肺を悪くして徴兵できなくなることが憂慮されていた』ことが主たる理由であるとする。この「未成年者喫煙禁止法」は現在も改正を経て継続的に実施されている。日本の成人年齢は明治九（一八七六）年以来一貫して満二十歳であるが、『年齢に言及せず「未成年者」の文言だけであった同法に』、「満二十年ニ至ラサル者」の文言が加えられたのは昭和二二（一九四七）年の改正であつた、とある。」

行人を戀ふることあり受験生

大空の春さりにけり椰子の花

浜木綿に日がなこぼれて椰子の花

「やぶちゃん注…椰子の花をご存じない向きのために、[グーグル画像検索「椰子の花」](#)をリンクしておく。」

椰子の花こぼるる土に伏し祈る

琉球のいらかは赤し椰子の花

「やぶちゃん注…以上七句は五月発表句及び当該時期のパートに配されたもの。」

首里、尚家の桃園園所見

バナナ採る梯子かついで園案内

「やぶちゃん注…「尚家」は琉球王朝の王統であるが、その系譜は単純ではない。例えば琉球最後の王朝である第二尚氏の王統は第一尚氏尚泰久王の重臣であった金丸が尚泰久王の子尚徳王に代わって王位に就いて尚円王と名乗ったことに始まる。ここまでの歴史的経緯はウイキの「第二尚氏」及びそこからリンクされる各記載に譲るが、最後の王第十九代尚泰王治世下の明治一二（一八七九）年に行われた琉球処分によって王家による琉球支配は終焉、尚泰は東京への移住を命ぜられて形ばかりの侯爵に叙せられ、分家も男爵に叙せられた。尚泰は沖繩との往来を禁止され、尚家一族の大半は沖繩に残ったとある。ここに出る首里にあった桃園園という庭園（若しくは次の知られた鳳作の名句や陸続とあるマンゴーやサボテンの句群がここで創られたものだとするならば、当時既にこの尚家所有のそれはバナナやメロンを栽培する果樹園や熱帯植物園のようなものになっていた可能性も浮上する）もそうした尚家所有のものであったものか？ 現在ネット上では那覇市首里桃園町の地名以外にはそうした施設は地図上では現認出来ない。首里城の北西（龍潭から直線で五百メートルの直近）に位置する。鉄の暴風によって跡形もなく消失してしまつて再現されなかったものか？ 識者の御教授を乞う。」

炎帝につかへてメロン作りかな

よじのぼる木肌つめたしマンゴ採り

マンゴ採り森こだまして唄ひをり

「やぶちゃん注…この「首里、尚家の桃園園所見」の前書きを持つ『一聯四句』（底本年譜の表現）は六月発行の『天の川』の巻頭を飾ったもので、同誌で鳳作の句が巻頭を飾った最初であり、しかも二句目の「炎帝につかへてメロン作りかな」は鳳作『開眼の句といわれる』（年譜の表現）ものである。私も大好きな一句である。」

青東風にゆられゆられてマンゴ採り

「やぶちゃん注…「青東風」は「あをこち（あおこち）」と読み、一般には夏の土用（七月二十日頃から始まる四季節の一つである立秋前の十八日間を指す）の青空に吹く東風、土用東風（どようこち）を指すが、作句時期（『雲彦沖繩句輯』所収で推定六月）から、これは初夏の青葉の間を吹き抜ける東風の謂いである。」

サボテンの人を捕らんとはたがれる

サボテンの指さきざき花垂れぬ

浜木綿に佇ちて入り日を拜みけり

雛祭すみしばかりにみまかりぬ

「やぶちゃん注…以上九句は六月の発表若しくは創作句。」

トンビヤン
龍舌蘭すくすく聳てば島の夏

「やぶちゃん注…トンビヤン「龍舌蘭」これは完全な当て読みで、「トンビヤン」とは元来はこの龍舌蘭（単子葉植物綱クサスギカズラ目クサスギカズラ科リュウゼツラン亜科リュウゼツラン属 *Agave* の一種）から採取される繊維を用いて作った琉球の幻の織布の名称である。ネット上の記載では「桐板」と書いて「トンビヤン」「トゥンビヤン」「トンバン」と読んだのが発音の由来であるらしく思われ、中国から入った織物で琉球王朝時代には中・上流階級で愛好されていたが、二十世紀に入って技術が途絶えたとある。最も信頼のおける沖縄県立図書館の「貴重資料デジタル文庫」内にある「[琉球の染織に関する基礎知識](#)」には、

《引用開始》

桐板は琉球王府時代から戦前まで用いられていた織物素材で中国から輸入されていた。中・上流階級の間で使用され、繊維は非常に透明でハリがあり、ケバがほとんどなく撚り

をかけずに織られるのが特徴で、独特のひんやりとした触感があり夏用素材として珍重された。糸が撚りつぎで作られていることにも特徴がある。この東恩納寛惇文庫『琉球染織』資料には、桐板を使用した織物が多く収集されており、桐板の利用状況を知る上で貴重な資料である。

染料には藍、ハチマチバナ（紅花）クール（紅露）、鬱金（ウコン）、テカチ（車輪梅）、グールー（サルトリイバラ）、楊梅、福木、ユウナ（オオハマボウ）、梔子、日本・海外との交易による蘇木、臘脂など主に植物染料を用いていた。

《引用終了》

とある。ところが、不思議なことにここには原繊維をリュウゼツランと同定する記載がない。ネット上をいろいろ調べてみると、この中国から輸入されたその繊維素材若しくは織布は実はリュウゼツランではなくて苧麻（ちよま 双子葉植物綱イラクサ目イラクサ科カラムシ属ナンバンカラムシ変種カラムシ *Boehmeria nivea* var. *nipomivea*）であった可能性もあるらしいが（しかし、琉球では織物の原繊維に苧麻も使われているから誤認や混同は不審である）、例えばこちらの「[沖繩の衣生活](#)」（戦前の昭和一六（一九四一）年田中薫調査時の記録よりとある）の「沖繩 着物の着方（ウシンチー）」田中薫氏一九四一年撮影という写真のキャプションには（一部の数字表記と記号表記を変えた）、

《引用開始》

典型的な琉装着物の前を合せ、ハカマ（下着）の堅く締めた紐に挟み込むだけで帯を用いない。この着方を「ウシンチー」と言う。着崩れなく着こなすことは現代の若者にはもう出来ない。着丈は短く、袖は広く短く袂がなくて「きもの」として最も通気性が高い。

左の画像は夏の通常着であるが布地は経糸が「とんびやん（桐板）」といって龍舌蘭の一種からとる繊維、緯糸は芭蕉の糸で織ったもの。汗をよくはじく。この写真では右前（右衽）に合せているが、古くは左前（左衽）に着た。一九四一年には左前が四〇％くらい見られた

《引用終了》

とあってリュウゼツランを原繊維としていたことがはっきりと書かれている（「衽」は「おくみ」と読み、着物の左右の前身頃（まえみごろ 身頃とは「身衣」みころも の略で、衣服の襟・袖・衽などを除いた、身体の前後を覆う部分の総称。前身頃と後ろ身頃から成る）に縫いつけた襟から裾までの細長い半幅の布のことを指す）。

「聳てば」は普通なら「そばだてば」であるが、如何にも音数律が悪い。「たてば」と訓じているものと思われる。

【龍舌蘭リベンヤン】リベンヤン についての追記】その後、ミクシイの友達で、小生が「姐あねさん」と呼んで敬愛

申し上げている、染色から織りまで手掛けていらっしやるHN「からからこ」姐さんという女性の方に個人的にレスキューをお願いしたところ、先日、以下のような御消息を頂戴した（一部表現や表記、リンクなどを加工させて戴いた）。

*

[多々良尊子「長田須磨が描いた明治時代の奄美の衣生活文化 ―芭蕉布から木綿へ―」](#)（PDFファイル）の三十五ページに「桐板」についての記述があります。

《引用開始》

注6・桐板（長田さんは、トゥンビヤンと表している）は、沖縄で用いられた白く透き通った高級な夏用織物である。中国福建省から原糸が輸入されていたが、第二次世界大戦により途絶えたため「幻の織物」と言われている。一般には、竜舌蘭から採った繊維ではないかとされてきたが、近年、中国産の苧麻であるとの研究結果が報告されている。『わが奄美』では、桐板が奄美に残っていたことや、竜舌蘭の葉を灰汁で煮て葉脈から繊維を採ったという経験も述べられている。しかし、竜舌蘭の繊維は硬く、衣服ではなく網や綱として用いられたのではないかと思われる。

《引用終了》

長田須磨おさだすまさんは、明治三五（一九〇二）年生まれで、筆者の多々良尊子さんは現在、鹿児島県立短期大学生活科学科教授です。

また、沖縄県立図書館の貴重資料から「桐板の繊維」も見てみました。

[琉球染織1-41](#)（経糸・木綿 緯糸・桐板）

[琉球染織1-42](#)（経糸・白は桐板・茶色は木綿 緯糸・芭蕉 緋糸・経・緯ともに木綿）

これでも「やぶちゃん注」リンク先には繊維の拡大写真があり、簡単な解説も附されている。「分かるように木綿のガサガサとした、感じとは雲泥の差があり、非常に柔らかな感触が伝わってきます。透明感もあり、また、ふっくりとしていて空気をよく含むので、夏も涼しいというのも納得できます。庶民には到底手の届くような代物ではなかったのですよね。」

意外なのは、「一般財団法人ボーケン品質評価機構」のサイト内の「繊維の基礎知識」の「[リネン（亜麻）・ラミー（苧麻）・ヘンプ（大麻）の麻繊維について](#)」の記載に、『苧麻の代表的な欠点』として、『繊維が粗硬なので肌をチクチク刺激する』とあることで、上の沖縄県立図書館の資料写真からは一寸、想像できません。

そこで今一度、沖縄県立図書館の貴重資料の「[琉球の染織に関する基礎知識](#)」の中の織りの項を見てみると、「桐板」は撚りつきをして撚りをかけないとあります。で、苧麻は、普通撚りをかけて糸にするようです。したがって、糸に撚りをかけると木綿のようなよじりが見えるはずなのですが、沖縄県立図書館の貴重資料の写真「桐板」には全くと言っていいほど撚りが見られません。撚りのかかった苧麻の繊維写真があれば比較できるのです

が今のところ、見つけることが出来ません。

そこで、とりあえず、これらのことから考えられるのは、

◎中国・福建省から、輸入されていたのは

(1) 苧麻は、苧麻でも、特別な苧麻で、撚りを掛ける必要のない苧麻だったのか？

(2) 柔らかさを、そのままにするために苧麻にわざと撚りをかけなかったのか？

(3) 苧麻だと思われて(言われて)いても苧麻ではない、別な繊維、まさに「桐板」と呼ばれるもの「そのもの」ではなかったのか？

のいずれかではないか？ ということです。

参考までに、この沖縄県立図書館の貴重資料を幾つか並べてみると、違いがよく分かります。

まず、こちらでは木綿の繊維の流れが良く分かります。桐板と比較して、撚りがかかっているのが良く見え、硬い感じですね。以下、比較してみましょう。

木綿・木綿

桐板・桐板

苧麻・苧麻

木綿・木綿

絹・絹

絹・桐板

やはり、桐板は、撚りがかかっていない(よじりが無い)。特に最後の「絹・桐板」は絹も桐板も撚りがほとんど見られず、また木綿や苧麻などのような、硬さというか、がさつきが感じられませんね。

そこで、もう一度、「琉球の染織に関する基礎知識」をゆっくり読み直してみると、「沖

繩の染め 紅型」の「工程」のなかに、『布地は木綿、苧麻、芭蕉、絹、桐板トシベヤシなどが身分、

用途によって……』とあります。

これを、どのように解釈すればよいのか？

「桐板」というのは苧麻以外の糸なのか、どうなのか？

一九三一年に満州事変が起きて以来、九七二年の日中国交回復まで、戦前、一時的な国交回復があったとはいえ、それ以前のような交易はなかったでしょう。また、一九七二年以降についても、福建省との交易によって「桐板」が、また輸入されるようになっていのかどうか？……ネットで文献を探すだけでは、限界があるようですね。

仮に福建省から輸入されているとして、「桐板」というのは、過去の名称では使われていない、現代では『別な名前』になっているのか？ 既に福建省では、日本への輸出が止まって以来、栽培もされなくなっているのか？……ゆえに……幻の糸と言われる？……現地の、

輸入業者や組合・織り手さんなどに尋ねないと分からないのかな?……

以上、取り敢えずここまで……。繊維に関しては、私は全くの素人で、ネットで分かる範囲の資料をあこれ比べ、想像した限りです。まだまだ、探し切れていないのだと思います。知り合いに尋ねてはみますが、その程度で、これ以上先に進めるかどうか……。どうぞ、悪しからずご理解くださいませ。

*

以上のメールに対する、私の返信文を次に引用しておく。

*

姐さん、本当にありがとうございます。大変なお手数をお掛けしてしまい、誠に恐縮致しております。

沖縄県立図書館のデジタル文庫は御指摘戴いた細かな資料まで見ておらず、驚きでした。特に織ったものの拡大写真は「幻」でないトンビヤンのリアルな（しかし元は何かは分からない）実像を伝えて、とても感動しました。

これらの標本のトンビヤンとされるものを、それぞれ微量にサンプリングして定量分析をすれば、そのものの元が何なのか恐らくはつきりすることが出来るとは思われますが、どうも姐さんのおっしゃるように、それらは一種類ではなく、中国産苧麻や龍舌蘭かも知れず、全くの未知の別種の何かが元なのかも知れないという気もしてきます。

そこで思ったのは、特別で複雑な手間と見た目でも原材料が幻的存在であれば（若しくはそう見えるようなものであれば）、それだけ織布の神聖性や高級性は強く保持されますから、これは謂わば、曖昧で幻のままにしておくことがよかったのかも知れないですね……。などと考えているうち——定量分析やDNA分析などを夢想していた小生は……。これ如何にも無粋という気がしてきました。（後略）

*

「からからこ」姐さんには、何度、感謝申し上げます。し切れぬほどに感激している。改めて、この場を借りて深く御礼申し上げますものである。

……今……。トンビヤンと姐さんが……。私を……。遙かな美しき琉球織りの歴史の幻影の中に誘ってくれている……」

トンビヤン 龍舌蘭の花刈るなかれ御墓守

「やぶちゃん注・前田霧人氏の「鳳作の季節」に、この当時（昭和七（一九三二）年の夏休み明けに移転）いた日の丸旅館について、教え子喜納虹人氏の「雲彦と宮古島」（『傘火』昭和一二（一九三七）年四月号）にある『この旅館は坐して、肺まで徹と紺の海が見え、数十歩すれば先生が常に愛していた竜舌蘭が生えている岬に行かれた。先生の室は小

じんまりした六畳で南向きの机の上には硯箱、本、雑誌、ハサミ、鏡、電気スタンド等其他が雑然として、机の下には何時でも菓子箱が二つ三つころがっていた。押入れには本がつめてあった。夜、この室に居れば、浪の音が聞えかもめが時折なき、夜釣のポップ船などがひびくだけでひっそりしていた。先生はこの室でこそ颱風の響をきき伝統の不合理に一矢を放ち、蒼穹へ蒼穹へと手をのばして行った。(略)先生はそのかわりよく勉強された。私が行くと何時も机の前で書き物か読書かして居られた。鹿児島新聞に載せた文は切り抜いて、スクラップブックにはつてあった。文章を書かれると原稿を見せて『何処が悪いか云って呉れ』と相談された。私も率直に思うままをのべると喜んでおられた』という思い出を引用された後、『この「坐して肺まで徹る紺の海が見える」部屋で、彼の代表作「しんしんと肺碧きまで海のたび」が密かに宿されたのであろうか。また、「竜舌蘭が生えている岬」は旅館から直ぐ北に続いているポー岬で、波打ち際、竜舌蘭、細い道、お墓の列、そして丘の上の家という散歩道になっている』と記しておられ、まさにこれらの句がその光景と一致することが分かる。鳳作の薫陶を受けて俳句や短歌の道に進んだという喜納氏の文章は非常に印象的であるが、哀しいかな、前田氏によれば彼は後に中国大陸で戦死している。』

笛吹けるおとがひほそき雛かな

蛇皮線に夜やり日やりのはだかかな

「やぶちゃん注…「夜やり日やり」夜遣日遣。計画や予定など立てずに勝手気ままに進んでゆく、進行させることをいうと小学館「日本国語大辞典」にある。」

龍舌蘭トンベヤンの花のそびゆる城址かな

龍舌蘭の花に早のつづきけり

歸省近し

大隈に湧く夏雲ぞ目に戀し

「やぶちゃん注…以上七句は七月の発表句。」

なお、この昭和八（一九三二）年七月の『天の川』に鳳作は、「句作自戒」という以下の頗る印象的な文章を発表している（底本からやはり恣意的に正字化して示す。改行もママ）。

*

句作自戒

一、生の愛しさに徹せよ
過去三年の句作は小生に生命のかなしさを教へてくれました。今後共、生の愛しさに徹する事を句作の第一義にしたいと思ひます。

一、生活感情の心髓をとらへよ。
いたづらに新奇な材料を探しまはる事なく、力強い生活感情に裏づけられた現象を句にしたい、歌ひあげたいと思ひます。

一、雲彦の出てゐる句をつくれ、
一句々々をさながらに、血の通つてゐる自己の分身たらしめたいと思ひます。

*

まさに禅の趣きさえ持った自己拘束である。」

向日葵に吐き出されたる坑夫かな

向日葵に暗き人波とほりゆく

「やぶちゃん注・両句、炭鉱の景であるが場所は不詳。福岡か？ 但し、年譜からは彼が福岡に行っているのは前年の八月である（『天の川』発行所及び吉岡禅寺洞を銀漢亭に訪ねている）。このまさに当月である昭和八年八月十五日にも銀漢亭を訪ねてはいるが、この「向日葵」の二句はその八月発行の『天の川』の掲載句で、当時の雑誌発刊事情を知らないが、即吟が即掲載されたとするのは考えにくい。」

大和田やただよひ湧ける雲の峯

「やぶちゃん注…この「大和田」はまず地名とは思われない。当初、「やまとだ」で沖繩うちなーに対する内地の大和やまとにある田圃の意ではなからうか、などとヘンテコな解釈をしていた。しかも、この句は八月発行の『泉』の句で彼がこの年鹿児島に帰省したのは八月であるから直近の囑目吟ではないことになるから望郷吟か？ などとホントに半ば真剣に悩んだのである。しかし、如何に続く句群を並べて見ると、そこから見えてくるのはやはり沖繩の抜けるような青い空と「雲の峯」であり、エメラルド・グリーンの海、「わたつみ」であることが分かる。即ち、「大和田」は「おほわだ（おおわだ）」で大海神おおわたつみということなのであった。我ながらトンデモ逡巡、実に情けない気がした。」

カヌー皆雲の峯より歸りくる

夕風や海にうつりしひでり星

「やぶちゃん注…「ひでり星」早星は、早続きの夜を象徴する如き、妖しい赤く強い光りを放っている星、火星や蠍座のアルファ星アンタレス（中国名「大火」「火」で夏の宵の南天地平線近くに見える）などを指す。私は天文に暗いが、「夕風」「海にうつりし」からは後者アンタレスかと思われる。なお、言わずもがな——というより——皮肉に言えば「早星」は伝統俳句では——夏の季語——ではある。以上二句は「雲彦沖繩句輯」に所収。」

夕風をかこち合ひつつ濱涼み

濱涼み若人等は夜をあかす

遊女等もたむろしてをり月の濱

遅月ののぼれば機を下りにけり

蝉の音も人なつかしき下山かな

「やぶちゃん注…「蟬」は「轟」としたかったが、PDFではご覧の通り、転倒してしまうので新字体とした。」

鶏頭燃ゆれど空は高けれど

玉芙蓉折れてしまひし嵐かな

この秋の芭蕉の月の淋しさよ

「やぶちゃん注…以上の三句は編者データによれば昭和八年八月の『久木田みどりへの弔吟』とある。久木田みどりなる女性については不詳。追悼吟を三句残すというのは相当に親密な間柄であったことが偲ばれる。因みに久木田という姓は鹿児島県を筆頭に熊本県や宮崎県に多い姓ではある。二句目の「玉芙蓉」は牡丹（ユキノシタ目ボタン科ボタン属 *Paeonia*）の園芸品種の名。[グーグル画像検索「玉芙蓉 園芸品種」](#)。以上、十三句は八月の発表若しくは創作句。」

青空に飽きて向日葵垂れにけり

向日葵の垂れすうなじは祈るかに

向日葵に海女のゆききの夕さりぬ

泳ぎ子の電車のうなり夕澄みぬ

くり舟の上の逢瀬は月のまへ

パナマ編みは湿氣を要し南洋にては月明の夜、沖繩にては洞窟にて編む。水の滴るくらがりにて。パナマ編む男女あはれなり。

木洩れ日の徑をしくればパナマ編み

簪のぬけなんとしてパナマ編み

パナマ編む顔のゆがめる男女かな

筵戸をすこしかゝげてパナマあみ

岩窟にとりある灯はパナマあみ

「やぶちゃん注」灯「は筑摩書房「現代日本文学全集 卷九十一 現代俳句集」でも「灯」。

まどゐしてみんな胡坐やパナマ編み

丁髷を落さぬ老やパナマ編み

「やぶちゃん注」「パナマ」は先行する昭和五（一九三〇）年三月発表の句「椽先にパナマ編みある良夜かな」の私の注を参照されたい。」

獨居

干ふどしへんぼんとして午睡かな

「やぶちゃん注」以上、十三句は九月の発表及び創作パートに配されてある。」

飛魚や右手にすぎゆく珊瑚島

「やぶちゃん注…老婆心乍ら、「右手」は「めて」で、「珊瑚島」は字書見出しとしては「さんごとう」である。音からして「じま」より「とう」であろう。」

飛魚の翔^かけり翔けるや潮たのし

飛魚の我船波のあるばかり

飛魚をながめあかざる涼みかな

飛魚のついついとべる行手かな

飛魚や船に追はれて遠翔けり

煙よけの眼鏡ゆゆしや鰹^{かつを}焚き

鰹^{うず}鳥魚紋なす波に下りもする

「やぶちゃん注…種としては、ペリカン目カツオドリ科カツオドリ *Sula leucogaster*・同亜種カツオドリ *Sula leucogaster plotus*・及び同亜種シロガシラカツオドリ *Sula leucogaster brewsteri*などを指す。ウイキの「カツオドリ」によれば、『熱帯や亜熱帯の海洋に生息』し、全長六四〜七四、翼開張一三〇〜一五〇センチメートル、体重は約一キログラムで『全身は黒い褐色の羽毛で被われる。腹部や尾羽基部下面（下尾筒）は白い羽毛で被われる。種小名 *leucogaster* は「白い腹の」の意。翼の色彩も黒褐色だが、人間でいう手首（翼角）より内側の下中雨覆や下大雨覆は白い。』『嘴や後肢の色彩は淡黄色』で『オスは眼の周囲にある露出した皮膚が黄緑色。メスは眼の周囲にある露出した皮膚が黄色。幼鳥や若鳥は腹部や下尾筒に黒褐色の斑紋が入る』とある。但し、『カツオなどの大型魚類に追われて海面付近に上がってきた小魚を狙い集まる事から、漁師からカツオなどの魚群を知らせる鳥とみなされた事が由来。しかし大型魚類に追われた小魚目当てに集まる（魚

群を知らせる)のは本種やカツオドリ科の構成種に限らず、本種の和名も元々は魚群を知らせる鳥類の総称だった』ともあり、ここでも漁師や水夫が「カツオドリ」と呼称していると考えられるならば、そもそもカツオドリ *Sula leucogaster* に限定する必要はないかも知れない。

「魚紋」は通常「ぎよもん(ぎよもん)」と読み、魚の動きによって水面に出来る波の模様のことを指す。ここはそうした現象が「渦」となって見えることから「うず」と当てたものか。若しくは「鱗」の「うろくず」(魚などの鱗の意から転じて魚そのものを指す。いろくず。)の省略形か。但し、「渦」「鱗」も孰れにしても歴史的仮名遣では「うづ」でなくてはならぬので不審ではある。識者の御教授を乞うものである。」

地下室の窓のみ灯る颯風かな

颯風をよろこぶ子等と籠りゐる

秋燕を掌に拾ひ來ぬ蜚が子は

「やぶちゃん注・「秋燕」は「しうえん(しゅうえん)」で歳時記では「去ぬ燕」「巢を去る燕」「帰燕」「残る燕」などととも——本土にあっては——春に渡って来た燕が夏の間に雛を孵し、秋九月頃群れをなして南方へと帰ってゆく——空っぽの巢に淋しさが残る——などとまことしやかに書かれている——が——ここはその燕が帰ってくる南国の景である——しかも「蜚が子」が「掌に」「拾ひ來」た「秋燕」は——遂に最後に力尽きた一羽でもあったか——ここには南国の陽射しとともに歳時記の陳腐な常套的記載とは全く異なった反転した世界がリアルに詠まれているのである。季語なんする者ぞ！

以上十一句は十月の発表及び創作パートに配されている。」

颯風に倒れし芭蕉海にやる

颯風や守宮のまなこ澄める夜を

颯風や守宮は常に壁守り

颱風や守宮は常の壁を守り

「やぶちゃん注…前句は十月発行の『傘火』掲載句、後者は翌昭和九（一九三四）年一月発行の『天の川』掲載の句形であるが、前者の掲載誌とクレジットは頗る不審である。その前の「颱風や守宮のまなこ澄める夜を」という句は、同じ『傘火』の昭和八年十一月発行分に載ることが明記されている。何故、この十月の二句をその後配したのか意味が分からないからである。私はこの二句はクレジットの誤りで十一月発句ではないかと疑っており、そう断じてこのままここに十一発句として示すこととする。なお、十月の「地下室の窓のみ灯る颱風かな」が『傘火』最初の掲載句である。『傘火』は『天の川』同人であった勝目楓溪・浜田泊鷗らが創刊した同人誌で、鳳作はこの昭和八年九月に参加し、これによって俳壇で注目されるようになる（年譜の記載）。この『傘火』の『雑誌欄「火の柱」選者に横山白虹を迎え』、後の『昭和十一年一月より「生活高唱」欄を新設、西東三鬼がその選に当たり、これが、戦後、社会性俳句の第一歩といわれる』ようになる。六月に開眼の句「炎帝につかえてメロン作りかな」を発表、謂わば、俳人篠原鳳作にとって最初の恵み多き年であったといつてよい。鳳作、未だ満二十七歳であった。」

山羊が鳴くアラシ颱風の跡に佇ちにけり

宮古中學より夏休歸郷

熊ん蜂夏期大學の窓に入る

「やぶちゃん注…八月の帰省時に参加したどこかの「夏期大學」講座であろうが、年譜上での記載はないので不詳。八月十五日に『福岡市の禅寺洞居、銀漢亭』に吉岡禅寺洞『を訪ね歓迎句会に出席、午後宮島に向かう』とあるのが、ややそれらしい感じはする。」

鳶の笛夏期大學の正午を告ぐ

歸省子に年々ちさき母のあり

つれだてる老母の小さき歸省かな

「やぶちゃん注…改稿の「颱風や守宮は常の壁を守り」一句を除き、ここまでの八句は十一月の発表及び当該時期に配されたもの。」

大阪天王寺公園

月青しかたき眠りのあぶれもの

月青し寝顔あちむきこちむきに

夜もすがら噴水唄ふ芝生かな

なにはづの夜空はあかき外寝かな

「やぶちゃん注…以上の四句は十二月発行の『天の川』掲載句。「大阪天王寺公園」は現在、大阪府大阪市天王寺区茶臼山町にある市立公園。[ウィキの「天王寺公園」](#)によれば、上町台地の西端に位置しており、総面積は約二十八万平方メートルで、園内には天王寺動物園・大阪市立美術館・慶沢園を擁する大阪を代表する都市公園である。かつては天王寺図書館や天王寺公会堂、野外音楽堂もあった。明治三六（一九〇三）年に開かれた第五回内国勸業博覧会第一会場（第二会場は大阪府堺市堺区大浜で現在の大浜公園となっている）跡地の東側を。明治四二（一九〇九）年に会場公園として整備して「天王寺公園」としたもので（通天閣を含む西側は「新世界」となった）、その後、大正四（一九一五）年には東京上野・京都岡崎に次ぐ国内三番目の天王寺動物園が開園、大正九（一九二〇）年には住友家邸宅敷地が大阪市に寄付されて大阪市立美術館として開館していた。私はこの地理や沿革について暗いが、このウィキの記載の昭和六二（一九八七）年の項に、『天王寺博覧会開催に伴い、園内を再整備。映像館（マルチメディアター）などを設置する（閉幕後、公園主要部分はフェンスで囲われ、入場が有料となった。あいりん地区に近いため、公園内にはホームレスが多かったが、有料化と夜間が閉園となったことにより野宿ができなくなった）』という記載があり、それ以前の鳳作の吟詠時にも、この公園はそうした浮浪者が多くたむろしていたものか。鳳作にはこうした社会の底辺層の貧しい人々の、ある意味、強い生のエネルギーを詠んだ句が多い。それはプロレタリア俳句とは一線を画すものではないが、鳳作俳句のこの社会的な視線には戦後の社会性俳句に通ずる極めて鋭いものが私には感じられるのである。」

颱風のあしたに地ツチのすがしきよ

口に入る颱風の雨は鹽はゆし

「やぶちゃん注：「鹽」は底本では「塩」。」

ハタハタは野を眩しみかとびにけり

「やぶちゃん注：「ハタハタ」はバッタのことであろう。秋の季語である。直翅（バッタ）目雑弁（バッタ）亜目に属するバッタ上科 Acridoidea・ヒシバッタ上科 Tetrigoidea・ノミバッタ上科 Tridactyloidea のバッタ類の総称であるが、（こ）は有意に飛ぶ様からバッタ上科バッタ科シヨウリヨウバッタ亜科 Acridini 族シヨウリヨウバッタ属 *Acrida cinerea* やバッタ科トノサマバッタ *Locusta migratoria* また、バッタ亜目イナゴ科イナゴ亜科 Oxynae・ツチイナゴ亜科 *Cyrtacanthacridinae*・フキバッタ亜科 *Melanoplinae* に属するイナゴ類をイメージした方がよいかとも思われる（本邦産のバッタ類は四十種を超える。但し、ウイキの「バッタ」によれば、バッタには『イナゴ（蝗）も含まれるが、地域などによってはバッタとイナゴを明確に区別する』とあるのでイナゴは除外しておいた方が無難かも知れない）。

「眩しみか」は形容詞シク活用「眩し」の終止形に十「くので」「くから」の意の原因・理由を表わす連用修飾語を作る接尾語「み」＋疑問の係助詞「か」の文末用法。眩しいと感ずるからなのか、の意であろう。

なおこの句、昭和八（一九三三）年刊の篠田悌二郎の句集「四季薔薇」に所収されているという、

はたはたのをりをり飛べる野のひかり

と、シチュエーションが驚くほどよく似ている（学習院大学田中靖政ゼミOB・OG会 深秋会」のこの記事を参照されたい）。なお、この句は同年十二月発行の『傘火』に載ったものであるから、時間的には篠田悌二郎の句の方が先行している。朗詠してみると、鳳作の句は一旦、中七に大きな――まさにグロテスクなバッタの足のような――ぎくしやくしたブレイクがあつて頗る求心的接写的、映像的にはクロス・アップの技法が意識されているように感ぜられるのに対して、篠田の句は、広角的魚眼的――まさに昆虫の複眼のよ

うな——マルチな光彩があるのに加え、圧倒的に韻律の滑らかさが心地よく優れている。」

唇の色も日焼けて了ひけり

妹が居やことにまつかき佛桑花

「やぶちゃん注：「佛桑花」（ぶつさうげ／ぶつそうげ）はビワモドキ亜綱アオイ目アオイ科フヨウ属ブツソウゲ *Chinese hibiscus* はハイビスカスの和名。」

獨り居の灯に下りてくる守宮かな

蛾をふ肢はこびゆく守宮かな

機窓に鏡のせある小春かな

「やぶちゃん注：「機窓」は「はたまど」で機織り機の置いてある別棟の機屋はたや若しくは機織り部屋の窓のことか？ それとも何か独特の（機織り機に似た）構造の窓のことか？ 「日本国語大辞典」にも「機窓」は乗らない。ネットで引っ掛かるのは、これ、飛行「機」の「窓」ばかりである。私は既にこの疑問を杉田久女の、

燕に機窓明けて縫ひにけり

の注で提示しているのだが、どうもここまでくると最初の私の解への確信度が増す。ここでもしかもそれが宮古島の景であってみれば、そこに独特の南国沖繩のちゅらかーぎー（美人）の面影の立ってすこぶる雰囲気のある映像が浮かんでくるのである。」

新糖のたかきにほひや馬車だまり

「やぶちゃん注：「新糖」現在の黒糖新糖には特にルビはなく使われているから「しんたう

（しんとう）の読みでよいものと思われる。」

松蟬が鳴いてゐるなり午前五時

「やぶちゃん注…底本では「蟬」は「蟻」であるが、PDFではご覧の通り、転倒してしまうので新字体とした。「松蟬」半翅（カメムシ）目頸吻亜目セミ型下目セミ上科セミ科セミ亜科ホソヒグラシ族ハルゼミ *Terpnosia vacua* の異名。ウィキの「ハルゼミ」によれば、『日本と中国各地のマツ林に生息する小型のセミで、和名通り春に成虫が発生する。晩春や初夏を表す季語「松蟬」（まつぜみ）はハルゼミを指す。』『ヒグラシを小さく、黒くしたような外見である。オスの方が腹部が長い分メスより大きい。翅は透明だが、体はほぼ全身が黒色』か『黒褐色をしている』。『日本列島では本州・四国・九州、日本以外では中国にも分布する』。『ある程度の規模があるマツ林に生息するが、マツ林の外に出ることは少なく、生息域は局所的である。市街地にはまず出現しないが、周囲の山林で見られる場合がある』。『日本では、セミの多くは夏に成虫が現れるが、ハルゼミは和名の』通り、四月末から六月にかけて発生する。『オスの鳴き声は他のセミに比べるとゆっくりしている。人によって表現は異なり「ジーツ・ジーツ…」「ゲーキョ・ゲーキョ…」「ムゼー・ムゼー…」などと聞きなされる。鳴き声はわりと大きいが生息地に入らないと聞くことができない。黒い小型のセミで高木の梢に多いため、発見も難しい』。『日本ではマツクイムシによるマツ林の減少、さらにマツクイムシ防除の農薬散布も追い討ちをかけ、ハルゼミの生息地は各地で減少している。各自治体レベルでの絶滅危惧種指定が多い』。ここで鳳作が聴いているのは、もしかするとヒメハルゼミ属ヒメハルゼミ亜種ヒメハルゼミの、さらなる亜種オキナワヒメハルゼミ *Euterpnosia chibensis okinawana* Ishihara, 1968 であるかも知れない（としても、亜種としての同定と命名はご覧の通り、この句よりも後のことである。）」

埼々に法螺吹きならず良夜かな

「やぶちゃん注…「埼々」は「さきさき」で、島の「崎々」の謂いであろう。万葉以来の古語である。これは宮古島で行われる悪霊払いの伝統行事の囃目吟であろう。

以下、[ウィキの「パントウ」](#)によると、宮古島の歴史について書かれた「宮古島庶民史」（稲村賢敷、一九四八年）によれば、「パーン（食べる）＋ピトウ（人）」が訛化した言葉であると言う説が述べられている。現在、平良島尻と上野野原の二つの地区で行われているが、両地区で内容が大きく異なる。その内の野原のパントウは旧暦十二月最後の丑の日に行われる（地元では「さていはらい」の里祓い）ともいう。男女で構成し、女達は頭

や腰にクロググ(単子葉植物綱ヤシ目ヤシ科クロググ *Arenga engleri*: 上記はウイキの「クロググ」へのリンク。)とセンニンソウ(双子葉植物綱キンポウゲ目キンポウゲ科センニンソウ *Clematis terniflora*: [ウイキの「センニンソウ」へのリンク](#)。)を巻き、両手にヤブニッケイ(双子葉植物綱クスノキ目クスノキ科クスノキ属ヤブニッケイ *Cinnamomum tenuifolium*: [ウイキの「ヤブニッケイ」へのリンク](#)。)の小枝を持つ。男の子の一人はパーントウの面を着け、他のものは小太鼓と法螺貝で囃す(下線やぶちゃん)。夕方祈願のあと集落内の所定の道を練り歩き厄払いをする、とある。一方の平良島尻のものは来訪神の演出がマッドメンさながらで、仮面の蔓草を纏い全身に泥を塗った姿で三体登場し、誰彼構わず人や新築家屋に泥を塗りつけて回るもので、泥を塗ると悪霊を連れ去るとされている、とある。」

飛行場三句

近づけばみな着ふくれてローラ曳き

ひもすがら冬の海みてローラ曳き

ローラーの曳きすててあり芝枯るる

「やぶちゃん注…これら三句は昭和八(一九三三)年の末句であるが、この飛行場なるものがよく分からない。実は現在の宮古空港は昭和一八(一九四三)年に旧日本軍により海軍飛行場として建設されたものであるが、ネット上の諸記載を見る限りでは、それ以前には宮古島には飛行場に相当するものはなく、総ては交通を船舶に頼っていたとあるばかりだからである。まさか、実にこの年に起工してやっと十年後に出来上がったとでもいうのであろうか? 識者の御教授を乞うものである。」

海鳴のさみしき夜學はげみけり

「やぶちゃん注…以上、十九句は十二月の発表及び創作句。」

昭和九(一九三四)年

幕合ひの人ながれくる花氷

花氷藝題のビラを含みゐる

天翔るハタハタの音を掌にとらな^と

秋天に投げてハタハタ放ちけり

ハタハタの溺れてプール夏逝きぬ

颱風をよろこぶ血あり我がうちに

「やぶちゃん注…この句は鳳作の没した昭和一一（一九三六）年九月十七日から一年後の翌昭和十二年九月発行の『セルパン』に朝倉南男編「篠原鳳作俳句抄」として載ったもの的一句。ここに配されている以上は句作データが残るものと思われる。」

冬たのし

好晴の空をゆすりて冬木かな

好晴の空をゆすりて冬木あり

「やぶちゃん注…前者が昭和九（一九三四）年一月発行の『傘火』の、後者が同年三月発行の『天の川』の句形。「好晴」は「かうせい（こうせい）」で快晴と同義であるが、冬の季語でもあるらしい。余談であるが、同義語でありながら「快晴」が季語だという話は聞いたことがない。如何にも奇怪な話である。これだから有季の非論理性には虫唾が走る。それは伝統俳句の文学性の核心であるなどというのであれば、後生大事の歳時記は実際の季節や生物生態とおぞましいほどに齟齬する無数の博物学的記載を金輪際やめたがいい。

以下、「うたたねや」までの五句は『傘火』に前書「冬たのし」で連作で載ったものである。

連作であることから、「冬たのし」は二字下げで一行空けとした（以下、連作題は同様の処置を施すが、この注は略す。）

筆たのし暖爐ほてりを背にうけ

室咲や暖爐に遠き卓の上

「やぶちゃん注…「室咲」は「むろざき」と読み、盆栽や切り枝を室内の炉火などで暖めて早咲きさせたものを指す。」

椅子の脚暖爐ほてりにそり返る

うたたねや糸の玉は足もとに

「やぶちゃん注…ここまでが「冬たのし」の一月発行の『傘火』の連作題。以上、十一句は底本の昭和九年一月相当のパートに配されたもの。」

冬木影しづけき方へ車道わたる

冬木影夏々ふんで學徒來る

冬木影解剖の部屋にさしてゐる

夕木影解剖の部屋のカーテンに

「やぶちゃん注…以上四句は二月発行の『天の川』の発表句。一種の組写真のような連作モニタージュであるが、時間の切り取りは上手くなされたものの、初五を恣意的にほぼ統

一したことと「解剖の部屋」の固定化によって、折角の二句目のカツカツという足音のS
Eが後二句で十全に生かされず、腑分けの臭いも消毒消臭されてしまった。」

時計臺

冬木空時計のかほの白聖あり

おでん喰ふそのかんばせの鋭ときゆるき

おでん食ふよ轟くガード頭の上に

おでん食ふよヘッドライトを横浴びに

「やぶちゃん注：「ヘッドライト」の拗音はママ。これ以前の句には認められない大きな変化である。」

冬木空大きくきざむ時計あり

大空の風を裂きゐる冬木あり

時計臺

冬木空するどく聳てる時計あり

冬木あり自動車ひねもす馳せちがふ

「やぶちゃん注：以上、八句は三月の発表句。」

氷上へひびくばかりのピアノ弾く

ふるぼけしセロ一丁の僕の冬

「やぶちゃん注…鳳作の名吟。前後の句を見るにこれらを宮澤賢治の句だと言っても信じてしまいそうな気がする。なお、前田霧人氏の「鳳作の季節」によれば、この句について、この『「僕」は「私」とも取れるが、鳳作研究家で彼と親交もあつた山口聖二は学校の用務員など「下僕」の「僕」であると断じる。そして、「そうするとこの句のイメージは、ものすごいほど空間と生活を拡大してくる。」（「篠原鳳作論―その概説」「形象」昭和四十一年十月号）とするのであるが、さて、皆さんの解釈は如何であろうか』と記しておられる。暫く引いておく。私にとってはあくまでも一人称の「僕」である。」

雪晴のひかりあまねし製圖室

「やぶちゃん注…以上、四月の発表句。」

青麥の穂のするどさよ日は白く

麥秋の丘は炎帝たたらふむ

トマトーの紅昏れて海暮れず

トマトウの紅昏れて海くれず

「やぶちゃん注…前者が五月発行の『天の川』の、後者が六月発行の『傘火』の発表句。最後の句を除く、三句は五月の発表句。」

トマト賣る裸ともしは鈴懸に

「やぶちゃん注：「裸ともし」は「裸灯し」であろう。ホヤなしのランプかアセチレンか。」

太陽を孕みしトマトかくも熟れ

灼け土にしづくたりつつトマト食ふ

月青く新聞紙をしとねのあぶれもの

ルンペン^{カミ}の寢に噴水の奏でけり

「やぶちゃん注：以上の二句は『現代俳句 3』とあるが、これは雑誌ではなく、鳳作没後の昭和一五（一九四〇）年に河出書房から刊行された「現代俳句」第三巻のことと思われる。

鳳作得意のルンペン句。「ルンペン」はドイツ語 Lumpen（ルムペン：動詞では「のらくらと暮らす・放蕩生活をする」、名詞では「襤褸布・襤褸服」「屑・がらくた」で、無頼の徒・ゴロツキや広く浮浪者を指す場合には正しくは Lumpengesindel（ルムペングズインデル）と言う）を語源とする。作家下村千秋（しもむらちあき 明治二六（一八九三）年～昭和三〇（一九五五）年）が震災恐慌から世界大恐慌へと続いた経済破綻によって大正末から昭和初期にかけて巷に溢れていた失業者や浮浪者のどん底生活の実態を克明に描いた新聞小説「街のルンペン」（昭和五（二〇三〇）年朝日新聞夕刊連載）が評判となったことから一般に広まった語で、下村千秋の作品群自体が『ルンペン小説』『ルンペン文学』とも呼ばれた。（後半部分は、茨城県稲敷郡阿見町の公式サイト内にある「観光」の中の、「阿見が生んだルンペン文学の小説家 下村千秋」を参照した。）

公園所見

ルンペンの早やきうまゐりに夜霧ふる

ルンペンに今宵のベンチありやなし

「やぶちゃん注…本句も『現代俳句 3』とある（恐らくは鳳作没後の昭和一五（一九四〇）年に河出書房から刊行された『現代俳句』第三巻）。」

南風の岩にカンバス据ゑて描く

海描くや髪に南風ふきまろび

「やぶちゃん注…前田霧人氏の「鳳作の季節」によれば、この句について、『この頃、彼は教師の欠員に伴い、公民、英語以外に図画の授業を受け持つようになり、それは『こんな句があるから、新学年のこの四月からのことなのであろう。彼は生徒と一緒に野山に海に出掛け、実に熱心に指導する。その結果、赴任当初の短歌や俳句指導の時と同じように、学校全体が絵に熱中し出す。そして、尚介が幹事となって「宮古中学白陽画会」が出来て、「美術賞」を設け展覧会を催すまでになる。このように、何時でも誰にでも直ぐに火を付ける雲彦であった』として、宮中健（これは下宿の同僚の慶徳健で彼のペンネームとある）氏の「篠原鳳作の印象」から『「天の川」昭和三十六年三月号篠原さんは、下宿では絵も書きました。スケッチブックに水彩といった簡素なものでしたが、ランプを真上から描いたものは、今でも鮮明に頭にのこっています。この構図も感覚も、句につながるものがあると思います』と引用、『雲彦は生徒の前では余り絵を描く姿を見せなかったが、彼にとつては絵画も写真も大いなる俳句の糧であり、人知れず努力を惜しまないのであった』とある。

以上、九句は六月のパートに載る。」

向日葵の照るにもおぢてみごもりぬ

「やぶちゃん注…この妊婦は不詳（この時鳳作はまだ独身で、彼の子ではないので注意）。表現の親愛感から見ると、那覇市の歯科医に嫁いだ姉の幸があり、また、鳳作の招きで同じく歯科医の実兄国彬くによしが同じ宮古島の平良港に開業していたから、この孰れかの親族の妊婦のように思われる。」

枕邊に苺咲かせてみごもりぬ

夕立のみ馳けて向日葵停れる

ひまはり

向日葵は實となり實となり陽は老いぬ

「やぶちゃん注…以上、四句は総て七月発行の『天の川』の発表句。」

ひまはり

向日葵の照り澄むもとに山羊生るる

向日葵と蝉のしらべに山羊生れぬ

「やぶちゃん注…底本では「蟬」は「蠶」であるが、PDFではご覧の通り、転倒してしまっているので新字体とした。」

向日葵の向きかはりゆく青嶺かな

向日葵の日を奪はんと雲走る

「やぶちゃん注…以上の四句は八月発行の『天の川』及び同月発行の『傘火』掲載の句であるが、実は底本ではこれらの前の七月発行の『天の川』に載る「向日葵は實となり實となり陽は老いぬ」の前書「ひまわり」が、これら四句を含む連作の前書である旨の編者注記が載る。しかし、月違いの発表句の連作、それも「向日葵は實となり……」一句だけを載せて『連作』というのは如何にも解せない。さらに言えば、向日葵連作なら「向日葵は實となり……」の前にある「夕立のみ馳けて向日葵停れる」（更に言わせてもらおうならその二句前の「向日葵の照るにもおちてみごもりぬ」も）「ひまわり」の連作中の句であると言っておかしくない（何と言ってもこれらは総て同じ七月号『天の川』所載句なのである）。これは恐らく、七月号の「向日葵は實となり……」の単独一句の前には「ひまわり」と言う前書があり、そして改めて八月号のこの四句の前にも今度は連作としての前書「ひまわり」があるのであろう。全集として纏める際の手間を省いたものであろうが、如何にも違

和感のある仕儀と言わざるを得ない。そこで私のテキストでは改めて「ひまわり」という前書を附させて貰った。

なお、これらの「向日葵」連作は鳳作にとってエポック・メイキングなものとなった。前田霧人氏の「鳳作の季節」によれば、『天の川』の編集責任者であった北垣一柿が『天の川』八月号の「軽巡邏船(一)」でこの第一句を「雲彦時代―断じて夢ではなさそうである。」と絶賛、『むき、になってしかも句としてのこの静謐、用語、音律、共にきわだった特異性を有しない。此処が私にとっては尚更うれいのである』と述べ、『次いで、波郷が「俳句研究」十月号の「『天の川』に与う」で、これら一連の向日葵の句を取り上げ、一柿の評に共感を示すと共に、「晦渋ならざる天の川作家とは雲彦、の如きをいうのである。」と評価する。「馬酔木」、「天の川」が甘美・晦渋論争で応酬している間も、若い波郷と雲彦はこうしてお互いを認め合う。雲彦の作品が「傘火」、「天の川」以外から評価を受けるのは恐らくこれが初めてであり、しかも、それが総合誌「俳句研究」に掲載されたのである。彼の名が全国に知られるようになる端緒であった』と記しておられる。」

山路

草莓あかきをみればはは戀し

「やぶちゃん注：「草莓」バラ目バラ科バラ亜科 Rubeeae 連キイチゴ属 *Rubus* subg. *Idaeobatus* 亜属クサイチゴ *Rubus hirsutus*。グーグル画像検索「[Rubus hirsutus](#)」。私も懐かしい……白い花の甘い小さな赤いつぶつぶの実……裏山でよく採って食べたね、母さん……」

一碧の水平線へ籐寢椅子

「やぶちゃん注…以上、六句は八月の発表句。」

浪のりの白き疲れによこたはる

浪のりの深き疲れに睡みも白く

「やぶちゃん注：「浪のり」は船が大きな波のうねりに乗ることもいうが、私にはどうも「白き疲れ」「よこたはる」「睡も白く」（船の波乗りであれば眠くなる前に気持ちが悪くなるように、それを「白き疲れ」と表現するだろうか？……しないとは言えぬか……船酔いのぼーっとした感覚は「白き疲れ」としてもおかしくないな）、そして続く句（この二句と次の句は同じ九月発行の『天の川』掲載の三句なのである）をセットに読んだ初読時、やはりこれは船上の詠ではなく、サーフィンとしての「浪のり」をし疲れた後の、白砂の浜での景であるとしたか読めなかったである。

因みに「浪のり」の本邦での起源はウィキの「サーフィン」で見ると、『江戸時代の文献に、庄内藩・出羽国領の湯野浜において、子供達が波乗りをしている様子を綴った記述や、「瀬のし」と呼ばれる一枚板での波乗りが行われたという記録が残っている。すなわち、現在の山形県庄内地方が日本の波乗りの文献的な発祥の地と見なせる』とある。但し、『現在の形式の日本でのサーフィンの発祥の地は、神奈川県藤沢市鵠沼海岸、鎌倉市、千葉県鴨川市、岬町太東ビーチと言われており、第2次大戦後日本に駐留した米兵がそれらのビーチでサーフィンをしたのがきっかけという説がある』とあり、ここでの「浪のり」というのも今のサーフィンのようなものとは大分様子の異なるもののようにも思われる。宮古島のサーフィンの歴史にお詳しい方の御教授を乞うものである。

……が……ところが、である。
……どうも残念なことに、これは、やはり、サーフィンなどというのはトンデモ解釈で、やはり、船の「浪のり」⇨波乗り⇨ピッチングであるらしい。次の次の「しんしんと肺碧きまで海のたび」の私の注及び次の月の「海の旅」句群の注を参照されたい。……ちよつと淋しい気がしている……」

海焼の手足と我とひるねざめ

しんしんと肺碧きまで海のたび

「やぶちゃん注…これは謂わずと知れた鳳作の絶唱にして第一の代表作である。実はこれは底本では次の十月の発表句の中に配されてある。それは次の月の句群を見て戴けば分かる通り、この句がまず単独で九月の『天の川』の前の三句と一緒に示され（それと前三句との配列は不詳であるから、取り敢えずここでは最後に置いた）、翌月の『傘火』には、この「しんしんと」を含むまさに鳳作会「心」の「海の旅」句群五句が纏めて発表されたことによる（即ち、底本は基本が時系列編年体でありながら、こうした句群部分では編者による操作が行われているために正しく並んでいない箇所があるということである。これは今回の電子化で初めて気づいた。特にこの知られた鳳作の作でそれが行われているようとは

想像だにしなかったのでちよつとショックである)。……そうして……そこではやはり知られたように船がまさに「浪のり」して「シーソー」を繰り返す景が二句も詠み込まれているのである。——残念ながら、やはり——前にあった「浪のり」の句のそれは、船の「波乗り」——ピッチングを指していると考えざるを得ないということになる。但し、ここにお一人だけこれをやはり真正のサーフィンと解釈されている方がいることも附記しておきたい。それは何度も引いているあの前田霧人氏の「鳳作の季節」である。そこで霧人氏は『現在、「波乗り(サーフィン)」は夏の季語であるが、当時はまだ代表的な歳時記にも載録されておらず、既に彼が有季、無季にこだわらない新しい素材、新しい表現の開拓に意欲を見せていることが分かる』と述べておられるのである。少し、嬉しくなった。

なお、前田霧人氏の「鳳作の季節」では、この句について、この鳳作の本句発表の二ヶ月前に発表されている川端茅舎の、

いかづちの香を吸へば肺しんしんと

という句を掲げられ、鳳作の「新興俳誌展望」(『傘火』昭和九(一九三四)年)の中の「『走馬灯』」句評にある、『長い間病床にある茅舎氏の句には何時も珍しい感覚と異常な力とが漲みなぎつてゐる。茅舎氏の句とする対象は病床にあるせいか決して所謂新しい素材ではない。氏は常に平凡なる題材を、新しい感覚と力強い表現とで全く別個な新しい香気あるものとされてゐる』(私の底本とする「篠原鳳作全句文集」所載のものを恣意的に正字化して示した)という叙述をも引かれて、『雲彦も生来体が頑健でなかったから、茅舎に共感する所は大なるものがあ』り、本句の誕生に茅舎のこの句が『大きな影響を与えたことは、両句を比較すれば誰の眼にも明らかなのである。それは、単に「しんしんと」、「肺」という言葉の共通点に留まらず、「平凡なる題材を、新しい感覚と力強い表現とで全く別個な新しい香気あるもの」としている所が共通するのである』と述べておられる。これはまさに正鵠を射た優れた評である。

前に注した通り、以上四句は九月発行の『天の川』掲載句である。」

海の旅

満天の星に旅ゆくマストあり

船窓に水平線のあらきシーソー

しんしんと肺碧きまで海のたび

幾日はも青うなばらの圓心に

幾日はも青海原の圓心に

甲板と水平線とのあらしきシーソー

(註) シーソーは材木の兩端に相對し跨り交互に上下する遊戯。

「やぶちゃん注」：「海と旅」は連作題。鳳作畢生の句群であれば、全体を示した上で、最後に煩を厭わずに一括注することとする。まず、掲載誌であるが（発行は総て昭和九（一九三四）年。『現代俳句』は底本に示されたクレジットを号数と推定した）、

満天の星に旅ゆくマストあり 『天の川』十月／『傘火』十月

船窓に水平線のあらしきシーソー 『傘火』十月

しんしんと肺碧きまで海のため 『天の川』九月／『傘火』十月

幾日はも青うなばらの圓心に 『天の川』十月／『現代俳句』三号

幾日はも青海原の圓心に 『傘火』十月

甲板と水平線とのあらしきシーソー 『傘火』十月

である（最後の句の「註」も当然、『傘火』十月のもの）。

以上から、この「海の旅」という前書きを持つ決定稿は『傘火』のそれと考えてよく、それは以下のようになる。

海の旅

満天の星に旅ゆくマストあり

船窓に水平線のあらしきシーソー

しんしんと肺碧きまで海のため

幾日はも青海原の圓心に

甲板と水平線とのあらしきシーソー

(註) シーソーは材木の兩端に相對し跨り交互に上下する遊戯。

なお、「幾日はも青海原の圓心に」の「はも」は終助詞「は」＋終助詞「も」で、深い感動(くよ、あああ!)を表わす。

これらとの連関性が、前月の「浪のり」の句に強く認められる(しかもそこには「しんしんと肺碧きまで海のたび」がプレ・アップされてもいる)ことから、やはり「浪のり」は乗船している船の波乗り、ピッチングであるということになる。お騒がせした。

年譜によれば、この昭和九(一九四三)年十月、沖縄県立宮古中学校から鹿児島県立第二中学校教諭として転任しており、この時、俳号を「雲彦」から「鳳作」と改めたとある。また、当該年の年譜の転任記事の後には、

《引用開始》

現在の宮古高校行進曲は、作詞作曲とも鳳作である。

宮中行進曲

一、香りも高き橄欖の

ときはの緑かざしつっ

希望の満てる清新の

我が宮中を君知るや(以下六連まで続く)

《引用終了》

とある。二〇一四年春に、個人的にこの楽曲及び歌詞について沖縄県立宮古高等学校に問い合わせを行っているが、本一括版を作成した同年八月現在に至っても回答はない。因みに、前田霧人氏の「鳳作の季節」によれば、「篠原鳳作の周辺」(平良尚介・大山春明・砂川寛亮・伊志嶺茂・糸洲朝薫編昭和五六(一九八一)年四月「篠原鳳作の周辺」編集室刊)に、

宮中行進歌

作詩・作曲 篠原國堅

一、

香りも高き橄欖の

常磐の緑かざしつっ

希望に満てる清新の
我が宮中を君知るや

二、

ああ黎明の霧はれて

その名も床し太平山の

松に朝日子映ゆるとき

我が學園の鐘ぞ鳴る

三、

夕べの雲の茜して

圖南の翼つらねつつ

秋燕高く翔るとき

健兒無限の想あり

四、

黒潮吼ゆる大えいを

一扁舟によぎりたる

不拔の英氣我にあり

いざや鍛えん雄心を

と出るが（但し、恣意的に正字化した）、前に出した年譜の『六連』という記載と一致しない。氣長に宮古高等学校からの返信を待ちたい。」

月のかげ塑像の線をながれゐる

月光のおもたからずや長き髪

そそぎゐる月の光の音ありや

窓に入る月に塑像壺をかつぎ

背の線かひなの線の青月夜

「やぶちゃん注…ここまでの五句が十一月発行の『傘火』の「月光と塑像」連作と思われる。同月の『天の川』にも載るが、それは頭の三句のみである。

壺を担ぐ乙女像というと……私は何をさておいてアングルの絵「春」(Ingres' La Source,)をイメージしてしまう部類の人間である(グーグル画像検索「Ingres La Source」)。

闇涼し蒼き舞台のまはる時

「やぶちゃん注…これは野外公演であるが、場所は不詳。時期的には宮古ではなく鹿児島か。何か、御存じの方、御教授を乞う。これは『現代俳句 3』の掲載句とある。以上、六句は十一月の発表句及び同パート(最後の句)に配されたもの。」

稻妻のあをき翼ぞ玻璃打てり

稻妻の巨き翼ぞ嶺^ネを打てる

建築現場

鐵骨に夜々の星座の形正し

鐵骨に忘れたやうな月の虧カケ

「やぶちゃん注…二句連作。以上四句は総て、十二月発行の『天の川』掲載句。個人的にこの建築場の二句を好む。「鐵骨に忘れたやうな」という部分は推敲の余地があるように（特に中七の直喩が今一つという感じがする）は思われるが、「鐵骨」という近代性と「星座」及び「虧」けた「月」とのシニールレアリスティックな取り合わせ、「鐵骨」という近代の象徴物が悠久の天然自然の「星座」と「月」をかつちりとトリミングする手法が、憎いまでにモダンで洒落ている。」

昭和一〇（一九三五）年

青空に觸れて

紺青の空に觸れゐて日向ぼこ

紺青の空に觸れゐて日南ぼこ

手に足に青空染むと日向ぼこ

手に足に青空染シむと日南ぼこ

「やぶちゃん注…「青空に觸れて」は連作題。以上四句は、それぞれ前の句が一月発行の『天の川』の、後の句が同じく一月発行の『俳句研究』の句形である。」

苺持つ指の冬陽をたのしめり

園のもの黄ばむと苺輪に吹ける

「やぶちゃん注：「園のもの」は者で園丁が苑の草花が冬に向かって「黄ば」んだ、と物謂いして「莨」を「輪に吹」いているのであるうか？ そうではあるまい。「園の」物、その草花はすっかり季節の中で「黄ば」んでしまったという感懐の中、当の詩人がその景の中に立って「莨」を「輪に吹」いているのか？ はたまた、「莨」の煙をそのまま吐いては「園の」美しい草木がヤニで「黄ば」んでしまうから、と、当の詩人は「莨」の煙を敢えて空高く「輪に吹」き上げているのであるうか？ しかし、とするならば「黄ばむと」の引用の格助詞「と」は如何にもな客体表現でおかしいではないか？ いやいや、これは園を独りで歩いているのではあるまい、詩人は恋人連れなのだ（次の注も参照のこと）、そして「園の草木が黄ばんじやうといけない」と独り言ともつかぬ気障な台詞を吐いて、高々と「莨」の煙を空高く「輪に吹」き上げているんじゃないか？……いやはや……少なくとも私には意味がとれぬ句ではある。識者の御教授を乞いたい。」

新刊と秋の空ありたばこ吹く

秋の陽に心底醉へりパイプ手に

シンソコ

幻想

雪の夜はピアノ鳴りいづおのづから

雪あかり昏れゆくピアノ弾き澄める

「やぶちゃん注…以上、八句は一月の発表句。底本では頭の「日向ぼこ」二句の後（「日南ぼこ」とする二句のヴァリエーションは底本では補注として句集の後に配されている）句群の後に「一碧の空に横たふ日南ぼこ」の句を配している。これはこれらの句と同字創作であるとしてここに置いたのであろう（事実、その可能性はすこぶる高いであろう）が、この「一碧の空に横たふ日南ぼこ」の句は二ヶ月後の三月発行の『俳句研究』掲載句である。私はあくまで編年を守るためにそちらに移した。

因みに鳳作は、この昭和一〇（一九三五）年一月二十二日に鹿児島銀行頭取前田兼宝四女秀子と結婚、鹿児島市上之園町うえのそのちよう三十八番地に新居を構えた（前田兼宝という名は大正一三（一九二四）年五月に投票された第十五回衆議院議員総選挙の鹿児島県三区で当選した

議員と同名同名である。同一人物であろう。」

除夜風景

氷雨する空へネオンの咲きのぼる

ダンスホール

除夜たぬし警笛とほく更くるとき

「やぶちゃん注…「たぬし」は「たぬし」で「たぬし」と同義の近世古語。「日本国語大辞典」によれば、万葉仮名で現在、「の」の甲類とされている「怒」「努」などを、近世の万葉の訓詁学で「ぬ」と読んだことから出来た歌語である。」

理髪舗

廻轉椅子くるりくるりと除夜ふくる

「やぶちゃん注…「廻」は正字としたかったが、PDFでは表示不能なので新字体とした。」

年あけぬネオンサインのなきがらに

「やぶちゃん注…以上、四句は二月発行の『天の川』及び三月発行の『俳句研究』に冒頭標記の「除夜風景」の連作として発表されたもの。」

一碧の空に横たふ日南ぼこ

「やぶちゃん注…先行する「雪あかり昏れゆくピアノ弾き澄める」の句の私の注を参照されたい。」

空とネオンと

いぶせき陽落つとネオンはなかぞらに

「やぶちゃん注…以下、同前書の連作（『俳句研究』では中に小項目の前書「十字路」があるため二字下げとした）であるが、発表された二雑誌、三月発行の『天の川』及び同三月発行の『俳句研究』で掲載句や句形に異同がある。これは『俳句研究』のみに載る。」

凍て空にネオンの塔は畫きやまず

凍て空にネオンの塔は畫^かきやまず

「やぶちゃん注…前者は三月発行の『天の川』の、後者は同三月発行の『俳句研究』の句。」

凍て空にネオンの蛇のつるつると

「やぶちゃん注…『俳句研究』のみに載る。」

凧の空にネオンのほびこれる

凧の空へネオンのほびこれる

「やぶちゃん注…前者は三月発行の『天の川』の、後者は同三月発行の『俳句研究』の句。」

凍て空のネオンまはれば人波も

「やぶちゃん注…『俳句研究』のみに載る。」

はてしなき闇がネオンにみぞるるよ

「やぶちゃん注…両誌に載る。」

書深きネオンの骸からにしぐれある

「やぶちゃん注：両誌に載る。」

十字路

ライト

警笛に頭光に氷雨降りまどふ

「やぶちゃん注：『俳句研究』のみに載る。」

冬木さへネオンの色に立ち並び

「やぶちゃん注：『俳句研究』のみに載る。以上、十二句は三月の発表句。なお、年譜によれば、『この頃、「成長の家」を愛読するようになり、その神想観を正座によつて修行しはじめている』とある。ウイキの「成長の家」によれば（アラビア数字を漢数字に代えた）、『谷口雅春により創設された新興宗教団体』で、『その信仰は、神道・仏教・キリスト教・イスラム教・ユダヤ教等の教えに加え、心理学・哲学などを融合させ』たもので『全宗教の真理は一つと捉えている』という。政治的には『宗教右派色の強い組織』である。『創始者（生長の家では開祖や教祖の名称は使われない）の谷口雅春は、紡績会社勤務のときから一九一八年（大正七年）に大本の専従活動家になり、出口王仁三郎の『靈界物語』の口述筆記に携わった他、機関紙の編集主幹などを歴任した。同時期に大本の本部で活動していた江守輝子と出会い、一九二〇年（大正九年）十一月二十二日に結婚』、『一九二二年（大正十一年）の第一次大本事件を機に、大本から離脱した浅野和二郎と行動を共にし、翌一九二三年（大正十二年）には浅野が旗揚げした『心霊科学研究会』に加わった』。『雅春は、外資系石油商ヴァキュウム・オイル・カンパニー勤務の傍ら『心霊科学研究会』で宗教・哲学的彷徨を重ね、一燈園の西田天香らとも接触した。特に当時流行していたニューソート（自己啓発）の強い影響を受け、これに『光明思想』の訳語を宛てて機関紙で紹介した』。『一九二九年（昭和四年）十二月十三日深夜、瞑想中に「今起て！」と神から啓示を受けたことを機に、一九三〇年（昭和五年）三月一日に修身書として雑誌『生長の家』一〇〇〇部を自費出版した（生長の家ではこの日を以て「立教記念日」としている）』。『人間・神の子』『実相一元・善一元の世界』『万教帰一』のニューソート流主張により、支持者・講読者を拡大。『生長の家』誌で発表した雅春の論文は一九三二年（昭和七年）に『生命の實相』としてまとめられ、一九三五年（昭和十年）には購読者を組織して「教化団体生長の家」を創設する。各地に支部を設立し、また学校などでも生長の家の講演会が開かれるなど教勢を拡大した』とある。」

『くちづけ』

くれなるの頬のつめたさぞ唇づくる

「やぶちゃん注：「頬」は底本では「蝨」であるが、PDFファイルではご覧の通り、転倒してしまっているので新字体とした。」

そのゑくぼ吸ひもきえよと唇づくる

くちづくるときひたすらに眉ながき

くちづくるとき汝が眉のまろきかな

「やぶちゃん注：以上、『くちづけ』という総標題の連作であるが、最後に配した（実は底本ではこれが連作の頭にある）「くちづくるとき汝が眉のまろきかな」という句は、鳳作の没後（昭和一一（一九三六）年九月十七日心臓麻痺により逝去）の翌昭和一二（一九三七）年九月の『セルパン』の朝倉南海男（「なみお」と読むか）編「篠原鳳作俳句抄」に載るもので、前の三句は昭和一〇（一九三五）年四月発行の『天の川』に発表されたものである。『くちづけ』という二重鍵括弧標題は映画の題名を匂わせるが、同時期の作品には見いだせない。一応、暫くはキス、ロづけ、という一般名詞のそれを平仮名書きで強調表記したものとってはおく。この連作は、この一年前の昭和九年四月号『俳句研究』に発表されて一大センセーションを巻き起こした日野草城の連作「ミヤコ・ホテル」を想起させるが、前田霧人氏は「鳳作の季節」で『草城の句と根本的に異なるのは、この作品がフィクションではなく新婚の実生活から出たものであり、また、無季であるという』点にあると述べておられ、鳳作の新婚の蜜月の実景句ととっておられる。」

ルンペン晩餐圖

ルンペンとすだまと群れて犬裂ける

ルンペンの唇の微光ぞ闇に動く

ルンペンを彼の犬の血のぬくめけむ

血ぬられたるルンペンの手が睡りゐる

「やぶちゃん注：前田霧人氏の「鳳作の季節」に、『篠原鳳作の周辺』（平良尚介・大山春明・砂川寛亮・伊志嶺茂・糸洲朝薫編昭和五六（一九八一）年四月「篠原鳳作の周辺」編集室刊）から教え子と思しい平良雅景氏の「ルンペン晩さん図」から、『先生は下宿の近くに漲水神社があつて、その境内にはルンペンが二人寝ていた。この二人の男は犬捕り（野犬狩人）で、はじめて見る先生にはルンペンに見えたに違いない。その犬捕りが昼間から酒を飲んで相棒の犬捕りと口論のあげく寝てしまい、また酔いがさめると漂泊の足どりで、どこかへ消えてゆく、人のよい先生は、このルンペンにバスケットやトマトをよく恵んで与えた。このことが、「ルンペン晩さん図」として発表されています』と引用され

てある。漲水神社は宮古島市平良西里にある漲水御嶽のこと。御嶽についてははりみずうたきウィキの「御

嶽」から引用しておく。『琉球王国（第二尚氏王朝）が制定した琉球の信仰における聖域の総称』で、『宮古地方では「すく」と呼ばれた。『御嶽は琉球の神話の神が存在、あるいは来訪する場所であり、また祖先神を祀る場でもある。地域の祭祀においては中心となる施設であり、地域を守護する聖域として現在も多くの信仰を集めている。琉球の信仰では神に仕えるのは女性とされるため、王国時代は完全に男子禁制だった。現在でもその多くが一定区域までしか男性の進入を認めていない』。『御嶽の多くは森の空間や泉や川などで、島そのものであることもある。御嶽によっては空間の中心にイベあるいはイビ石という石碑があるが、これは本来は神が降臨する標識であり、厳密な意味でのご神体ではない（ご神体として扱われているところも多い）。宮古や八重山地方では、過去に実在したノロの墓を御嶽とし、そのノロを地域の守護神として祭っていることが多く見られる。大きな御嶽では、「神あしやぎ（神あしやげ、神あさぎ）」と呼ばれる前庭や建物といった空間が設けられていることがある。これは信仰上、御嶽の神を歓待して歌ったり踊ったりするための空間である。語源は「神あしあげ（神が足をあげる場＝腰を下ろす場）」と考えられている』。『鳥居が設置されている御嶽が散見されるが、これは明治維新から琉球処分以降の「皇民化政策」による神道施設化の結果であり、本来のものではない。沖縄本島では戦後、鳥居が撤去された御嶽も多いが、宮古や八重山地方の御嶽の多くには戦後もそのまま鳥居が残されている』。

高層建築のうた

蒼穹にまなこつかれて鋌打てる

一塊の光線ひかりとなりて働けり

鋌を打つ音日輪をくもらしぬ

鳴りひびく鐵骨の上を脚わたる

鐵骨の影の碁盤をトロ走る

鐵はこぶ人の體臭にほひのゆきかへる

瞳にいたき光りを踏みて働ける

歪みたる顔のかなしく鐵はこぶ

たくましき光にめいひ鐵はこぶ

鐵骨の影切る地に坐して食ふ

鋌打ちてつかれし腰の地に憩ふ

青空ゆ下り來し顔が梅干うめばかり

疲れたる瞳に青空の綾燃ゆる

「やぶちゃん注…以上、「くれなるの頬のつめたさぞ唇づくる」からの実に二十一句は総てが、昭和一〇（一九三五）年四月発行の『天の川』掲載句である。年譜によれば、『天の川』はこの四月から無季俳句の作品欄「心花集」を新設、その巻頭にこの「ルンペン晚餐圖」五句が発表されており、また、「高層建築のうた」十句も何と『天の川』巻頭に掲載されたものであった。まさに鳳作の特異点といってよい月であった。なお、前田霧人氏の「鳳作の季節」では、この連作「高層建築のうた」や後に掲げる連作「港の町 起重機」が実はこの昭和一〇（一九三五）年三月九日に母や秀子とともに鑑賞した一九三四年製作のジュリアン・デュヴィヴィエ監督作品「商船テナシチー」(Le Paquebot Tenacity)に触発されたものであるという事実を、映画の簡単なシノプシスも示されながら検証しておられる。」

「レコードのタペ」

樂澄めり椰子の瑞葉は影かざし

樂澄めりうつむける人蒼々と

デスマスク蒼くうかめり樂澄めば

樂きけり塑像の如き額しろく

「やぶちゃん注…五月発行の『天の川』掲載の四句連作。同月発行の『傘火』には後の二句は所収しない。全くの直感に過ぎないが、「デスマスク」を鳳作が思い浮かべているというのは、この聴いている「樂」がベートーヴェンのそれであったからではあるまいか？ なお、前田霧人氏の「鳳作の季節」によれば、これらの句は、この昭和一〇（一九三五）年『四月に銀漢亭を訪ねた折、禅寺洞、影草と行った福岡の名曲堂喫茶部で、レコードを聴きつつ句作したもの』とある。

「ここまでの十二句は五月発表句及び同月の創作句。」

港の町 起重機

起重機の巨軀青空を壓しめぐる

「やぶちゃん注：「齧」は底本の用字。「壓」は底本では「庄」。

起重機にももの食ませゐる人小さき

起重機の旋回我も蒼穹そらもなく

起重機を動かす顔のしかと剛き

「やぶちゃん注：ここまでの四句は五月発行の『天の川』に標記の「港の町 起重機」で連作として発表されたものである。なお、前の「疲れたる瞳に青空の綾燃ゆる」の注も参照されたい。」

起重機の豪音蒼穹そらをくづすべく

「やぶちゃん注：「豪音」はママ。この句のみ、鳳作没後の翌昭和十二年九月の『セルパン』の朝倉南海男（「なみお」と読むか）編「篠原鳳作俳句抄」に載るもの。底本では「港の町 起重機」連作の頭に配されているが、ここへ移した。但し、確かに同『天の川』連作冒頭の「起重機の巨軀青空を押しめぐる」の初稿か別稿のようには見えない。」

續無季高唱『パアラアの夜』

ゴムの葉のにぶきひかりは樂に垂り

樂きけり塑像の如き人等ゐて

樂きくと影繪の如き國にあり

「やぶちゃん注：五月発行の『傘火』の連作。「續無季高唱」とあるのは、先に注したように、この前月四月発行の『天の川』がこの月から無季俳句の作品欄「心花集」を新設、そ

の巻頭に、かの強烈な「ルンペン晩餐圖」五句が発表されたことを受けるものであろう『傘火』は前に記したように『天の川』同人によって刊行されている同人誌であるからここで鳳作が『續』と題しても何ら問題はないと私は思う。ただ、これらは、先に示した同月の『天の川』の連作「レコードの夕べ」と全くの同一シチュエーションの句であり、それらの句と比して特に深化（『續無季高唱』『アラアの夜』と大上段に別に標題するほどの「進化」という謂いである）が認められるかという点、はなはだ疑わしいと言わざるを得ない。こういうのを私は俳句に於ける——前書の悪魔——と勝手に呼んでいる。なお、前田霧人氏の「鳳作の季節」によれば、この昭和一〇（一九三五）年『四月に銀漢亭を訪ねた折、禅寺洞、影草と行った福岡の名曲堂喫茶部で、レコードを聴きつつ句作したもの』とある。ここまでの十二句は五月発表句及び同月の創作句。」

昇降機吸はれゆきたる坑にほふ^{あな}

昇降機吸はれし闇のむらさきに

地の底ゆせりくるロープはてしなく

昇降機うなじの線のみみあへる

昇降機脚にまつはる我が子呂と

「やぶちゃん注・「昇降機うなじの線のみみあへる」までは六月発行の『天の川』掲載句。最後の句は鳳作没後の翌昭和一二年九月の『セルパン』の朝倉南海男（「なみお」と読むか）編「篠原鳳作俳句抄」に載るものである。

この最後の句の「子呂」は「ころ」で、現在も広く作業現場で用いられている運搬用コロ車、ここは鉦夫が自分用の機材その他を運んだりするために用いたコロ車のことではないかと思われる（現在のそれは[グーグル画像検索「運搬用コロ車」](#)を参照）。「財団法人 東部石炭懇話会」のサイト内の「常磐炭田を研究の対象としている機関」の中の福島県いわき市内郷白水町広畑にある渡邊為雄氏の個人資料館「みろく沢炭鉦資料館」の紹介頁の「所蔵品目録」の「運搬関連」に『コロ（使い古しと新品）木製』『コロ（木製・鉄製・陶製）』とあって炭鉦で使用されていたことが分かる。

これらの句を読むと、西東三鬼の、かの官憲によってアカの思想的俳句とトンデモ解釈された、

昇降機しづかに雷の夜を昇る

が思い出される（昭和一五（一九四〇）年七月、京大俳句事件で検挙された三鬼に対して京都府警はこの句を『解釈』して、「雷の夜」とは不平不満を叫ぶ奴らの不安を煽る社会をさし、その中を昇降機が昇るといふのは共産主義思想が広がることを暗示していると言いつけられた（この話については、それを詳述した評論家による西東三鬼論を持っているはずなのだが、どうしても見当たらないので、「大阪日日新聞」公式サイト内の三善貞司氏の「[なにわ人物伝 一 光彩を放つ 一 日野 草城（下）](#)」の[一ひの そうぎ](#)」の記事を参考にさせて貰った）。

但し、鳳作の名誉のためにはつきりさせておくと、三鬼のあの句は二年後の昭和一一（一九四七）年七月発行の『京大俳句』に発表されたもので、寧ろ、三鬼の方が鳳作のこれらの連作をヒントとして逆回転の如何にも気障でスマートな映像をインスパイアしたと言える。また、三鬼のそれが徹底的に都会的人工的で、エレベーターの機械油の臭ささえ主人公のオー・ド・トワレの香に消されがちな感じの、あくまでお洒落なフランス映画風の（即ち作為的な）雰囲気を出していないのに対し（個人的には嫌いではないが）、鳳作のこれらの句は、強烈な炭塵と汗にまみれた鋭いリアリズムのモンタージュで、圧倒的な昇降機の重量と鉦夫の肉感が迫る優れた句群であると私は思う。」

海の旅 海を旅ゆくは夜々の我が夢なり

旅ゆくと白き塑像の荷をつくり

白たへの塑像いだき海の旅

鷗^は愛し海の碧さに身を細り

口笛を吹けども鷗集^よらざりき

「やぶちゃん注：「鷗」は正字としかかったが、PDFでは「鷗」と転倒してしまうので、仕方なくこの気持ちの悪い字体とした。」

碧空に鋭聲つづりてゆく鳥よ

「やぶちゃん注…「海の旅」連作。全句が載るのは六月発行の『傘火』、同月発行の『天の川』では冒頭の「旅ゆく和白き塑像の荷をつくり」を除く四句が掲載されてある。「塑像」不詳。これは具体的な実在するそれというよりも、内なる一つの精神的な何ものかのシンボルのように受け取れるように私には思われる。

以上、十句は昭和十年六月の発表句と創作句。」

マイ・キングダム
私の王国

樂たのし饜ゆるマンゴの香もありて

(注) マンゴーは熱帯特有の果物で香気が高く果物の王と稱せらる

樂たのし翅に眼のある蛾も来り

「やぶちゃん注…鱗翅(チョウ)目ヤママユガ科ヤママユガ亜科 *Saturnia* 属クスサン *Saturnia japonica* の類か(屋久島以北亜種クスサンは *Saturnia japonica japonica* 奄美以南亜種クスサンは *Saturnia japonica ryukyensis*)。クスサンは本土にも棲息し、マンゴーも少なくとも現在は鹿児島県で栽培されている(戦前に栽培されていたかどうかは未調査)から、必ずしもこの連句は単に宮古や沖縄の追懐詠とすることは出来ないように思われるが、マンゴー・目玉模様の白蛾・サボテン・ゴム(但し、「ゴムの葉に」の句は後に発掘されたものでこの連作にはない。当該句の注を参照のこと)と強く南国のイメージ、それも本句を見るに確かな囁目吟としか思えないことは事実である。但し、この前書 マイ・キングダム 「私の王国」は、そうした彼の南洋への熱い思いとは別の、この一月の妻との熱い蜜月の「王国」でもあるのかも知れない。年譜にはないが、妻秀子とのハネムーンは何処だったのだろうか? 次の「珊瑚島」句群は二人の幸せな一時の実景としかやはり思われないのであるが……。識者の御教授を乞うものである。」

樂きけり白蛾はほそき肢あしに堪へ

サボテンの掌の向き向きに樂たのし

「やぶちゃん注…ここまでが連作で七月発行の『天の川』の巻頭を飾った連作である。」

ゴムの葉ににぶき光は樂に垂り

「やぶちゃん注…これは「篠原鳳作句文集」とある。これは鳳作忌三十五年を記念して昭和四六（一九七一）年に形象社から刊行されたものである。確かにこの連作に配して自然ではある。」

珊瑚島

妹あがをれば來鳴きぬ鷗いもらも

鷗等いもはかむ代の鳥かかく白き

「やぶちゃん注…「鷗」は正字としたかったが、PDFでは「鷗」と転倒してしまうので、仕方なくこの気持ちの悪い字体とした。」

碧玉のそらうつつつばさかく白き

よるべなき聲は虚空に響かへり

「やぶちゃん注…「虚」は「鷗」としたかったが、PDFファイルではご覧の通り、転倒してしまうので新字体とした。」

吾わが妹子めしこのいのちにひびけさは鳴きぞ

「やぶちゃん注…この連作は七月発行の『傘火』に発表された。」

鳳作の句の中でも特異な歌垣である。間違いなく、妻秀子とのミラージュに見紛う不思議に美しい映像だ……二人きりの珊瑚礁……しかし……しかし同時に私には何か不吉な感じもしはしまいか？……これらの句はどこか……かの……遂に白鳥しろとりとなつて虚空へ消えていった悲劇の美青年ヤマトタケルを連想させる……そして……鳳作は……この翌年昭和一一（一九三六）年九月十七日早朝、天に召されてしまうのである……」

あぢさゐの花より懈たゆくみごもりぬ

身ごもりしうれひは唇をあをくせる

白粥の香もちかづけ身ごもりし

身ごもりしうれひの髪はほそく結ふ

薄暮の曲

あぢさゐの毬より侏儒よ驅けて出よ

「やぶちゃん注…この標題には底本では連作を示す「*」記号が頭に附されているが、次の句の前に掲示されている標題「芥子と空間」にも「*」記号が附されている。しかもこの句は八月発行の『天の川』掲載句であるこの前の四句の最後に配されている。ところが次の句は同月発行の『傘火』の句群である。従って、この標題が「薄暮の曲」という連作という意味が不明である。暫く三字下げでこの句の単独の前書とっておく。」

芥子と空間

日輪をこぼるる峰の芥子にあり

白芥子の妬心まひるの陽にこぼる

芥子咲けば碧き空さへ病みぬべし

ゆゑしらぬ病熱^{ネツ}は芥子よりくると思ふ

芥子燃えぬピアノの音のたぎつへに

「やぶちゃん注…この四句目の「ゆゑしらぬ病熱^{ネツ}」はとりあえず文学的な精神的なナーバスな熱と私はとってきたのだが、もしかするとこれは実際の原因不明の発熱を指しているのではなからうか？ 鳳作の直接の死因は心臓麻痺と記されてあるが、実際には年譜の亡くなる昭和一一（一九三六）年九月十七日の四ヶ月前の五月の項に、『この頃から時々首筋の痛みを訴え鹿児島県始良郡の妙見温泉で治療したが快方をせず発作的に嘔吐を催すようになった』とあり、私は鳳作は既にこの一年前（この句は昭和十年八月発行の『傘火』に発表されている）から、原因不明の発熱に襲われていたのではなかったらうか？ 私はこれらの症状から鳳作の死因は重篤な何らかの脳疾患（頭痛と嘔吐は脳腫瘍の主症状であるが、例えばウィキの「細菌性髄膜炎」によれば、発熱・嘔吐及び項部の硬直というのは細菌性髄膜炎の病態に特徴的なものであることが分かり、同髄膜炎は二〇〇八年現在でも世界的な死亡率は一〇〜三〇%と依然として高い疾患であるとある。但し、この疾患は急激に発症して意識障害に陥ることが多い点では鳳作のケースとはやや異なる感じはする）であった可能性を深く疑っているのである。なお、前田霧人氏の「鳳作の季節」には鳳作の病気について驚くべき意外な記載がある。以下、長くなるが、非常に重要な記載であるから引用させて戴く。冒頭の「五月」とあるのは、没年の昭和一一（一九三六）年のことである（一部の字下げを省略した）。

《引用開始》

五月、「傘火」に鳳作の連作「壁」五句が掲載される。第四句は朝倉南海男編「篠原鳳作俳句抄」（「セルパン」昭和十二年九月号）に掲載されたものからの引用である。それ以外は「天の川」七月号の「天の川俳句」に掲載されたものからの引用である。

壁

篠原鳳作

我が机ひかり憂ふる壁のもと

夜となれば神秘の眇灯^{すがめ}る壁

くしけづる君が歎きのこもる壁

古き代の呪文の釘のきしむ壁

幽き壁夜々のまぼろし刻むべく

これは「天の川」三月号の「自己加虐」に続く異色作であるが、それより更に異様な雰囲気を持つ。そして、各年譜の「昭和十一年五月」の項に、初めて次のような記述がある。

この頃から時々首筋の痛みを訴え鹿児島県始良郡あいらの妙見温泉で治療したが快方をせず発作的に嘔吐を催すようになった。（『全句文集』年譜）

温泉治療や嘔吐の症状などはもつと後のことであろうが、連作「壁」の第三句などを見ると、恐らくこの頃秀子夫人は既に鳳作の本当の病名を知っており、二人は嘆きの底にあったのではないかと思われる。鳳作の病気は公には神経痛ということになっている。しかし、幾ら彼が虚弱な体質でも、神経痛で命まで失うというのは、誰もが不思議に思うことである。

岸本マチ子『海の旅―篠原鳳作遠景』に、鳳作が友人である医者の診察を受ける場面がある。そして、そこにワツセルマン反応など、ある特定の病名を指す医学用語が出て来る。近年は抗生物質の出現により容易に治癒が可能となったが、当時は恐れられた病気である。著者に問い合わせると、秀子夫人から直接に聴取したことで事実であるという。そして、友人たちに誘われてたった一度、沖縄那覇ナージの辻遊郭で一夜を過ごしたことから感染した不幸な出来事であり、くれぐれも鳳作はそんな人ではないからと、彼女は強調する。しかし、彼を「そんな人」と思う人間は誰もいないのである。秀子夫人は『句文集』後記に、ただ次のように書くのみである。

病気の原因が脳腫であったかはよく分かりませんが、一時、頸筋の痛みを訴え苦しんだ時期に「オレはもう死ぬ、お前に静子（赤ん坊）はやるから好きなように生きてくれ」と叫んだ事があり、その時は何と薄情な事と情なく腹立たしく思いました。既に、死への予感がしていたのでしよう。

そうして、彼はこの後も体の不調を感じさせない、相変わらずの精力的な動きを見せる。彼の母親は後に、鳳作は「あんなに俳句を考えたので、神経がどうにかかなり、俳句のため死を早めた」と悔やむのであるが、正にそのような彼の生き様であった。

《引用終了》

以上の前田氏の叙述は、病名を記されていないものの、鳳作の病気が脳梅毒であったということを明確に示唆するものである。私はその真偽について判断をすることは出来ない。前田氏の素朴な疑問は肯んずることが出来る（故に私も脳腫瘍や髄膜炎などの脳疾患を疑っている）。それでも医学的な見地から見ると不審な点はある。上記の記載と鳳作の那覇での句から遡って類推しても、若しも感染源がそこ記されてある通りでなるとするならば、感染は大学卒業直後の昭和四（一九二九）年頃と考えられる（当時鳳作は満二十三歳）が、亡くなるのは昭和一一（一九三六）年でその間七年しか経っていない。一般には成人が当

時でも比較的稀な脳梅毒にまで進行するには感染後十年以上が罹る。しかも、鳳作の父政治は医師であった（但し、鳳作東大在学中に中風のために廃業して永く療養の身ではあった）。ともかくも私は、今現在、この記載には従えないのである。ただ一つだけ、その従えない外的な根拠としてどうしても述べておきたいのは、前田氏が鳳作の梅毒罹患の決定的な根拠とされている「海の旅―篠原鳳作遠景」という作品の作者である岸本マチ子なる人物を、私は残念ながら――鳳作とは無関係な別な理由で――全く信用出来ないという事実があるからである。ここでおよそそれについて語る気は毛頭ない。それでも私の嫌悪に等しい拒絶感に興味のあられる向きには、[「石川為丸のホームページ クイクイ通信」](#)にある「岸本マチ子の盗作について」の各種文書をお読みになることをお勧めする。何となく書振りからもお分かり戴けると思うが、前田氏本人も、どうもこの岸本なる人物に私同様、ある種の胡散臭さを感じておられるように思われる。」

寂光土

わたの日を率てめぐりゐる花一つ

わたの日を率てめぐりゐる花一つ

向日葵の黄に堪へがたく鶏つるむ

「やぶちゃん注：「鶏」は底本では「𪗇」であるが、PDFでは「𪗇」と転倒してしま
うので、この字体とした。」

向日葵の黄に堪えがたく鶏つるむ

「やぶちゃん注：「鶏」はママ（底本は新字）。」

草灼くるにほひみだして𪗇つるむ

「やぶちゃん注：「鶏」は底本では「𪗇」であるが、PDFでは「𪗇」と転倒してしま
うので、この字体とした。」

草灼くる匂みだして鶏つるむ

「やぶちゃん注：「鶏」はママ（底本は新字）。」

いちぢくの實にぞのぞかれ齧つるむ

「やぶちゃん注：「鶏」は底本では「齧」であるが、PDFでは「齧」と転倒してしまうので、この字体とした。」

いちぢくの實にぞのぞかれ鶏つるむ

「やぶちゃん注：「鶏」はママ（底本は新字）。」

和田津海の邊に向日葵の黄を沸かし

わだつみの邊に向日葵の黄ぞ沸かし

「やぶちゃん注：以上十句は九月の発表句で、それぞれ、前者が同月発行の『天の川』、後者が同月発行の『傘火』の、「寂光土」連作である。なお、底本の鳳作年譜の昭和十年の八月の項に、『京阪神に遊び、神戸の榎島沙丘宅に一泊、「旗艦」同人らの歓迎句会が開かれ喜多青子らと快談、「鶏つるむ」の連作五句を出句した』とある。」

燈臺守よ

大空の一角にして白き部屋よ

浪音にあらがふいのち鬚髯白く

浪音にあらがふいのち鬚髯^{ひげ}白く

「やぶちゃん注…前者が十月発行の『天の川』と『傘火』発表の、後者が同月発行の『俳句研究』発表の句形。最初の「大空の」一句を除く（これは『傘火』と『俳句研究』に載るが『天の川』には不載）この連作をこれら三誌に発表するというのは特異点で、鳳作にしてみれば相応の自信作であったものと思われる。」

この椅子にぬくみ與へて老いにける

書ふかき星も見ゆべし侘ぶるとき

書ふかき星もみゆべし侘ぶるとき

「やぶちゃん注…前者が十月発行の『天の川』と『俳句研究』発表の、後者が同月発行の『傘火』発表の句形。」

浪音にまろねの魂を洗はるる

「やぶちゃん注…ここまでが「燈臺守よ」連作。」

海鳥生る

海神のいつくしき邊に巢ごもりぬ

海神のイッ厳しき邊イッに巢ごもれる

「やぶちゃん注…前者が十月発行の『傘火』発表の、後者が同月発行の『俳句研究』発表の句形。」

雛生れぬ眞日のにほひのかなしきに

雛生^アれぬ眞白のほひのかなしきに

「やぶちちゃん注…前者が十月発行の『傘火』発表の、後者が同月発行の『俳句研究』発表の句であるが、この前句の「眞日」は単純に「眞白」の『傘火』の誤植ではあるまいか？ 暫く並置する。」

海光のつよきに觸れて雛鳴けり

雛の眼に夜は潮騒のひびきけむ

雛の眼に夜はしほざゐの響きけむ

「やぶちちゃん注…前者が十月発行の『傘火』発表の、後者が同月発行の『俳句研究』発表の句形。」

雛の眼に海の碧さの映りゐる

「やぶちちゃん注…この句は『傘火』のみに載る。ここまでが「海鳥生る」の連作。」

月光

月光のすだくにまろき女^{ヒメ}のはだ

セロ弾けば月の光のうづたかし

月光のうづくに堪へず魚はねぬ

時空

月光のこの一點に小さき存在われ

ひとひらの月光つきより小さき我と思ふ

「やぶちゃん注：以上、二つの「月光」及び「時空」連作はキャプションに『現代俳句 3』とある（恐らくは鳳作没後の昭和一五（一九四〇）年に河出書房から刊行された「現代俳句」第三巻）。前田霧人氏の「鳳作の季節」によれば、この「時空」は、『デカルト、パスカルなど初歩の哲学が加味され』たもので、『この「時空」は鳳作の生活俳句の対象が妻や灯台守から、遂に自分自身に到達した記念すべき作品であり、まだ甘くはあるが、その後の「自嘲」、「ラッシュアワー」などの先駆をなすものである』とまさに鳳作の特異点の句として高く評価されておられ、共感出来る。「存在われ」の用字はまさにこの一句でのみ光る。ここまでの二十句は昭和一〇（一九三五）年十月発表及び創作（と判断されたものと思われる）句である。】

一掬のこの月光の石となれ

眠れば我が黒髪も月光つきとなる

「考ふる葦」のうつしみ月光にあり

（注） 「人間ハ考ヘル葦デアル」パスカル

天に噴くもの

噴煙の吹きもたふれず鷹澄める

噴煙のいざよふ如き日のあはれ

噴煙を知らねば海豚群れ遊ぶ

噴煙の夜はあかければ鳴く千鳥

行く秋の噴煙そらにほしいまま

「やぶちゃん注…この句、一読、杉田久女の昭和六（一九三二）年の名句、

銜して山ほととぎすほしいまゝ

を想起するが、久女のような深いパースペクティブがなく、ワイドな画面乍ら、絵葉書のような平板さを免れていない。

「ここまでの八句、十一月に発表句及び創作句と考えられるもの。」

自嘲

よきひげもチョークまみれのピエロ我

晴れし日も四角な部屋にピエロ我

口笛を吹くも叱りてピエロ我

口笛を吹くもしかりてピエロ我

「やぶちゃん注…前者は十二月発行の『天の川』の、後者は同月発行の『傘火』の句形。」

いかりては舌のかはきつピエロ我

採点簿いつも放たずピエロ我

「やぶちゃん注…『傘火』『天の川』に載る連作「自嘲」であるが、最初の「よきひげも」の句は『傘火』のみに所載する。ここまでの六句は十二月の発表句。…：鳳作の「ピエロ我」句群はかつて教師をしていた私には、殊の外痛感出来るものである。教師という存在は所詮——生徒という観客に見られる動物園の檻の中の獣に過ぎず、教壇という安舞台上のチョークまみれのしがたないピエロでしかない——いや、それでこそ教師ではないか？——などと昔から私はそう思い続けていたのである……」

昭和一一（一九三六）年

口笛を吹かず

月光の衣どほりゆけば胎動を

泣きぼくろしるけく妻よみごもりぬ

みごもりし瞳のぬくみ我をはなたず

みごもりし瞳のぬくみ我をはなたづ

「やぶちゃん注…前者は一月発行の『天の川』の、後者は同月発行の『傘火』の句形。一読、前者は「ひとみのぬくみ」と読んでしまうが、「め」で恐るべき破調であることが分かる。」

爪紅のうすれゆきつつみごもりぬ

爪紅のうすれそめつつみごもりぬ

「やぶちゃん注…前者は一月発行の『天の川』の、後者は同月発行の『傘火』の句形。私
は後者のスラーの韻律を好む。以上、連作「口笛吹かず」であるが、冒頭の「月光の」の

句は『天の川』のみに所載する句である。」

おさなけく母となりゆく瞳メのくもり

「やぶちゃん注…同月発行の『傘火』にのみ載る。連作「口笛吹かず」の一つか。『傘火』にのみ載る。」

行幸

生れくる子にも拜しむねぎまつる

「やぶちゃん注…ネット検索の結果、「鹿児島大学理学部同窓会のホームページ」内にある「[西川孝雄さんのアルバム集](#) [昭和天皇行幸の写真集](#)」によって昭和天皇が昭和一〇（一九三五）年十一月十七日に第七高等学校造士館（現在の鹿児島大学）を訪問していることが分かった。

以上、八句は鳳作没年である昭和一一（一九三六）年一月の発表句である。」

老父昇天 父八十二歳にて長逝す

一握り雪をとりこよ食タぶと云ふ

稚ワカき日の雪の降れば雪を食べ

神去りしまなぶたいまだやはらかに

雪天そらにくろき柩とその子われ

黒髪も雪になびけてわれ泣かず

黒髪も雪になびけて吾泣かず

「やぶちゃん注…前者は四月発行の『天の川』の、後者は同四月発行の『傘火』の句形。」

吹雪く夜をこれよりひとり聴きまさむ

「やぶちゃん注…これらの連作は四月発行の『天の川』（最後の「吹雪く夜を」は載らず、全五句）及び『傘火』（最初の二句は載らず、全部で四句）のものであるが、ここに配すこととする。鳳作の父政治（医師で熱心なキリスト教徒でもあった。但し、鳳作東大在学中に中風のために廃業して永く療養の身であった）は、この昭和十一（一九三六）年一月に八十三歳で亡くなっているからである。」

喜多青子を憶ふ

三角のグラスに青子海を想ふ

咳き入ると見えしが青子詩を得たり

耳たぶの血色ぞすきて瞑想す

咳き入りて咳き入りて瞳メのうつくしき

その手

氷雨よりさみしき音の血がかよふ

青子長逝

半生をささへきし手の爪冷えぬ

詩に痩せて量かさもなかりし白かさき骸から

「やぶちゃん注：「瘦」は「瀟」としたかったが、PDFでは何故かここだけでご覧の通り、転倒してしまっているので、新字体とした。

私の偏愛する鳳作の喜多青子追悼の哀傷の絶唱句群である。八句総てが載るのは二月発行の『傘火』で、同月の『天の川』には最初の二句と「氷雨より」「半生を」「詩に痩せて」の計五句を載せる。

「喜多青子」(きたせいし 明治四二(一九〇九)年〜昭和一〇(一九三五)年十月)は本名喜多喜一。神戸生。新興俳句の鳳作の盟友であった。私が偏愛する俳人であるが、彼について記載するものは少なく、知る限りでは「[俳句空間—豈 weekly](#)」の富田拓也氏の書かれた「[俳句九十九折\(34\)](#)」[俳人ファイル](#) [XXVI](#) [喜多青子](#)」が纏まった唯一のものである。されば同記載等を参考にして以下に事蹟を示す。

大正一四、一五(一九二九／一九三〇)年頃より句作を初め、昭和三(一九二八)年頃から本格的に俳句に取り組むようになる。昭和八(一九三三)年刊の『ひよどり』など、さまざまな俳誌を創刊、昭和一〇(一九三五)年には自身の俳誌『ひよどり』が同誌に合併する形で日野草城の『旗艦』創刊に参加したが、同年十一月に満二十六歳で結核により夭折した。昭和一一(一九三六)年に遺稿句集「噴水」が出版されている(序文・日野草城、収録作は昭和七(一九三二)年頃から没する昭和一〇(一九三五)年までの二百二十五句。永年私は古本で探し続けたが見つからなかった。富田氏によれば平成元(一九八九)年に同句集が復刻されているらしいが、如何にも悔しいことに私は所持していない)。

富田氏の記事(Q&A形式)には、『もし生きながらえていれば、それこそ高屋窓秋、篠原鳳作、富澤赤黄男、渡辺白泉、西東三鬼に次ぐような作者になっていた可能性もあったのではないかと思わせるところが確かにあ』ると述べておられ(私も激しく同感する)、『篠原鳳作とは、青子は一度神戸で会っていて、その後は葉書で互いの作品を批評し合う仲間であった』というところがある。この後半部分は本底本の鳳作年譜の昭和十年の八月の項に、『京阪神に遊び、神戸の榎島沙丘宅に一泊、「旗艦」同人らの歓迎句会が開かれ喜多青子らと快談、「鶏つるむ」の連作五句を出句した』とあるのを指すものと思われる。

以下、富田氏の選句されたものから青子の句を幾つか引いておく(恣意的に正字化した)。

さんらんと陽は秋風を磨くかな

昭和七(一九三二)年の作。他に同時期の作として掲げられている句に、

吹かれ来て草に沈みぬ秋の蝶

春愁のふと聴き入りし歌時計

タイプ打つ七階の窓秋日和

ジャズいよはなやかにして年は行く

がある。次に昭和八年の句として、

噴水の夜目にもしるき穂となんぬ

噴水の水な底にある魚の國

灰皿に噛み捨つるガム夏を病む

「やぶちゃん注…「噛」は「齧」としたかったが、PDFファイルでは「覽の通り、転倒してしまふので新字体とした。」

汽車の噴く入庫のけむり鶏頭に

長き夜のシネマの闇に君とゐる

ラグビーの脚が大きく駆けりくる

などが引かれ、昭和九年になると、

鞆のつかれ來し眼に虚空あり

「やぶちゃん注…「虚」は「罽」としたかったが、PDFファイルでは「覽の通り、転倒してしまふので新字体とした。」

きざはしのしづかなるときかぎろへる

星涼し鐵骨くらく夜を聳ちぬ

地下歩廊出でて夏樹のみどり濃き

秋寒し隧道とはの闇を垂れ

『などといったやや重い印象の作品がいくつか見られるようになって』（富田氏）くるとある。既に結核の症状が出ていたであろうことと、軍靴の音の忍び寄りをも伝える感じがする。

秋炎の空が蒼くて塔ありぬ

は私の偏愛する句である。以下、昭和十年の句。

枯芝とナチスの旗といまは暮れ

群衆のなだれに在りて憂き春ぞ

暝ればこがらし窓に鋭かり

おぼろ夜の街へ空気のごとく出る

春愁のわれ海底の魚とねむる

同十年の「夢の彩色」連作名吟、

夢の彩色

夢青し蝶肋間にひそみゐき

夢青し肋骨に蝶ひらひらす

脳髓に驟雨ひゞける銀の夢

叡智の書漂泊の夢にくづれくる

天才の漂泊の夢書を焚けり

書肆に繰る文藝の書の白き夏

最後に晩年の一句と私の偏愛する二句を示す。

蝶のごとく瞼の奥を墜つる葉よ

陰多き螺旋階段春深し

砂日傘夜は夜でギターなど弾ける

因みに私は彼の先に掲げた慄つとするほどに素敵な幻想吟である、「夢青し蝶肋間にひそみろき」を確信犯でインスパイアした、

夢白し蝶肋間に蛹化せり 藪野唯至

をかつて創っている（雄山閣出版一九九七年刊「俳句世界 6 パロディーの世紀」で齋藤慎爾選から特選を頂戴している。拙句集「鬼火」を参照されたい）。

なお、鳳作の最初の句にある「三角のグラス」は三角フラスコで、結核性胸膜炎で出潤する胸水を探るためのものと思われる（前田霧人氏の「鳳作の季節」では青子の死因を肋膜炎としておられ、また、『かつて「夢青し」と詠んだ青子は神戸に生まれ育ち、今は明石海峡大橋が架かる美しい舞子の海を見ながら逝った。鳳作の句には、青子と青い海の記憶を共有する彼の気持ちが良い表現されている』と述べておられ、彼が亡くなったのが兵庫県神戸市垂水区の舞子であったことが分かった。』

映画『家なき児』

青麥の穂はかぎろへど母いづこ

陽炎にははのまなざしあるごとし

碧空冬木しはぶくこともせず

飢えし瞳に雪の白さがふりやまぬ

母求めぬ雪のひかりにめしひつつ

「やぶちゃん注：以上五句、二月発行の『傘火』の「映画『家なき児』連作（と思われる）。

フランスの作家エクトール・アンリ・マロー (Hector Henri Malot 一八三〇年～一九〇七年) が一八七八年に発表した児童文学「家なき子」(フランス語原題「Sans famille」)は複数の映画化作品があるが、時代的に考えて一九三四年フランス製作で昭和一〇(一九三五)年に本邦でラテン映画社から配給上映された四作目の映画化作品と思われる。脚色に劇作家アンドレ・ムエジー・エオン (André Mouëzy-Éon) が当たり、監督は「はだかの女王」「ファニー」のマルク・アレグレ (Marc Allégret)、主役をルナール原作の名作「にんじん」(名匠ジュリアン・デュヴィヴィエ (Julien Duvivier) 監督の一九三二年作品) で美事な「にんじん」役を演じた名子役ロベール・リナン (Robert Lynen) 少年が演じ、他に「狼の奇蹟」に出たフランスの著名なバス歌手ヴァンニ・マルクー (Vanni Marcoux)、「ドン・キホーテ」(一九三三年)のドルヴィル (Dorville) が共演した他、「母の手」の子役ポーレット・エランベール (Paulette Flambert) や、ジョアンナ・ペランジェール (Jeanne Béangère)、「エーメ・クラリオン」(Aimé Clariond)、「シヨルジュ・ヴィトラフ」(Georges Vitray) らが出演した。撮影はジャン・バシユレ (Jean Bachelet) 及びクロード・ルノアール (Claude Renoir) の共同担当で (ルノアールの撮影共同担当は以下の「映画.com」のデータによるもの)、音楽はモーリス・イヴェン (Maurice Yvain) であった。以上は「映画.com」内の [こちらのデータ](#) や [フランス語版ウィキの Sans famille \(film, 1934\)](#) などを参考にした。)]

罪業を血のうつくしさ炭火に垂らす (自己加虐)

ふつふつと血を吸ふ炭火さはやかに

自画像の青きいびつの夜ぞ更けぬ

「やぶちゃん注：以上の三句はキャプションに『現代俳句集』とある。恐らく、底本年譜に載る昭和三二(一九五七)年筑摩書房刊の「現代日本文学全集」第九十一巻「現代俳句集」の横山白虹編になるものを指すかと思われる。

以上、十五句は二月の発表句及び創作句として配されてある。」

ラッシユアワー

夕刊の鈴より都霧のわくきりとき

「やぶちゃん注：「都霧」の二字に「きり」のルビを振った、所謂、一時期流行ったマルチ・

カメラのような多重性を持たせたルビ俳句である。」

吊革にさがれば父のなきのれ

ほしいままおのれをなげく時もなく

「疲れたり故に我在り」と思ふ瞬間^{とき}

我も亦ラツシユアワーのうたかたか

「やぶちゃん注・以上、「ラツシユアワー」連作五句は四月発行の『傘火』に載るもの（四月の発表句は、先に掲げた『天の川』に載った連作「老父昇天 父八十二歳にて長逝す」の五句とこれらを合わせ、計十句である）。前田霧人氏の「鳳作の季節」によれば、渡辺白泉は「獵人手帖」（『句と評論』昭和一一（一九三六）年五月号）で、『鳳作の芸が真摯にもここまでやって来たことを私は祝いたい。』と称賛する。その一方で、「全体に見られる微弱なる構成意識を嫌うと共に、345をまで言いたかった作者の甘さが食い足りない」と、的確かつ厳しい評価を付加する」（345）とは三句目・四句目・五句目の謂いであろう）とある。白泉の評及び霧人氏の言葉、孰れにも私も同感である。

なお、この後、五月と六月のパートは底本句集には存在しない。底本年譜には、『五月この頃から時々首筋の痛みを訴え鹿児島始良郡の妙見温泉で治療したが快方をせず発作的に嘔吐を催すようになった』とあり、六月の事蹟を載せず、次が七月の欄となって『天の川三元集に「赤ん坊」「やぶちゃん注：後掲する連作句。』の作品載る』とある。「妙見温泉」は鹿児島県霧島市隼人町及び牧園町（旧大隅国）にあり、新川渓谷温泉郷の中では最も大きな温泉。泉質はナトリウム・カルシウム・マグネシウム―炭酸水素塩温泉（低張性中性高温泉）である。適応症・禁忌症一覧は「妙見温泉振興会」による妙見温泉公式サイトの^{こちら}を参照されたい（但し、特に適応症・禁忌症に特異点のある温泉ではない。）。」

壁

我が机ひかり憂ふる壁のもと

夜となれば神祕の眇灯る壁

すがめ

くしけづる君がなげきのこもる壁

幽き壁夜々のまぼろし刻むべく

古き代の呪文の釘のきしむ壁

「やぶちゃん注・最後の一句を除いた三句が七月発行の『天の川』に載った「壁」連作。最後の「古き代の」は鳳作没後の翌昭和十二年九月発行の『セルパン』に朝倉南男編「篠原鳳作俳句抄」として載ったものの一句であるが、確かに連作「壁」の一句と見られる。実は最後の「古き代の」句は底本では「くしけづる」の句の後に挿入されている。これは「くしけづる」の句の別稿と編者が採ったためかとも推測されるが、その配置は私はとるべきではないと考える。何故なら、それによって「幽き壁」（老婆心乍ら「幽き」は「くらき」と読む）の句が「壁」の連作でないように読めてしまうからである（それとも事実、これは「壁」の連作ではないのだろうか？）。

鳳作の作品の中でも超弩級に難解な（と私は感ずる）句群である。前田氏は前に引用したように、ここには鳳作が罹患した致命的な病魔に関わる（それを前田氏は明言を避けながらも脳梅毒ととっておられるように読める）『異様な雰囲気』を読み取っておられる（前田霧人氏の「鳳作の季節」二九三頁）。私はその解釈に対しては今のところ否定も肯定も出来ない。ただ、確かにこれらの——「壁」——「憂ふる壁」「神祕の眇」——そして「くしけづる君」その「君のなげき」それが「こもる壁」——「古き代の」「ドルイド僧の低く呟くような「呪文」の響き——その「呪文の釘」のアップ——その呪いの釘が打ち込まれた「壁」が生き物のように「きし」んで音をたてる——といったシチュエーションすべてが、ある種の非常に不吉な『異様な雰囲気』を醸し出していて、目を離すことが出来ないものである、ということとは間違いない私にとっての事実ではある——」

赤ん坊 I

にぎりしめにぎりしめし掌に何もなき

睡りゐるその掌テのちささ吾がめづる

赤ん坊を泣かしておくべく青きたたみ

泣きじやくる赤ん坊あざみ薊の花になれ

赤ん坊の蹠アウラまつかに泣きじやくる

赤ん坊 II

太陽に襁褓かかげて我が家とす (移轉)

「やぶちゃん注…病中にあつてしかし我が子の「生」に健康な精神を取り戻し得た鳳作の、「赤ん坊」句群中の白眉である。
因みに、私はかつてこの句をインスパイアして、

太陽に襁褓フ翻マ建國記

とやらかした(雄山閣出版一九九七年刊「俳句世界 6 パロディーの世紀」に於いて齋藤慎爾選で佳作を頂戴した。私の句集「鬼火」もよろしければ御笑覧あれ。)

赤ん坊を移しては掃く風の二夕間フ

指しやぶる音すきずきと白き蚊帳

目覺スさめては涼風をける足まろし

太陽と赤ん坊のものひらりひらり

「やぶちゃん注」底本では「赤ん坊 II」はただ「II」であるが、補った。

ここまでの「赤ん坊」連作 I・II 合わせて十句は七月発行の『天の川』の句で、先の「壁」連作五句を合わせ、全十五句が七月の発表句及びその別稿と思われるものである。」

赤ん坊 III

赤ん坊にゴム靴にほふ父帰宅

かはほりは月夜の襤褸嗅ぎました

みどり子のにほひ月よりふと白し

「やぶちゃん注」底本では「赤ん坊 III」はただ「III」であるが、発表誌の号が異なるため（この「III」は八月発行の『天の川』で、前書がただ「III」だったとはどうしても思われないという理由もある）、「赤ん坊」を補った。前田霧人氏の「鳳作の季節」によれば、『七月、「天の川」の「三元集」第一回作品に、鳳作の連作「赤ん坊」のI、II、III、計十三句が一挙掲載される。末尾には「六月十四日」と、丁度宇月が鳳作の自宅を訪ねた時の日付が記されている』とある。底本年譜にも『七月 天の川三元集に「赤ん坊」の作品載る』とあるのであるが、だとすると、この「III」パートの初出表示は八月発行の『天の川』とすべきではなく、七月発行の『天の川』の中の第一回作品集「三元集」とすべきであると思う。少なくとも「I」「II」が七月で「III」が八月というような見かけ上の分断がそれと避けられたはずであると思うからである。従って、この三句のみが八月の雑誌発表句であるように見えるが、事実はそうではなく、現在、同年八月の新規の発表句は存在しないということになる。

なお、前田霧人氏の「鳳作の季節」によれば、この「赤ん坊」連作に対しては、前『年十二月に辛口の「篠原鳳作論」を書き、その後も厳しい批評を続けた白泉がこの連作を激賞している』として以下に渡辺白泉の二本の評を引用されている。孫引きさせて戴く。

《引用開始》

僕は鳳作のこのふかい滋味を羨望してやまない。僕が鳳作論を書いてからまだ一年には大分間があるのに、鳳作の体貌は一変してしまった。ここには大人になり切った鳳作の、さらりとした素顔がある。しかもその素顔のうらにかくされた美への憧憬、詩へのひたむきな態度は、「高翔する詩魂」時代よりは一層熱切であり、一層聡明であり、きれいにアクを落していることを感じて、僕はもはや羨望にいたたまれないのである。（「獵人手帖」「句

と評論」昭和十一年八月号)

赤ん坊のきわまりなく純白な心と、ぐんぐんと展開してゆく強い生命とを見つめた鳳作の心からは、すべての陋いせま囚われた雑念が飛散してしまったのに違いない。「甘さ」とか「達者さ」とかいうものは何処の空中へ消えて行ってしまったのであろうか。これら各句の表現を見よ。赤ん坊の手足のごとく、彼等は自由に伸び伸びと生きて動いている。天衣無縫とはまさしく之である。注意すべきは、この明るさは鳳作が「海の旅」時代、いやそれよりももっと前、彼がこの世に生を享けた時から本源的に有していた南国人の明るさであり、それがこの「赤ん坊」にぶちあたって一気に内外の塵あくたを押し流して流露したものだということである。(二十一年の鳳作)「帆」昭和十二年一月号)

《引用終了》

さらに前田氏は妻秀子さんの記した印象的な思い出をも引用されている。私はこの引用元である「篠原鳳作句文集」(前原東作監修昭和四六(一九七二)年九月形象社刊)を所持していないので、これも孫引きさせて戴く。

《引用開始》

赤ん坊が生れた時、勤めの帰りにちよこちよこ里に立ち寄って、未だ日も経たない赤ん坊をそおと膝の上のせては物珍しそうに見つめ、時に夢うつつに目を閉じて口許だけを動かして笑うような表情をしますと「笑れやった。笑れやった(お笑いになった)」と敬語を使い、まだ自分の子としての実感がわかなかった様です。その赤ん坊への愛撫振りはよく句に出てますが、柔らかい小さな手に触れながら生命の誕生の神秘さに打たれておりました。

《引用終了》

なお、前田氏はこの後で、鳳作が前年の昭和一〇(一九三五)年十月に入会した『山茶花』の五・六月『山茶花』合評会の席上、自作「赤ん坊を泣かしをくべく青きたたみ」と「にぎりしめにぎりしめし掌に何もなき」の二句を例に挙げて(ということは実は少なくともこの二句が含まれる「赤ん坊 I」は七月ではなく、五月か六月の『山茶花』には既に発表されていたことが分かり、そうすると実は「赤ん坊」句群は「壁」よりも前の作品である可能性も否定出来なくなる)、

《引用開始》

前者は感覚的であり、後者は感覚的ではないが具象的であると思う。感覚化は具象化の一面であるが具象化には感覚化以外の面がある。

近代芸術すべての特長が感覚の新しいと云う所にあるのではないですか。(「山茶花座談会」「山茶花」昭和十一年七月号)

《引用終了》

と述べており、前田氏は『ここには、感覚を大事にして、しかもそれに溺れない今の鳳作の純真な姿がある』と評されておられる(この座談会の内容は前田氏のそれでないと容易

には読むことが出来ないものである。以下、更にこの「感覚」と「新しさ」の問題について語られてあるのだが、少々孫引きが多くなつて申し訳ないこともあり、それらはまた前田霧人氏の「鳳作の季節」の当該箇所（三〇三頁以下）をお読み戴きたい。」

赤ん坊

指しやぶる瞳のしづけさに蚊帳垂るる

吾子たのし涼風をけり母をけり

涼風のまろぶによろしつぶら吾が子

涙せで泣きじやくる子は誰の性さが

「やぶちゃん注…ここまでの四句が九月発行の『傘火』に所載する連作「赤ん坊」であると思われる。筑摩書房「現代日本文学全集 卷九十一 現代俳句集（昭和四二―一九六七）年刊」の「[篠原鳳作集](#)」では（リンク先は私の電子テキスト）、この連作を「赤ん坊 IV」としているが、これは同編者による勝手な操作であることが分かる。」

蟻よバラを登りつめても陽が遠い

「やぶちゃん注…ここまでの「赤ん坊」四句を含む五句は九月発行の『傘火』に掲載された。

鳳作は鹿児島市加治町の自宅でこの昭和一一（一九三六）年九月十七日の午前六時五十分、『心臓麻痺で逝去』（参照した底本年譜の記載）した。」

病中

天地にす枯れ葵と我瘦せぬ

夏痩せの胸のほくろとまろねする

「やぶちゃん注…以上二句は鳳作没後の昭和一五（一九四〇）年に河出書房から刊行された「現代俳句」第三巻（と思われるもの）から、底本「篠原鳳作全句文集」俳句本編掉尾に配されてある。この最後の「夏痩せの」の句は、しばしば鳳作の辞世の句であるかのようには紹介されるようだが、私は実はあまりそう感じていない。寧ろ、辞世とするなら、先の、

蟻よバラを登りつめても陽が遠い

を採りたく思う。」

篠原鳳作初期作品

（昭和五（一九三〇）年～昭和六（一九三一）年）

ハタハタの影して黍にとまりけり

「やぶちゃん注…「ハタハタ」バツタ。既注。」

屋根替や加勢に見えし舟子共

千鳥釣る糸を伏せゆく渚かな

「やぶちゃん注…「千鳥釣る」以外であろうが、鳥のチドリ目チドリ亜目チドリ科 Charadriidae の千鳥の類は古くから肉が食用とされてきた。」

炎天は川涸れはてし蘇鐵木

墓參や昔ながらの小せせらぎ

せせらぎを飛びつ渉りつ墓參かな

霧くればとぎす扉やキャンプ村

故里はせせらぎ多き墓參かな

屋根替の加勢の中の器量よし

頭の上にいただく籠のバナナ哉

縁側に西瓜おろして買へと云ふ

「やぶちゃん注…「縁」は「鬚」としたかったが、PDFではご覧の通り、転倒してしまうので新字体とした。」

日傘さしてはだしの島女

「やぶちゃん注…これは新傾向か自由律か。「日傘さしてはだしの島の女」として尾崎放哉の句の中に忍ばせたら、誰もが放哉の新発見句だと思ふこと、これ、間違いない。」

熔岩^{ラバ}の月やうやく高きキャンプ哉

熔岩に陽をしづめたるキャンプ哉

「やぶちゃん注…この「熔岩」は前句のように「ラバ」ではなく、「ようがん」と普通に読んでいる。」

小春日の玉を解きたる芭蕉哉

「やぶちゃん注…单子葉植物綱シヨウガ亜綱シヨウガ目バシヨウ科バシヨウ *Musa basjoo* の花序は夏から秋にかけて出来る。」

山川に飯盒浸けあるキャンプ哉

天の川の下に張りたるキャンプ哉

「やぶちゃん注…本初期作品の上限は昭和五（一九三〇）年で、当時、鳳作は二十四歳であった。既注済みであるが、鳳作はこの前年の四月に帝大を卒業して鹿児島に戻っているが、この時期は職に就いておらず（これは当時発生していた極端な就職難という外因によるものと思われる）、年譜上からは俳句へと急速に傾倒していった時代と読み取れる。

以下は私の極めて個人的な記載である。

私は高校二年の夏、友人とともに大学生と偽って土方のアルバイトを数週間やり、その稼いだ金で二人してテントを買い、能登半島を一周した。その時、最初に泊まったのが七月下旬の能登金剛の浜だったが、そこで私は満天を埋める星空、そして天の川の下の一星が降る——という実感を生涯で初めて体験した。……私はこの句を詠みながら、そんな四十年以上前の十六の遠い昔を思い出していた。……」

滝壺にかよふ徑あるキャンプ哉

向日葵の花の首振るはやて哉

山川の瀬に手を洗ふ墓參かな

ガチャガチャの今宵も同じ藪穂哉

雲の峰^{ウミ}洋一ぱいに映りけり

屋根替の人あらはれし藪穂かな

屋根替や加勢に見えし蚤の衆

掃苔の徑つくろひもしたりけり

ひとりなる主もなき墓も拂ひにけり

秋風や鍾乳洞の晝ともし

鍾乳石垂れ下りゐる清水かな

芭蕉林笥あらはに枯れにけり

いつしかに芭蕉も昏れし端居哉

芭蕉葉につきあたりたる夜道かな

二階にはをられずなりし颱風哉

我よりも低くなりたる枯芭蕉

霜圍ひされし芭蕉と日向ぼこ

暮雨の中走り歩ける百姓哉

ハタハタの一足毎にとびにけり

みごとなる虹の暈あり今日の月

夜々の月篋の音のさえまさり

よごれたる灯明皿や滝の神

蠟涙によごれをはしぬ滝の神

「やぶちゃん注…「蠟」は底本では「蠹」であるが、PDFではご覧の通り、転倒してしま
うので新字体とした。

「蠟涙」は「らふるい（ろうるい）」と読み、灯した蠟燭から溶けて流れた蠟を涙にたと
えていう語。」

月のはや波もたてずに獨木舟

佇ちつくし月夜の虹を仰ぎけり

海坂や映りそろひし雲の峰

「やぶちゃん注…老婆心乍ら「海坂」は「うなさか」で「海境」「海界」とも書き、海の水
平線を指す。古く、舟が水平線の彼方に見えなくなってしまうのは、海に他界へと通ずる
境界、黄泉の国との境に当たるとする黄泉比良坂と同じようなものがあると考えたからとされ、
神話に於ける異界としての海神の国と人の世界との境を意味した古語である。」

しとしととお芋こやしの秋の雨

首里城に桑の實盗りの童あり

木の上にののしる童等や桑うるる

「やぶちゃん注…「童等」は「こら」と訓じているか。」

桑うるる高枝に鶏ののぼりをり

浦風に吹きまくらるる蚊帳かな

拾ひたる秋の燕の幼けき

拾ひたる秋の燕のぬくみ哉

浦人に颯風アラシの燕アサギひろはれぬ

日覆アサの中をあちこち散歩哉

そのかみの日時計臺や花杏子

「やぶちゃん注…単なる直感に過ぎないが、これは現在、鹿児島島の繁華街として知られる天文館の由来となった薩摩藩第二十五代藩主島津重豪が天体観測や暦の研究施設として建設された明時館（天文館は別名）にあった、薩摩藩だけが独自に編曆していた薩摩暦による日時計の台跡ではあるまいか（但し、明時館は明治の初期には廃亡していたという）。」

雲の峰たちて大わだ凧ぎにけり

颱風に戸をうばはれし二階かな

蟻の道たたみのへりをへりをくる

「やぶちゃん注…下五の「へりを」は中七の「へりを」（縁を）の文字通り、畳みかけである。」

秋燕に倒れし家のつづきけり

「やぶちゃん注…個人的に好きな句である。」

蘇鐵林汐枯れしたる颱風かな

島萩の花もつけしきなかりけり

雲の峰生ひならびぬ地平線

「やぶちゃん注…老婆心乍ら、「生ひならびぬ」は「うまひならびぬ」と読む。「生まふ」は動詞「うむ」の未然形に反復・継続の上代の助動詞「ふ」が附いたもので、産みふやす・どんどん産むの意の古語である。」

榕樹の根を吹きあらぶ野分かな

「やぶちゃん注：「榕樹」は「がじゅまる（がじゅまる）」と訓じていよう。」

蟻の道くる出だしくる迅さ哉

甲板をあるきて春を惜しみけり

雪の峰大海原に映りけり

颱風に折れ伏す甘蔗となりけり

柵經の僧をのせたる獨木舟クリギかな

「やぶちゃん注：「柵經」不詳。これは柵經（たなぎやう）（たなぎよう）の誤りで、孟蘭盆会の際に僧侶が精霊柵の前で読経することではあるまいか？」

犬つれて岬の春を惜しみけり

松風の絶えてはさびし月照忌

「やぶちゃん注：「月照忌」[既注](#)。」

流灯の橋をくぐりてゆきにけり

蘇鐵の葉しいてありたる上簇哉

「やぶちゃん注…「上簇」は「じやうぞく（じようぞく）」と読み、成熟した蚕を繭まぶしを作らせるために簇（蚕簿。蚕が繭を作る際の足場にするもので、ボール紙などを井桁（いげた）に組んで区画したものが用いられ、一区画に一つの繭を作らせる。ぞく。）に移し入れることをいう。あがり。上簇。夏の季語。」

提灯につりし小石や川施餓鬼

「やぶちゃん注…「川施餓鬼」「かはせがき（かわせがき）は川で亡くなった人の霊を弔うために川辺又は船中で行う仏事。死者の名を記した塔婆や紙片を川に流したりする。秋の季語。」

玲瓏と灯る小家や魂祭

蘆の艸をつけてありけり精靈船

「やぶちゃん注…「蘆」は底本では「芦」。

霧の中眞赤な幹が並びけり

「やぶちゃん注…裸子植物（球果植物）門マツ綱マツ目マツ科マツ属アカマツ *Pinus densiflora* か。」

ひやひやと長き廊下や安居寺

「やぶちゃん注…「安居」[既注](#)。先に掲げた（リンク先）の昭和六（一九三一）年十月発表の句に、

飲食をんじきのもの音もなき安居寺

十方にひびく梵や安居寺

一方の沙羅の香りや安居寺

の連作があり、この紀州高野山に於ける俳誌『山茶花』夏行に参加するため近畿地方に旅行した際の吟の一つと思われる。」

汐ひけば熱きいでゆや避暑の宿

噴水の日ざしはどこか秋めきぬ

噴水に叩れゐるやオットセイ

傘車かけ下つたる河原哉

「やぶちゃん注…以下五句は恐らく鹿児島の大行事の一つとされる曾我兄弟の仇討に由来するとされる伝統行事「曾我どんの傘焼き」(既注)の情景かと思われる。リンク先の「鹿児島三大行事保存会」公式サイトの「傘焼き」の引用はこれらのシチュエーション総てに当て嵌まるように思われる。」

玉串のつきさしてあり傘の山

拍手の響きて傘火ツ点きにけり

涉水シり傘くべにけり

旺ワウなる水合戦も傘火かな

臺々と龍舌蘭の臺高し

「やぶちゃん注：「臺々と」は「ちくちくと」と読み、直立して伸びるさま・聳え立つさまをいう形容動詞。「臺」は「たう（とう）」で花軸や花茎を指す。」

飛魚の霰に逢ひし舳かな

向日葵に庇の影のかかりたる

南風やうなぎきあへる芥子坊主

南風や龍舌蘭の花ざかり

ハブ壺をもちて従ふ童かな

門前の出水けたてて歸省哉

門川の溢れてゐたる歸省哉

一疋は背中に負ひぬ仔豚賣

船人と別れをおしむ日傘かな

「やぶちゃん注：「おしむ」はママ。」

ハブ捕のかもじを巻きし手先かな

「やぶちゃん注：「かもじ」は「髻」「髮文字」と書きく。「か」は「かみ(髮)」「かずら(髻)」などの頭音であり、「文字」は女房詞に於ける「文字言葉」と呼ばれるもの(語の後半を省き、その語の頭音又は前半部分を表す仮名の下に付いて、品よく言い表したり、婉曲に言い表したりする語で、ある語の頭音の一音乃至二音に「もじ」という語を付けたもの。「そもじ(≡そなた)」「はもじ(≡恥ずかし)」「ゆもじ(≡湯卷)」など。)である。元来は婦人が日本髪を結う際に添える毛、添え髪・入れ髪を指すが、ここは単に髪をいう女房詞の用法(「おかもじ」)であるが、してみると、次の句で「少年」とは出るが、このハブ捕りを沖繩の若さん女わか いなぐと取るのも面白い。」

いとけなき少年にして毒蛇捕り

「やぶちゃん注：前句で女房詞の「かもじ」を用いたのは、しかし、それが少女に見紛う紅顔の美少年であったからと読むのはたまたま面白い。」

南風や龍舌蘭の花高し

静かなる芭蕉の玉や青嵐

月いでて今宵の魚市の賑イチへる(海岸風景)

颱風にかまはぬ蟬のしらべ哉

「やぶちゃん注：底本では「蟬」は「蟪」であるが、PDFではご覧の通り、転倒してしまっているので新字体とした。」

颱風や畑畑の石圍ひ

春曉の機屋は覺めてゐたりけり

織娘等も海へ海へと夕涼み

房たるるバナナに支柱くれにけり

牡丹の塵こぼしたる机哉

南風や葵の花を傾けて

蚊遣香焚きつつ客を待ちにけり

涼風や悦び走る蚊火煙

機窓に咲きのぼりけり立葵

ゆらゆらと風鈴咲きや佛桑花

「やぶちちゃん注：「佛桑花」既注。「ふつなうげ（ふつそうげ）」。ビワモドキ亜綱アオイ目アオイ科フヨウ属ブソンウゲ *Chinese hibiscus*、即ち、ハイビスカスのこと。」

揚雲雀アダンの中へ逆落し

「やぶちちゃん注：「アダン」阿旦。単子葉植物綱タコノキ目タコノキ科タコノキ属アダン *Pandanus odoratissimus*。高さ約六メートルで幹の途中から太い支柱根を出す。熱帯性で

沖繩・台湾に自生し、潮風に強い。葉でパナマ帽や籠を、茎で弦楽器の胴を、根で煙管を作る。以下、[ウイキの「アダン」](#)によれば、果実は直径一五〜二〇センチメートル『ほどでパイナップルに似た外見であり、パイナップルと同様に集合果である。個々の果実は倒卵形で』、長さ四〜六センチメートル、幅三〜五センチメートル、『内果皮は繊維質、外果皮は肉質』で、『若いうちは緑だが熟すと黄色くなり、甘い芳香を発する』。『葉や幹は利用価値が高く、葉は煮て乾燥させた後、パナマ帽等の細工物としたり、細く裂いて糸とし、筵やカゴを編む素材として利用される。観葉植物や街路樹としても利用される』。『沖繩では古くからその葉で筵やござ、座布団、草履を作るなどの利用があった。風の糸にもアダンの繊維を撚った糸がもつれにくく適しているという。明治時代以降、加工技術の進歩に伴い、巻き煙草入れや手提げ鞆などが作られるようになったが、その後新たな素材の出現で衰えた。葉を漂白して作られたアダン葉帽子は一時期にブームを起こし、国外にまで輸出されるほどの好評を得た。モリシヤスでは製紙原料とされるとも言う。また、気根を裂いて縄とし、またその縄を編んでアンツクという手提げ鞆とする事も八重山では伝統的に行われ、これに昼食用の芋や豆腐などを入れて畑に出たという』。『防潮林・防風林・砂防林としても利用され、また観賞用に庭園などに栽培されることもある』。『パイナップルのような外観と甘い芳香のため、果実はいかにも美味に見えるが、ほとんどが繊維質で人間が食べるには適さない。果実の表面に存在する突起の一箇所ごとが種子になっていて、その中心の松の実のような柔らかい白い箇所が可食部である。果実は硬い繊維質に包まれており、可食部を取り出す手間に見合う味と量ではないため、現在の沖繩県で食べる習慣は廃れてしまったが、過去にはアダンの果実でアンダンスーを作った。また、沖繩では昔食用とされたことからお盆には仏前にアダンの果実を供える習慣があったが、現在はパイナップルが使われ』ている。『また、石垣島ではアダンの柔らかい新芽を法事やお盆などの際の精進料理に用いる習慣が』あり、『他の野菜と共に精進煮とし、くせのない若筍のような味だ』というが、灰汁を抜かないと食べられず、手間がかかるため現在ではあまり食用にされない』とある。」

蟻達がほしいままなる座敷哉

揚雲雀風強ければ流れつつ

まなかひに逆落しくる雲雀哉

南風や出船を送る遊女達

大いなる守宮の聲や蚊火の宿

炎天や女も馬にうちまたぎ

薊咲く古墳の春は闌けにけり

奥津城に歩とのあふれて鶏合せ

熔岩山に轉る鳥の名を知らず

慈善鍋三井銀行の扉の前に

鬪鶏の人輪に佇てば酒の香が

鬪鶏やしめし合せの檳榔林

鬪鶏の人輪の中の娼婦かな

鶏合せ古墳の庭に始めけり

薊咲く古墳の春はたけにけり

玉芒全きままに枯れにけり

「やぶちゃん注:yahantei氏のブログ」さまざまな俳人群像——虚子・反虚子の流れ——」の『[茅舎追想その十二](#)』龍子の「龍子記念館」と茅舎の「[青露庵](#)」の記載の中で、川端茅舎の句、

玉芒ぎざぎざの露ながれけり

を掲げて、以下のように解説されておられる（下線部やぶちゃん）。

《引用開始》

この句は茅舎の代表句ではなからう。また、茅舎に関する文献などでも、この句を取り上げて鑑賞しているものも皆無に近い。また、現在では、この句碑が一部不鮮明で、同時の作と思われる「玉芒みだれて露を凝らしけり」と紹介されているものも目にする。

この句は、昭和七年作で、茅舎の第一句集『川端茅舎句集』では、冒頭の「秋の部」で、「露」の句を二十六句続けて、「露の茅舎」と称えられるのだが、その二十六句のうちの十二番目に出てくるものである。

この句の「玉芒」というのは、「玉のような露が宿っている芒」という意で、茅舎の造語であろうか。「芒」（秋の季語）と「露」（秋の季語）の「季重り」であるが、「芒」の句というよりも「露」の句で、この「玉芒」の「玉」がそれを暗示していて、「季重り」を回避しているようで、技巧的な句でもある。「ぎざぎざ」も、畳語の擬態語で、「オノマトペ」（擬音語と擬態語を総称しての擬声語）の「茅舎」と言われるほどに、茅舎が多用している特色の一つで、茅舎ならではの句という印象は受ける。

《引用終了》

確かに茅舎の句の「玉芒」はこの説明で納得出来るのであるが、どうも鳳作の場合、既出の芭蕉玉を詠ったものがあるために、私には穂がほうける前、芒のほくろに包まったままの芒（「芭蕉玉」ならぬ「芒玉」）がそのままに枯れてしまったと読みたくなった。しかし、それでは景とならない、「芒玉」などナンセンスというのであれば、やはり、開いた芒の穂が露をいっばい受けながらも、「全き枯れにけり」、白く縮れて完全な骨骸となって枯れたままに佇立しているという意が正しいのであろうか。暫く大方の御批判を俟つものである。」

先生も生徒も甘蔗の杖ついて

熔岩の上蕨は小手をかざしけり

「やぶちゃん注：老婆心乍ら、「熔岩」は「ラバ」で「ラバのうへ／わらびはこてを」と読む。」

火の見番見下しゐるや鶏合せ

阿羅漢の白けし顔や涅槃像

舊正や屋敷屋敷の花樗

「やぶちゃん注」当時、鳳作が赴任していた宮古に限らず、大陸文化の強い影響を受けて来た沖縄・南西諸島に於いては、現在でも旧正月に各種祭事が集中し、盛大に執り行われている。「花樗」は「はなあうち（はなおうち）」と読む。既注であるが再掲すると、センダン、一名センダンノキの古名。ムクロジ目センダン科センダン *Melia azedarach* の花。初夏五〜六月頃に若枝の葉腋に淡紫色の五弁の小花を多数円錐状に咲かせる。因みに、「梅檀は双葉より芳し」の「梅檀」はこれではなく白檀の中国名（ビヤクダン目ビヤクダン科ビヤクダン属ビヤクダン *Santalum album*）なので注意（しかもビヤクダン *Santalum album* は植物体本体からは芳香を発散しないからこの諺自体は頗る正しくない。なお、切り出された心材の芳香は精油成分に基づく）。[グーグル画像検索「梅檀の花」](#)。]

絵日傘を廻しつつくる禮者哉

「やぶちゃん注」「廻」は正字としたかったが、PDFでは表示不能なので新字体とした。前句との並びから推測すると、この「禮者」とは旧正月の挨拶廻りと読めるように思われる。」

探梅や裏御門より許さるる

蜜柑山晝餉の煙上りけり

儲けなき鯛をうつて歩きけり

枯野道 罎車の續きけり

遊び女のながきいのりや東風の宮

「やぶちゃん注：「東風の宮」 太宰府天満宮のことか。」

砂掘りて松露焼く火を育てけり

「やぶちゃん注：「松露」 食用茸の一種。菌界ディカリア亜界担子菌門ハラタケ目ハラタケ綱ハラタケ亜綱イグチ目ヌメリイグチ亜目シウロ科シウロ *Rhizopogon roseolu*。参照したウィキの「シウロ」によれば、『二針葉性のマツ属（アカマツ・クロマツなど）の樹下で見出され、本州・四国・九州』に自生する。『子実体は歪んだ塊状をなし、ひげ根状の菌糸束が表面にまといつく。初めは白色であるが成熟に伴って次第に黄褐色を呈し、地上に掘り出したり傷つけたりすると淡紅色に変わる。外皮は剥げにくく、内部は薄い隔壁に囲まれた微細な空隙を生じてスポンジ状を呈し、幼時は純白色で弾力に富むが、成熟するに従って次第に黄褐色ないし黒褐色に変色するとともに弾力を失い、最後には粘液状に液化する』。『胞子は楕円形で薄壁・平滑、成熟時には暗褐色を呈し、しばしば』一〜二『個の小さな油滴を含む。担子器はこん棒状をなし、無色かつ薄壁、先端には角状の小柄を欠き』、六〜八『個の胞子を生じる』。『子実体の外皮層の菌糸は淡褐色で薄壁ないしいくぶん厚壁、通常はかすがい連結を欠いている。子実体内部の隔壁 (Tramal Plate) の実質部の菌糸は無色・薄壁、時にかすがい連結を有することがある』。『単純な球塊状の子実体を形成することから、古くは腹菌類の一種として扱われてきたが、マツ属の樹木に限って外生菌根を形成することや、胞子の所見・子実体が含有する色素成分などが共通することに加え、分子系統学的解析の結果に基づき、現在ではヌメリイグチ属に類縁関係を持つとして、イグチ目のヌメリイグチ亜目に置かれている』。『安全かつ美味な食用菌の一つで、古くから珍重されたが、発見が容易でないため希少価値が高い。現代では、マツ林の管理不足による環境悪化に伴い、産出量が激減し、市場には出回ることが非常に少なくなっている。栽培の試みもあるが、まだ商業的成功には至っていない』。『未熟で内部がまだ純白色を保っているものを最上とし、これを俗にコメシウロ（米松露）と称する。薄い食塩水できれいに洗って砂粒などを除去した後、吸い物の実・塩焼き・茶碗蒸しの具などとして食用に供するのが一般的である。成熟とともに内部が黄褐色を帯びたものはムギシウロ（麦松露）と呼ばれ、食材としての評価はやや劣るとされる。さらに成熟が進んだものは弾力を失い、色調も黒褐色となり、一種の悪臭を発するために食用としては利用されな

い』とある。私の亡き母は鹿児島の大隅半島中央の岩川に育ったが、若い頃にはよく兄とともにこのシヨウロを採りに行ったと語っていた。私は哀しいかな、食べたことがない。」

住吉の垣のうちなる松露搔

「やぶちゃん注…「住吉」恐らくは現在の鹿児島県鹿児島市住吉町ぢょうであろう。旧鹿児島城下町住吉町で鹿児島市の中部に当たり、桜島の対岸の薩摩半島東の根元にある。」

風波の麥生進むが如くなり

ほどばしる枝の眞青や立穂梅

「やぶちゃん注…「立穂梅」穂立ちという語があり、これは稲の穂が出ることを指すから、丁度その八月上旬頃の梅木立という謂いか。」

大兵でおはし給ふなる寢釋迦哉

舊正や屋敷屋敷の花樗

芝山やそこここ立てる霜圍ひ

海苔採女はだしのままの家路哉

「やぶちゃん注…「海苔採女」は「のりとりめ」と読んでいよう。」

海苔採りに沖つ白波たちそめぬ

海苔採りにあきし心や遠霞

酔ざめの面て伏せゐる火桶哉

霜圍ひ覗き覗きて園巡り

水涕のすすりあへなくなりにつけり

破れ障子兒澤山と見えにける

鍔入れしままの火桶に招じけり

寒卵溜るばかりに貰ひけり(微恙)

掌に唾一ト吐きや年木樵

月の菊白とも見ゆれはた黄とも

大根干すうなじ打つたる霜雫

馳せよりに後ろ押しけり稻車

合住みの友を頼りや風邪籠り

もろ共に肥えて蝗のめをと哉

掛乞のおそれをなして歸りけり

「やぶちやん注…「掛乞」は「かけごひ（かけごい）」と読み、掛け売り（代金後払いの約束で品物を売ること）の代金を取り立てに来る人のこと。」

おでん屋の湯氣の中なる主かな

書出しを留守のとぼそに挟みけり

「やぶちやん注…「書出し」掛け売りで買い、その溜まっている代金の請求書。特に年末の決済のための請求書。勘定書。つけ。」

おでん屋をぬくもり出づるきほひ哉

「やぶちやん注…これらの四句、偶然かも知れないが連続したものとして読め、さすれば、つっぱらかって偉そうにしかも安いおでん如きをつけて食っていた詩人、そのおでん屋の気のいいしかも気の弱い主人というシチュエーションが小気味いい組み写真となるよう思われるのであるが、如何？」

斑猫に足の運びを早めけり

「やぶちやん注…「斑猫」は鞘翅（コウチュウ）目オサムシ亜目オサムシ上科ハンミョウ科ナシハンミョウ *Cicindela japonica*、所謂、ミチオシエである。人が近づくと一、二メートル程飛んで直ぐ着地するという行動を繰り返し、その過程で度々、後ろを振り返るような動作をする本種の習性をうまく詠み込んでいる。なお、「斑猫」全般については、私の電子テキスト「[耳囊](#) [卷之五](#) [毒蝶の事](#)」の注で詳細を述べておいた。是非、参照されたい。」

道をしへ落陽の方へ返しけり

畦ゆけば畦ゆけばとぶ蝨かな

「やぶちゃん注…「蝨」は「いなご」と読む。」

御佛の小さき障子や洗ひをり

町中となりし田圃の案山子かな

一刀をた挟む兵兒の案山子かな

「やぶちゃん注…「兵兒」は「へこ」と読み、鹿児島地方で、十五歳以上二十五歳以下の青年を指す語である。「へこ」には禪ふんてしの意があるが、「日本国語大辞典」には、これは同地方で十五歳になった者に対して正月二日に近親血縁者が祝いに行き、手拭いと禪を贈る儀礼「へこかきいわい」が済んだ男子の意を語源とするか、とある。また、男子や子供用のしごき帯を兵兒帯と呼ぶが、これ自体が元は薩摩のまさに前に出した兵兒へこが用いた帯びであったことに由来するという、ともある。私の母は鹿児島出身であったが、これらは私の全く知らない事柄で、まっこと、目から鱗であった。」

雨の蘆てらして戻る夜振哉

「やぶちゃん注…「夜振」老婆心乍ら、「よぶり」と読み、夏の夜にカンテラや松明などを灯して時に振り動かし、それに向かって寄ってくる魚を獲る漁法の名。火振り。」

鰯雲月の面にかかりそむ

サボテンの影地に濃ゆき良夜哉

石切のほつたて小屋や葛の花

潮騒のとほくきこゆる門火かな

郊外に住みて野分をおそれけり

歸省子のもてる小さきクロス哉

龜の子のはひ上りゐる浮葉かな

船蟲のひげ動かして機嫌かな

「やぶちゃん注」：「船蟲」の「蟲」は底本では「虫」。

いねがての團扇はたはたつかひけり

蜻蛉追ふ子等の面も夕やけぬ

案山子翁裏にも顔のかかれけり

渡り鳥仰ぐ端居となりにけり

竜胆に今年の雲の早さかな

「やぶちゃん注」は底本のママ。

これを以って初期作品は終わる。以上で底本の俳句編の電子化を終了した。これが現在知られる篠原鳳作の全俳句である。」